

川柳塔

平成十四年九月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷九〇四号



日川協加盟

No. 904

九月号

第8回 川柳塔まつり

<同人総会>

と き 10月6日(日) 午前10時-11時

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F生駒

(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)

議 事 平成13年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成14年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

<各賞表彰式・記念句会>

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F金剛 中・西

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「誤読もまた楽し」 乗 原 道 夫
兼 題 「のりもの」 (大 阪) 山 本 希久子 選
「光 る」 (富 山) 島 ひかる 選
「天 下」 (鳥 取) 西 原 艶 子 選
「おいしい」 (和歌山) 桜 井 千 秀 選
「雑 魚」 (広 島) 小 島 蘭 幸 選
「無 限」(事前投句・9月10日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後4時半終了予定

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

<懇親宴>

と き 同 日 午後5時-7時半

ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F葛城

会 費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

- 事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月10日(火)までに本社事務所宛お願いします。
- 懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。
- 記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

白日夢

河内 天笑

川柳塔の事務所へ行く用事があってコンビニでお弁当を買うことにしました。いろいろ陳列された中から冷しそばとおにぎり一個を買って四百円ほど。ああおいしかった、ごちそうさん。そして食事に出られた皆さんが帰られるまでの暫くをふっと、白日夢のように昔を思い出していました。「家に帰ったら昔の『川柳雑誌』から物のなかつた頃の句を見てみよう」。そして、一番わかり易くて軽妙な須崎豆秋さんの作品を一冊ずつ追いかけてました。物がだんだん不足してきた昭和十六年春に、私は国民学校一年生になりました。(以下引用句すべて須崎豆秋さんの作品原文のままです。)

ワンワンよ気の毒ながら米が無い
カステラへ蟻の真似して列ぶなり
そして同年十二月八日

モヤ、がいちどに晴れたみことのり
統制経済下の巷には「トントントンカラ

リンととなりぐみ」の歌が流行り、勇ましい軍歌の波が押し寄せ、兵隊さんの行軍がどかどか行く異様な光景を目の当たりにし、銃後の町にはもんべ姿のお姉さん達の頑張る姿がありました。

小包の餅がどいた夢を見る

陥落をせんざい煮いて祝うなり

ここまでは借金とりも来ぬ櫻

転業をしてソロバンにカビが生え

ふるさとの螢をおもふ目を閉じて

食糧難が日増しにきつくなる中、国民は月月火水木金で文句も言わずよく働かされました。軍艦マーチにはじまる大本営発表には、胸を躍らせて歓喜の声を上げていました。

塵箱へ突つ立ち上り袂別す

豆腐買うのに判が要る判が要る

交番の机にすきおみなへし

夜の蜘蛛足を一本置いて逃げ

しかし、実際の戦局はもうこのころから撤退に次ぐ撤退だったのです。

松飾り月當番の札も下げ

大根の足が出ているリュックサック

雑炊のやうな夢見る寝正月

チボ今日は国民服で出かけた

二度とふたび経験したくもないこの時代ですが、豆秋さんの作品を追っかけていると、苦しさの中に不屈のユーモアが溢れて居り、ぐいぐいと戦中物語に引き込まれてしまいます。

ガンジーを御覧なさいと昼を抜き

モンペイはいいが踵の高い靴

管制の闇にお琴が鳴つてゐる

法善寺鼻をつままれそうに抜け

さんばつ屋仕事にかかる巻脚絆

B通過あとはしばらくほととぎす

『川柳雑誌』は諸般の事情で昭和十八年十二月号でひと先ずの終止符。そして進駐軍の朗らかな音楽が聴かれる中で、不死鳥の如く再刊の筆をとられました。曰く、「川柳雑誌の生みの親は私であるが、育ての親は一つに諸君の手でなければならぬ。頼むぞ諸君！」とあります。

(昭和二十二年八月再刊)

お月さんさんねんながら負けました
生きていてよかつた春の夜を歩るく
ほとけさんこれ十圓のまんちゅです
ちちははにめぐりあひたや靴みがく



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

私の句

尖り過ぎ色鉛筆の折れ易し

(路郎)

北野哲男

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 白日夢……………	河内天笑……………(1)
人の運は食にあり……………	遠山可住……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	河内天笑選……………(4)
自選集……………	
水煙抄……………	奥田みつ子選……………(59)
麻生路郎物語(9)……………	東野大八……………(84)
愛染帖……………	波多野五葉庵選……………(87)
誹風柳多留二四篇研究……………	
茴香の花……………	波多野五葉庵選……………(90)
「小説」……………	政岡日枝子選……………(92)
「小説」……………	井伊東吉選……………(94)
一路集「ライン」……………	山根めぐみ選……………(94)
「この頃」……………	小澤幸泉選……………(95)

人の運は食に在り

遠山可住



衣・食・住——生活の基礎の中で、個人の裁量にまかせ切りで「ライバシー」でもあったのが「食」の分野である。

そして今、高齢化社会になつて健康食が俄然表舞台に登場、正に花盛りブームである。私は若い頃、中国で二年程、小学校の先生をしていたが、いろいろ教わつた中に中国の食の基礎がある。それは、「自分の住んでいる所を中心に一里四方で穫れたものを食べていれば無病息災」というのである。これは風土の大切さを教えたものと思われるが、私はその中でも特に水系ではないかと思つている。私は一年中消費するお茶を家の畑で自給しているが、お茶は一番この水との相性が決める手となることを、古老から教えられたことがある。なるほど、どんな高価なお茶や薬効高き中国茶よりも、家で穫れた番茶が一番家の水に合つておいしいことを実感している。よく似た話だが、建築家のベテランの話で

初歩教室「ペット」……………	吐田公一……………	(96)
秀句鑑賞「同人吟」……………	堀端三男……………	(98)
水煙抄……………	田辺鹿太……………	(103)
■同人特集 動物 百句……………		(100)
みちのくの風……………		(104)
翠洋会二十周年記念吟行句会……………	天正千梢……………	(106)
多哥由さん 安らかに……………	村上信子……………	(107)
八月本社句会……………		(108)
■エッセー ニューオリンズは癒しの街……………	早川棲世……………	(112)
各地柳壇（佳句地十選／井上富子）……………		(113)
柳界展望……………		(129)
九月各地句会案内……………		(130)
■編集後記……………	楓葉・朱夏……………	(132)



座右の句
主治医が信頼出来る有難さ
私の句

いろいろな音が聞こえる生きている
楠 昭子

(天 笑)

は本造の家を新築する時、その用材は近くの山の木を使えば百年経っても狂わないという。どちらも自然が生んだ「ほんまもん」の贈り物という思いがしてならない。

米を除けば日本の食糧自給率は今や半分にも満たないし、新鮮な野菜類も中国や東南アジア産がコンビニの店頭を飾る時代である。

また、農産物には旬というものがある。トマトやスイカの夏野菜は体温を下げてくれるし、大根や白菜は体温を温めてくれる冬の作物である。小さい時から、世界中の食べ物、年中季節感もなく食べている日本人の体は、健康は、一体どうなるのだろうか。底知れぬおそろしさが湧いて来る。

農家も農外収入に依存して、自給を心がけられるのは年寄りのいる家庭に限られ、年間自給の家庭菜園など手が回らず、やっぱりコンビニに走るようになってくる。幸い私は農業者であり、ここに言う年寄り組であり、野菜作りの専門畑を歩いて来た。動物性蛋白以外は自給を心がけ、特に野菜類は四季を通じて買ったことがない。近所の人達に「旬の野菜をバケツ一杯食べよう」と呼びかけている。

自分の体は自分で守る。一七五七年生れという時代に「観相極意抄」を著した水野南北は「人の運は食にあり」と喝破されている。勿論、遺伝子云々となると私もお手上げである。



河内天笑選

唐津市 久保正劍

玉手箱風速ゼロの煙立つ

七光ないので芸を盗む日日

矢印を辿れば怖い検査室

神様と出会って見たい籤を買う

父の日に転ばぬ先の杖貰う

消費税毎月多額納税者

大阪市 板東倫子

限りある生命で蜚乱舞する

あくせくと生きて未だに遊び下手

梅雨の空雷鳴らし雹降らす

紫の色増しあやめの物思い

口ポットを妻にしたなら気安かる

韓国をバツと切つたらキムチ色

米子市 鷺見正子

ひもとけば青い吐息の日記帳

産む技を神は女にくださった

この夕陽街に住む子に送りたい

癌に効くセロリ毎日食べておく

直線で出せる力は本物だ

前掛けに鱗のついた魚屋へ

尼崎市 田辺鹿太

父にしか分からね父の日の悲哀

故郷には昔のままの地図がある

止めてんかいつまで続く語尾上がり

わが妻を愚妻ですとはよう言わん

腐っても鯛とはいやな誉め言葉

これも愛ですよと拾う一円貨

東大阪市 谷口義

盂蘭盆会思い出せない父の癖

遊び癖今頃ついたわけでない

自慢することがないので座り替え

喜んでくれたわりには放つてある

言い過ぎた日は腹式呼吸してねむる

家計簿を上手につけて離婚する

西宮市 西口 いわゑ

約束を守らなかつた岡の上
ライバルと言われ幸せ感走る
小さい手大きな手からもらう愛
本音と本音とても楽しい酒になる
あれ これで通じるまでの五十年
女です金銀銅の涙もつ

鳥取市 岸本 宏章

子を思うためのパンチと子は知らず
慰めの言葉本気で受け止めぬ
中流に慣れて貧富の差を忘れ
少しだけ汚れにんげんらしくなる
残念が顔に出るから負けられぬ
精神がこどものままで親になる

箕面市 岩津 ようじ

強いられぬ日の丸かくも清々し
俊輔がいたらと思うあのキツク
心臓もイエローカードもらつて
大大阪こぼれ落ちそう失業者
備えあれば戦争しなくなった過去
辛口のぬる爛が好き親ゆずり

美祢市 安平次 弘道

秘め事があつて押せない削除キー
ラッパ吹く父の悲しい顔を見た
深読みをしてコーヒーが苦くなる

葬儀屋の真面目な顔が笑えるか
ブライドがあつてドラマを演じ切る
喜劇から悲劇へ錯覚が続く

鳥取県 石谷 美恵子

どちらにも応えたいのに身は一つ
草枯らす葉で土は痴呆症
まだ死ねぬ炊事のできぬ夫といふ
情報に早い黒ずくめの女
忠魂碑訪う人もなく草むして
すすすすと元氣よいのはこぼれ種

京都府 丹後屋 肇

超高層ビルが沈める天守閣
手摺り持つ横を少女が駆け上がる
恩給で齢を癒やす未亡人
うぐいすの音が整う五月晴れ
向き合つて喪章と喪服かしこまり
優待の席で驕れるミニの脚

鳥取市 録沢 風花

八月の祈りは続く世紀越え
国会の鬱も忘れたW杯
W杯強い闘志を学びとる
雲も風も国文祭へ動きだす
ごめんねと言えば溶けてるわだかまり
長寿食買つて百歳までの夢

松江市 銭 山 昌 枝
イチニのサンで一緒に死ねたらいいのにね
わたくしの思いが焦っている

孫が来た寄って集って甘やかす
反抗期わたしはもつと凄かった
ゴキブリを見ると殺意が湧いてくる
女医さんも茶髪でタクト振っている

唐津市 井 上 勝 視

年金にやはり隣は青い芝
満点の妻はストレス溜めている
ひきずった影に時どき怯えてる
NHKばかり見ている老いたカナ
音痴だが今日も与作の仕舞風呂
主導権の老妻この頃肥満きみ

熊本市 永 田 俊 子

電話では見えない白髪逢わぬが花
言いたいこと言えずに続く偏頭痛
ダンボールに詰めた秘密はあばかれる
折鶴が匙投げ出した平和論
リストラ知らぬ蟻たちの労働歌
世渡りも料理も下手で長生きし

愛媛県 中 居 善 信

通り雨そんな小さな恋もした
焼酎が好きだとおんな四十過ぎ
泣くことを棄てた女の酒依存

走れ走れリバウドのごと子よ走れ
聞き流す事も覚えた六十五
臍出して昼寝だあれもやって来ぬ

香川県 清 川 玲 子

包まずに話せる母はもう居ない
いつまでも手を振る母の田んぼ道
ぬか漬けをする時とても元気な手
職人が命吹き込むええ仕事

世紀末賑わし消えたたまごっち
胎動の強さに弾むマタニティー

香川県 川 崎 ひかり

目標をなくしてからの転びぐせ
いい時間過ごし余韻の茶をすする
W杯若者憂う事なかれ
流し目は美女の特権かもしれぬ
世界地図とところどころがキナ臭い
愛国心私にもわかサポーター

高知県 赤 川 菊 野

賞状をかざった部屋で待たされる
一期一会アリラン祭の渦の中
パソコンで錆びた頭を研いでる
返杯の一つひとつにある妬心
カナカナが哀しい声で母を呼ぶ
カスミ草あなたは花のクインです

弘前市 宮崎 ヒサ子

夏咲きの花芽が笑いかけてくる
背を伸ばすだけで気持が若返る

台風一過 夏の太陽容赦なく

短い夏を精いっぱい生きていく

何をこせこせしているのかと雲が言う

この夏は強気で行くと決めている

弘前市 高橋 岳水

定年の河童の皿は罅だらけ

晩学の辞書を朱線で塗りつぶす

脇役で生きるパセリの葉緑素

どんだ底を抜け出す縄を汗で縛う

朝の靴履けば男に待ついくさ

少年の夢を巣箱であたためる

弘前市 今 愁女

西方の浄土に流る天の川

七夕やうちの牽牛ままならず

朝顔の蔓の自由は天を駆け

ほつほつと水引きの花紅を差し

胡弓の音の哀愁とどめ風の盆

夜を明かし踊りてみまし風の盆

横浜市 小野 匂多留

介護保険証遂に来たかという感じ

TVに身をのけぞらす球もあり

素通りも出来ぬ小ギヤルのカタカナ語

花氷つかの間の汗癒してる

ケイタイで親呼びつける遠隔地

日本の昭和の演歌また消える(村田氏死去)

横浜市 保田 絹子

ワールドカップ世界の壁を低くする

かたくなな意地が最後のエネルギー

菜園の実り寝坊の朝を変え

エリートの一直線が味気ない

マニユアルの通りに起る副作用

懐かしの写真時間を止めたまま

東京都 播本 充子

東京の外れに棲んでいる天狗

6Bを愛用してる情熱家

わがままになったワこれも歳のせい

噂にもならぬ男にビール注ぐ

懸命が周囲の人を疲れさせ

嘘ついた事を忘れていた不覚

川崎市 和泉 あかり

紫陽花の生き生きとして雨催い

笹竹の願いさらさら風の中

リフォームへ少し勇氣も足してある

こだわりは足の三里へ灸据える

わたくしを組立て直す旅半ば

人恋の酒を酌ませる風の盆

愛知県 早川盛夫

大山へようこそ城と鶴飼船
城で会い鶴飼で会えばもう仲間
観光の目玉鶴飼とアユの膳
泳がないことも忘れて鶴飼船
鶴がぼくで鶴匠が妻というドラマ
ふる里を聞けば鶴飼で知れた町

京都市 高島啓子

目立つのをまず歌わせるのど自慢
癖も皆個性と大らかに育て
買うものが無くても入る百貨店
弁当に入れる解凍玉子焼
一枚目出すに手こずるティッシュかな
蝶になり肩にとまってみたい人

和歌山市 桜井千秀

こと巧く運び過ぎても気味悪い
朝のトイレで今日一日のプラン練る
以心伝心仏頂面が向こうから
夏風邪を隣の猫に見舞われる
蹲って再度飛ぶ日へ羽繕い
故障した勘を逆撫でする猛暑

海南省 三宅保州

知らないとすんでしまったことなのに
憎んでも憎み切れない血の絆
支えられているからこそトップです

古里は形状記憶しています
歯磨いているとき話しかけないで
釣れそうな池に限って釣り禁止

和歌山市 木本朱夏

虫ピンが輝いている少年期
きりぎりすバタリと夏を裏返す
タンゴ踊るように金魚はターンする
下町が輝いている夏祭
遺伝子が騒ぐ祭の笛太鼓
砂漠化が始まっている脳細胞

和歌山市 古久保和子

暑苦しいものはゼーんぶ押し入れへ
交番であれこれ聞かれ落し物
オートロック他人行儀な妻の声
丁寧に西瓜の種を取る男
わが家ではビールと言えば発泡酒
への字しの字うちの畑の胡瓜たち

和歌山市 福井桂香

台所磨いて梅雨の終りけり
整列を少し崩している早苗
うたた寝の夢にゆらゆら金魚の尾
アジアンタムの森に抱かれてティータイム
樹の幹にらしくらしくと嘘のあと
サポーターのウエーブ一味唐がらし

和歌山市 吉村 さち子

子離れに終りがないと悟るまで
頑張った脛もぼつぼつ愚痴こぼす

食べ頃を逆算しての糠の床

ストレスを楯にわたしのシヨッピンゲ

深呼吸梅雨の晴れ間にこころ干す

長生きも楽ではないね ねえ母さん

和歌山市 川上 大輪

追い越していけないものに霊柩車

胃カメラに写ってました言葉尻

遠回りして辻褄を合わせとく

くすぐればウフフと笑う女偏

雑巾でもいいよ使つてくれるなら

放浪の果てに喫煙場所に着く

出雲市 城 多喜

髪の毛の先からボンと発火する

散らし合う火花もやがて消えてゆく

妬心まだちよろりちよろりと舌を出す

久し振り昔にかえり糠袋

畳にはお世話になった座り胼胝

雨あがる黒雲みんな引きつれて

出雲市 青山 久子

実のなる木丁度手ごろな距離にある

はぐれ鳥細く啼いてる耳の底

メ切はあしたはげしく鈴が鳴る

迷うことないよあんなに青い空

うまいもの食べる話にひよいと乗る

サツカーの余韻にゆれるペンダント

出雲市 小玉 満江

蟬螂と手話を交した草の道

風がやみ光にとけた二人連れ

寶石のように海から陽がのぼる

夕陽落ちまだ泳いでる金目鯛

年齢にそむいてぎっくり腰貫う

深い森グリーンシャワーの中で寝る

出雲市 岸 桂子

狂い咲く花も地球も人間も

本心を書けば重たくなる便り

つき当る壁に初心を掘りおこす

趣味一つこれから先の杖とする

レントゲンに写らぬ疵が胸にある

決別の涙は流れるままがいい

出雲市 佐藤 治代

ささやかなおしゃれ私の夏帽子

老いて行くことの早さよ砂時計

平凡に甘え我がまま言っている

飽きた顔それでも夫婦止められず

情けないことばかりをてのひらに

雨の日のために繕い物がある

出雲市 竹 治 ちかし

春風に吹かれて北の旅に出る
陸奥で腹一杯に三味を聞く
幸せな旅だ女房と酒を連れ
幸せは小出し長生きしたいから
不機嫌な富士は裾野をちよつと見せ
気づかないうちに内からほころびる

松江市 三 島 淙 丘

美しい街だカラスは住みにくい
いちじくが花とは知らぬ小鳥たち
繁栄の裏で人情瘦せていく
どんな夢見てるか孫の口が笑む
今晚も疑問符消えぬまま眠る
辛辣な言葉も今は丸く受け

松江市 津 川 紫 晃

トンネルを抜けると口が乾いてた
夏帽子うしろ姿で勝負する
絵本のなかきれいな風が吹いている
満ち足りて男が男くさくなる
エアコンの外に野人の夏がある
洗濯機回して夫婦仲が良い

鳥根県 多々納 テル子

太陽を食べた果物買って来る
頑張るぞ気合いを入れて動く朝
くしゃくしゃの心の皺も湯のしする

脳みその眠りをさます朝のモカ
晴れ曇り神の恵みのまま生きる
ボランティア出雲の神話語り継ぐ

鳥根県 森 茂 美

猫車押す老農に陽が落ちる
かまきりが有事の鎌をふりかざす
蛍の灯子孫を遺す光だな
青テント大阪城を包囲して
変人に手品のネタは明かすまじ
W杯知らぬお国を探す地図

鳥根県 土 橋 はるお

ブクブクと金魚も法螺を吹いている
失敗は多分死ぬまで繰り返す
手八丁口八丁で忙しい
姑さんが箸でタクトを振ってる
八月の結婚式はTシャツじゃ
夕立が止むまで待てば売り切れる

鳥取県 塔 寛 子

断れぬたちで暦に追われてる
お声のかかる幸せ老齡トシをもって余す
ダイヤより高い補聴器つけている
慰めて愚痴って独居羨んで
母の日を忘れてるらしまあいいか
薄塩で甘味誘える姑だった

鳥取県 新家 完司

飛行機も船も危ないから歩く
還暦の梅雨はひときわ蒸し暑い
台風を喜んでゐる雨蛙

ひとかどのサムライであるブルドッグ
皿ですと主張している紙の皿
我が祖国礼儀正しい箸の国

鳥取県 橋本 多哥由

七歳で先生に恋してしまふ
幸せになる晩酌を欠かさない
自画自賛だんだん悔いが深くなる
花に酔い人の情けに包まれる
花一輪茶室に無駄なものはない
恋ならばこそ少々の無理をする

鳥取県 谷口 次男

雑音を吐くとラジオは叩かれる
夢フェスタとつとりついに正夢に
カラスにはカラスの論理ゴミの日よ
サメがきて白兎の海がにぎやかに
亡き父はラジオが好きで抱いて寝た
あれからは薬のように飲むビール

鳥取県 羽津川 公乃

方言も消えて世代が若返る
わたくしのために毎朝三千歩
多国籍肩寄せ合つて冷蔵庫

ライバルは今エリートで遠い人
適量を過ぎたか口がよく滑る
耳障りな言葉が溜まる今日のウツ

鳥取県 乾 喜与志

ありがたやお寺参りに杖がある
若者の頭の赤いのはなぜだ
曾孫らの黒い頭を撫でてやる
目も耳も古くなつたが達者です
ご先祖を迎え語れる五蘭盆会
ひからびた蚯蚓を運ぶ蟻のむれ

鳥取県 西原 艶子

一流の外食よりもうちの飯
お砂糖をまぶした言葉だとわかる
能面のようにすました恋ごころ
失恋の痛手無口にしてしまふ
まだ夢を紡ぐ余裕は持つている
トラブルを抱いて生き生き日が巡る

鳥取県 さえき やえ

思うことありネジ花は野辺に咲く
人の上に立てぬ帽子でかぶりよい
投薬を待つ間世間を広くする
飽食のあがきに添える箸がない
来るをこばまず帰る人には手みやげを
十指にいつも生きる火種を抱いている

鳥取市 岸本孝子
むつつりと生きて世間を狭くする

親孝行昔ばなしにしてならぬ

マネキンがその気にさせる試着室

梅らつきよ今年も無事に漬けました

腹七分守れば着れるMサイズ

一日一善ころがけてはいるけれど

鳥取市 美田旋風

自慢みな聞かされ褒めるのはやめる

背伸びして暮らせれば疲れ出てこよう

点滴へ戦う両手傷だらけ

ちよつとした弾みで野心見てしまう

その歳で汚点残せば過去が泣く

責任となると他人の顔になる

鳥取市 倉益一瑤

滑走路一会へ急ぐ夢を乗せ

シベリア鉄道戦の傷を乗せたまま

白夜の大地不思議な時間流れゆく

アムール川の夕陽言葉が出て来ない

慰霊碑がドラマを語りかけて来る

背のびして外国人とハイポーズ

鳥取市 福田登美

しがらみを暫く忘れ遠花火

白足袋が祭りの情緒深くする

涼しげに踊るゆかたに滲む汗

老いながら楚楚と生きたい身嗜み
好い友は心の宝温かい

纏れたらゆつくり解こう赤い糸

鳥取市 植田一京

ときどきは元気ですかとラブコール

てにをはの好みで今日も揉めている

思考力ダウン暑さのせいにする

越えてきた月日無駄ではなかったな

自分史の外に本音は伏せてある

ときどきは居酒屋という逃げどころ

鳥取市 宮協道子

日めくりを追いかけながら暮らして

捨てかけたお皿を棚にまた仕舞い

過去捨ててやおら瘦身立ち上がる

片恋の浮気くらいは許されよ

満たされてお肌つるつる艶を増す

食膳にお酒一本無に還る

鳥取市 近藤佳子

一斉にラッパ水仙鳴り出した

梅雨最中明るい花を野仏に

よく動く臨時雇いに目をかける

イベントに臨時のバスも混んでいる

五月闇君の言葉に生きかえり

長生きの褒美にしみをたんとくれ

鳥取市 有 沢 せつ子

徳用のきゅうりに旬の味貰う
ジャンケンにチャンネルのもめ裁かれる
込み入った数字が好きな時刻表
家政婦を覚悟で子らと同居する
新人の看護師さんは頼み良い
遠足の弁当好きな物ばかり

倉吉市 猪 川 由美子

ああ秘書がフォローどころか足をもぎ
コウノトリ次のお越しを御所で待つ
記憶にないボケた振りして危機逃れ
鑄型には嵌まりたくなく席失くす
熱やセキ臓器必死でサイン出す
記憶力 良過ぎるのもくたぶれる

米子市 木 村 富美子

つわものの哀歌がしまっている砂丘
優しさと強さを父母の背に学ぶ
浅学がばれないように拾い読み
子や孫が学んでくれる背で居たい
山鳩よいつでも森は待っている
三回忌少し笑える鳩時計

米子市 林 瑞 枝

親しかった亡夫の友達来てくれぬ
笑い顔胸のフィルムから消えぬ
励ましのつもりの言葉聞く辛さ

夕立に二人が濡らす右ひだり
傘差して泣いたことには触れず干す
切符には哀楽があり各停に

米子市 政 岡 日枝子

いつか煌めくそんなオーラを持っている
侍ばかり集まっていて決まらない
お互いに隣が危ないなと思う
噴水暮色 明日もみんなに来てほしい
やみくもに刃を振らぬから怖い
花回廊花の乱気流にのまれ

竹原市 森 井 菁 居

六十四歳 試行錯誤がまだつづく
順風が続きうっかり気を許す
飾り気の無い人だからついて行く
侘しさはランチタイムをひとりきり
ドクターに双葉マークが無い恐さ
片付けを知らぬ日本人が増え

竹原市 岩 本 笑 子

マイコップ ビールは派手にこぼされる
黒子役の母が一番元気です
時々は味方になってくれる妻
万華鏡過去も未来もその中に
生きがいを見つけましたと土をこね
朝昼晩薬のために食べてます

岡山県 大石 あすなろ

立ちあがる膝の重さや梅雨さ中
身すぎ世すぎしばし忘れて湯に浸る
健やかに老いるマニユアル買いに行く
やさしさに馴れて真つ赤な嘘をつく
いい話拾いに小さい旅に出る
下り坂靴ひもしかと締め直す

倉敷市 井上 富子

スピードは落ちたが老輪まだ回る
雷を伴う胸の低気圧

答弁の語尾に狸の尾が透ける
ポケットで風化しているママのメモ
捜査線犯人が浮かんだ時効前
人生の幅を広げるパスポート

西宮市 門谷 たず子

受けねばならぬ夫の抛る変化球
片足でこけないように立つ稽古
風を味方に流され方も上手くなり
し残したまだがあるので生きられる
終章に飛ばねばならぬ水たまり
トンネルの出口で待っている未来

西宮市 坪井 孝一

ライバルが僕に注ぐ酒あふれそう
妻の愚痴聞き流してる発泡酒
コレステロール僕に無断で入り込む

偏屈と正義感とが見詰め合う

派手な服駄目でもともと試着室

全身をじろり見られて買った花

川西市 西内 朋月

雷鳴を聞きつつ飲んでいる茶の間

真夜中にはぜる音する家に住み

鮎鮎の味を知ってるひとと飲み

飲む量が減ってないので困ります

心配を掛けさせぬため笑わせる

洒落つけがあつてまだまだ生えられる

川西市 松本 ただし

政治屋が勘定書まで嘘で埋め

年寄りの落穂拾いをけむたがり

レトルトが侵み込んでいる舌の奥

単調な響きに浸る滝の音

ぎりぎりまで明日預ける青テント

ゴミ箱の人生だったのれん酒

三田市 北野 哲男

くしゃくしゃの髪をととのえ出るトイレ

かたつむり一緒に住めぬ家を持ち

一対か一対一かカウンター

この世とは俺とお前の居るところ

前立腺詳しい女のティールーム

真剣におなら待たれる術後の日

三田市 久保田 千代

物あふれ物に使われ物に泣く
子供にも合わす物差し持っている
まだともう使い分けての処世術
遅れずに世情へ心磨いてる
住み慣れてきたんだ風もあつたかい
自分史を書くに歳月まだ足りず

尼崎市 内田 美也子

甘くみた風邪が謀叛をおこす夏
旧友の笑顔の中で過去が揺れ
心配が怒りに代わる無連絡
人のことだからはつきり出る答
つい僻み吐いた言葉が身をせめる
おおきにと大阪弁の温かさ

宝塚市 嵯峨根 保子

雨の日は本と甘ぐり安息日
一匹の蚊を追いまわすキャミソール
突つ走る癖 はは親にこの子あり
バリアフリーの風呂で情けに浮いている
個性からがんこへ癖も歳をとり
憂さひとつ鳴門の渦へ捨ててくる

吹田市 山本 希久子

夏の浜砂にかくれた愛と憎
信じてたものは砂漠の蜃気楼
とりあえず磨いておこう明日の靴

昭和と共に生きた証の反戦歌

同居して平均年齢四十歳

スタミナを少し残して夏終る

吹田市 大谷 篤子

殻をぬぎすてて光ってみるつもり

種まいて雨の恵みを信じてる

花生けて紅茶の好きな友を待つ

ゆずられた席に残ったあたたかさ

すがすがし光ICUに朝

ほっとして次の心配しています

吹田市 早川 棲世

ギリシャ以来スポーツにある国家主義

何がデフレや出たら万札とんでいく

鬱の日は古きハーンの長征記

躁だから遺言のこと妻にいう

ビジネスチャンスの中の一つに有事法

人は神呼びつつひとの手足もぐ(九月十四日は鶴彬忌)

豊中市 吉田 あずき

新世紀亡びゆくもの多すぎる

みんな吐く新しいもの吸うために

迷彩の服で抜きたい道がある

ゆつたりと着るのが好きになつて老け

かたつむりあなたの服にデザイン賞

健康のレシビレシビで過食ぎみ

豊中市 田中正坊

あつさりときらめがよし古時計
終曲へタクトゆつくり振っている

加速度でズルズルと下り坂

ニューギニア戦没の兄眠る島

スランプの時には漢介句集読む

一人また先達が逝く雲の峰(水客さんの死を悼む)

箕面市 出口セツ子

呑み込んだ言葉が胸で激びてくる

淋しさは見せずに化粧するピエロ

生きていた足跡残したい私

ジコチューになるには勇氣不足です

本能と理性に揺れるイヤリング

無責任になればバラ色かもしれぬ

大阪市 西出楓楽

英語さほつた昔を悔いるバスポート(アメリカ旅行)

空港のチェックにテロの影が濃し

日系人みな前向きで逞しい

ラスベガス話の種に五ドル擦る

大峽谷地球ここから割れるかも

咸臨丸沖から来そうシスコ湾

大阪市 川原章久

ロスタイムあとどの位傘寿です

濡れない見せる水着が浜に立つ

十年の満期の利子で旅靴

通夜の酒洩らす故人の艶話

雨縫うてだんじり囃子届く町

自動ドアにせかされ傘の水を切る

大阪市 前 ともつ

海の日に七十回の誕生日(古橋理と)

無料バス七十歳のプレゼント

シルバー券はからい粋な散髪屋

いっぺんも席譲られたことがない

止め焼香いつの間にやらそんな歳

晩年こそおおらかににおおらかに

大阪市 小糸昭子

つんどくと癒されてます枕元

雨が好き乾いた樹々が声あげる

サッカーの陰で阪神負けていた

往年のスター老いても良い顔だ

蚊柱が立つ焼跡の終戦日

愛足りぬ時は料理も辛くなる

大阪市 榎本舞夢

欲しい物高い所に並んでる

下さるならどんな物でも嬉しがり

恵まれた人のパワーは眩しくて

バスツアー楽しい絆生れてる

食べることを省略したら痩せました

恵まれた家の子なのにケチンボウ

大阪市 榎本 日の出

音のない恐さを知ったひとりもん
悠々と雑草でいる暮し振り
ご迷惑をかけないよう軽いうそ
自己主張だまって口をとんがらす
思いい切り甘えてみたい人が居り
ドレミファを覚えなくとも演歌なら

大阪市 奥村 五月

負けて飲み勝ってまた飲む父の酒
いきまいた直後素直にあやまれぬ
生きていて損な気になる保険金
台風に乗って立ち去れ不況風
惚けている母にも残る品の良さ
若者に小言も言えず目をつぶる

大阪市 安達 はじめ

添加物違法承知で売り続け
わくわくの胸持ち合わす老いてなお
生水の飲める日本がありがたい
投書欄生きたヒントがあふれてる
捨てられて犬本性を取りもどす
嫁自慢できる私は幸せだ

大阪市 杉澤 汀

愛染堂朽ちたかつらへ願いごと
十六夜の最早ゆうべの月でなし
うたた寝をびつくりさせて軍歌ゆく

この穴に暮らした蟬の闇九年
入道が入道を生み空覆う
喜寿傘寿男黙って坂上る

大阪市 津村 志華子

地にかえる運命のままに花は散る
園児らといつも仲よし辻地藏
だんだんと派手な色着て母は喜寿
集まると亭主の愚痴と子の自慢
朱印帳ひとつひとつにある祈り
自画像にひと色添えた恋の色

堺市 志田 千代

学校の廊下は走るためにある
幼稚園も高校も公立だった
大正町 昭和通りのあつた町
無職には無職らしくとおしやれする
よそいきの服は普段着にならない
夫ほど安心出来る人はない

堺市 齋藤 さくら

婚姻の軽い判子に縛られる
お金ではないのと金の要る話
メロンよりビール嬉しい御中元
パトカーに自然と速度落としてる
夕方のデパ地下主婦であふれてる
花愛し小鳥も愛し人恋し

堺市村上玄也

ワルツしか踊れぬ父のダンス歴

斬られてもまた直ぐに出る斬られ役

失敗談面白がつて聞く他人

他人事のように説教聞く生徒

還暦の面をさげても恋はする

日焼けしているよう黒い夏の富士

八尾市 井尻 民

打ち明けられてストレスを移される

人妻と別れて仮面つけかえる

知らぬふりしていきさつを全部きく

ひと呼吸ためらいながら押すチャイム

砂時計砂は空気に触れたがる

押し花の色鮮やかな昼さがり

八尾市 生嶋 ますみ

化粧する場所を選ばぬコンパクト

マネキンにとても水着がよく似合う

まだ少し騒ぐ血があり紅をさす

銚先がこちらへ向いている気配

寝たきりにさぞ一日が長からう

大ジョッキレディーの仮面ずれてくる

八尾市 神原 まさと

悠悠と捕れぬ鯨が鬨を追う

横綱の覇気が戻らぬ貴乃花

日本語も片言なのに英会話

生花の蒲の穂に触れ里思う

重役になったライバル逮捕され

病院の食事のメモを取っておく

八尾市 宮崎 シマ子

パピブペポ花火はどつと胸に咲く

血迷うて祖母カラオケに熱中し

祖母若し踊りゆかたがよく似合い

名も金もないが私は子沢山

仏滅を大安にする友が来る

ライバルも話せば酒好き女好き

藤井寺市 楠 昭子

返されるつもりの辞表受け取られ

プライドを仮面の下で光らせる

何もかも許す大物ふところ手

消したはずの嘘の一つが透てくる

老い二人ピント外れも仲が良い

淋しいが自由になった持ち時間

藤井寺市 鴨谷 溜美子

蝉が鳴く風鈴が鳴る夏の耳

白桃に刺激与えてしまいう指

切り抜きを溜めて欲ばりだと思ふ

ほとぼりはうまい具合にさめてゆく

偶然だとすると神のおぼしめし

飛び込みは禁止見張られてるプール

藤井寺市 中島志洋

新聞にのらぬ政界裏の裏
馱長も呆れる変な忘れ物
損をした事は言わない競馬狂
二人きり他人行儀がじれったい
しぶちんのデートは夜道歩くだけ
同じ手にまた騙されるお人好し

藤井寺市 高田美代子

乙女座へ九月の星が美しい
粗大ゴミ町のうわさを聞いている
あほらしいことも時々してしまう
頭痛して旅の途中がふと不安
冗談を冗談のまま受け取られ
マイカップの底に沈めておくはなし

寝屋川市 柴田英千子

ソックスがよじれてはける手のしびれ
いもうとの身になってみて和解する
今日は青空 神経がGOサイン
生協で仕入れたうな丼の夕餉
引き出しで眠りつづけているテレカ
あいまいな笑顔でつづくおつき合

寝屋川市 坂上高栄

岩清水柄杓で汲める有難さ
一言で痛くない腹さぐられる
夫婦岩永久に変らぬ道標

土壇場のサインやけくそストレート
サスペンス地で行くような遺産分け
ご先祖も泣いているだる休耕田

枚方市 宮川珠笑

梅雨空は雲に溜め池かくしてる
往復で同じティッシュを貰つとく
切ろうかと言えば今年の花をつけ
聞きもせず間違い電話が怒鳴ってる
ベッカムの髪は暴走族の真似
あめあめふれふれ母さん自家用車

羽曳野市 吉川寿美

生きてゆくための踏み絵を何度ふむ
鬼と仏同居してますアイコデシヨ
自販機が溢れて無愛想な街
無記名だから本心を書くアンケート
失ったものを数えて旅半ば
おとほけも上手になった座りだこ

羽曳野市 三好専平

まる裸にするまでやめぬインタビュ
戦争にハッピーエンドはありません
忘れてもいい傘たんとうちにあり
照れ臭いけれども愛の歌が好き
一流と美人に縁のないわたし
分割とレンタルなしですませてる

羽曳野市 徳山 みつこ

花の苗涼しい彩を選っている

まっかつか暑さを糧としてトマト

満員御礼嬉しい悲鳴冷蔵庫

スロースローとろとろと梅を煮る

差し出した私の税は死んでいる

タイよりも正してほしいのは姿勢

富田林市 大橋 鐘造

時どきは神に背を向け生きている

無視される事が怖くて手を上げる

甘く見た相手に足を掬われる

泥かぶる覚悟が出来て言う意見

本当の内緒は喉で止めておく

昭和史に風と生きてる兵の墓

大阪府 澤田 和重

不景気にしてはでっかいゴミ袋

晩学へ老眼鏡を買い替える

最高の笑顔を奥の手に使う

ひとり住む人が子自慢孫自慢

深海魚に見せてやりたい青い空

根を持ったままの握手がぎこちない

大阪府 米澤 俣子

玉碎の島へレジャーのハイヒール

貝殻の風鈴が呼ぶ星の浜

おてもとの言葉がゆかし京料理

待たすこと平気なひとと知って待つ

箸紙に料理の値段推し量る

雨の音聞きつつ二度寝心地良し

和泉市 岡井 やすお

日本一男胸張り専用機

有権者心と票は違うらし

齒科医院一度行ったら三月捕虜

牛の所為じゃないけどこれじゃもう食えぬ

悪い事したと思わぬのが怖い

W杯またご一緒にやりましょう

岸和田市 高須賀 金太

紫陽花に彩色をするいい雨だ

夕立を走る若さが妬ましい

物になる物が何にもない私

昨日まで確かにあった店がない

衣食住足りて心はどうなんだ

ハミングが聞こえ明るくなる厨

河内長野市 村上 直樹

妻の座は遠くて近い卑弥呼の座

絵日傘の妻足取りも軽そうだ

したたかな妻の打算について拍手

損得の駆け引きもして妻の乱

愛情のうす味も慣れ夫婦です

手料理に拍手今夜も星三つ

富山市 舟渡杏花

握りめしの中から転げ出たコント
因習へ忍の一字が破裂する
いまさらに爪の垢など呑めますか
あれよあれよ 暴風圏の回り椅子
途中から笑いが消えてゆくマンガ

富山市 酒井輝

ことさらに歪んで見える眼鏡越し
吊り皮で暫し休まる五十肩
借りる嘘ほんとのようにでつち上げ
母の生む母もわからぬ隠し味
有事故どこにも敵は見当たらぬ

富山市 島ひかる

釣りバカのロケで沸いてるボラソテア
山好きな男と語る山のこと
約束の日が訪れる風の盆
乱すまい悲しむ母が胸に棲む
煩惱が蠟燭能に溶けてゆく

富山県 増田紗弓

強豪にみえて尻込みする会議
体温計近頃ビツビツよくしゃべり
雨止んで追われるように夏の花
図書館と仲よくなるうカード持つ
森繁を読んでニンマリしてしまう

京都市 都倉求芽

訃を報らす雲は真つ白でほしかつた(嗚呼 水客先生)
不言実行まわりのことも考えず
足跡より今のわたしを見てほしい
心ある笛なら下手でも踊ります
マンシヨンにしっかりとたれている旧家

亀岡市 井上森生

さやさやと嵯峨野ならでは竹の涼
サッカーで湧いたアジアの隣組
政党もサッカーほどの熱戦を
ラジオから死は終わりでは無い話
一本の木陰の癒し こんなんにも

京都府 稲葉冬葉

保証印押した友達から電話
好奇心絶交状はまだ書けぬ
念を押す語尾にやさしさ滲み出る
頼まれた事だけすればいいらしい
おいしい雲仲間を連れて逝かないで

大阪府 津守なぎさ

胸おどるプラン髪染め紅をさす
ルンルンの列UVの黒い傘
旅支度台風情報なんのその
波しぶき浴びて実感する水着
カナヅチが水着三枚持っていく

大阪市 津守柳伸

川床と五山鞍馬の灯が招く

山海の珍珠溜息する術後

酔い止めを放せぬ旅のイチキユウパー

健康な笑顔がつどう紫蘇ジュース

抜けがけの台風梅雨を置き去りに

大阪市 松尾柳右子

ジーンズがお茶にお花を習ってる

高層のビルに風鈴あるのかな

お昼寝をしかけていると友が来る

欠け茶碗されど二人は仲が良い

店内に迷子のトンボ飛び回る

大阪市 本間満津子

凡人で平凡の良さ知っている

もう口喧嘩しない友達歳月よ

寿命延びても若さが還るわけでなし

芽を摘んで子を盆栽にしてしま

鳶が鷹産みひとりピーヒョロロ

大阪市 川久保睦子

風鈴を揺らす風あり夏盛り

梅雨空に夏を急かせる夾竹桃

寄せ鍋の向こうに孫もいて弾む

サッカーの格好よろしく真似る孫

針山に亡母の匂いの残る髪

大阪市 町田達子

生き生きと小鹿の群れが遊んでる

東大寺のすべてを観にゆく梅雨晴間(奈良博物館)

神秘的な輝き秘仏に打たれてる

曇り晴れそれぞれの良さ古都の景

水の都八百八橋も徐々に減り

大阪市 鈴木トヨ子

新仏へ先祖の仲間うろたえる

修理終え大屋根豪雨待っている

好物の山盛ほとけ悲鳴あげ

空似でも夫に似てたうしろ影

体調がよくなり薬もう忘れ

大阪市 神夏磯典子

金魚猫 私もお昼寝しています

銭湯の一番風呂にある孤独

盆栽の松は主のなすがまま

灯台の風はせつない音を出す

背伸びしてパンチまともに飛んで来た

大阪市 清水絹子

自慢した健康過去の語り草

W杯お国自慢が花をそえ

自慢にもならぬが揃う六姉妹

手を洗う癖もようやく満二歳

葉ざくらになっても好物さくら餅

大阪市 古今堂 蕉子

あの頃はおしゃれした甲斐ありました

輝いていた頃それに気づかない

終点が起点であると考えよう

強情な子です花ならななかまど

妃殿下にささげる名持つバラの花

大阪市 中田 あい子

不自由せぬ水をボトルで買う日本

里帰りした娘井戸水一気のみ

一人居のストレス聞かす相手はし

五月晴 露地に紫陽花あふれ咲く

蚊柱のたつ夕方がとんとなく

大阪市 渡部 さと美

しんどさも旅のたのしいもののうち

怪じゅうに強い坊やの蹴りをくい

もう水に流せた思っていた根っこ

老父ふすつとさせて母と娘の気炎

靴下のくしゃんと梅雨を疲れ切る

大阪市 川端 一步

各停で行こうと意見合うふたり

夏風に稲穂がおどる千枚田

領いてくれた人からいい手紙

遠くから見るとわが家の灯もきれい

還暦が過ぎた自分の顔づくり

大阪市 浦田 綏子

宇宙人地球の蹴まり来てのぞく

一夜花月下美人のトックショー

顔があるので紅さし眉を引く

不協和音いろんな音があればこそ

猫じゃらし星から落ちた子ども達

大阪市 中澤 伽羅

気をつこてくれてるらしいありがとう

誕生日指定で子から宅急便

何かしら光るもの持つ友ばかり

光ってる人の周りに人が寄り

日記にはもらった梅を漬けたこと

大阪市 中村 叡子

美男子が立つて津軽の三味を弾く

市のプールお達者シルバー社交場

妻の留守今日は天井食べに行く

酒飲まぬ夫だんだん食細く

労りつ口喧嘩しつ老いふたり

大阪市 鶴田 遠野

パンツ一丁男冥利の風呂上がり

風下でうわさ話を四捨五入

占いの館で探る淡い恋

娘の欠点少し彼には言うておく

そのままでもいいのに化粧して散歩

大阪市 小泉 ひさ乃

一粒の涙あつさり許される
目的を達し輝く一戸建て

吊皮に酔つたいのちをあずけてる
癌疑惑はれて笑顔の朝がくる
梅雨晴れ間祭ばやしが風に乗る

大阪市 寺井 東雲

幸せをこぼさぬように深い皿
今日こそは言おうと腹をきめた朝
デパートの地下の試食を楽しみに
父の出す鮑の屑に負けてない
地球儀に決戦場が浮んでる

池田市 岡本 吉太郎

花嫁さん少子社会だ頼みます
変心を恨んでみても明日はない
愛情とは深い信頼の上にある
いらいらして私の尻をたたいてる
愛想好しいずに居ても目立つ人

池田市 栗田 久子

この世は旅 帰り仕度をせかされる
キーパーも投手も孤高守り切る
月の出を待てばお酒に手が伸びる
散歩するその足元のこぼれ萩
道祖神包んで燃える彼岸花

和泉市 西岡 洛醉

雑学雑文雑兵という誇り
紫陽花の生きる背中へ梅雨続く
ブレンドの味にまどろむ午後三時
凡人で終る余生を懐に
一滴を啜つて酒に溺れ込み

泉佐野市 山本 蛙城

無防備の手を腰に置き水着ショー
呆けたかも知れん回りが呆けに見え
どの人も美人に見えて呆けちゃ居ぬ
ピンピンコロリ信じアルバム整理せず
W杯水に飛び込む群れの音

茨木市 島元 ふみ

四年後も観る気にさせるW杯
若者の熱狂姿も混じりたい
口喧嘩負けているのは男の子
ふくらみを確め女の子らしい
ペランダにお礼の糞を置く雀

茨木市 藤井 正雄

隣から走って帰る長話
うたた寝が覚めて終っていたドラマ
一日がこんなに長い新入社
超ミニが前に座った輻射熱
定年日駅の時計の無表情

大阪狭山市 矢野 梓

毎朝のバナナジュースで補おう
常識がどんどん変わる世を生きる

サイレンに合わせ黙禱自分流

痛む膝忘れて旅でよく歩き

ふるさとの父母の記憶は風の中

交野市 森本 弘風

旅行よりお花に水の妻の夏

時々は励ましくれるいい鏡

家にある時計それぞれ違う時

財産のタレに泳がず焼うなぎ

阪神が負けた翌朝二日酔い

河内長野市 井上 喜酔

嘔みつかれ八方美人に策がない

夢すこし残す余生の風車

切り札を出すのが怖いのだ仏

遠慮して箸もつけずに肩が凝り

涼求め夜空見上げて大ジヨッキ

河内長野市 水谷 正子

バイク事故相手ベントと自慢する

午前二時ラジオが流すジョンレノン

お見舞いに生前葬をだぶらせる

逆縁の子に救われた軽い怪我

名古屋場所着物の女将楽日まで

河内長野市 加島 由一

車椅子のパワーを貰うボランティア

抜け道を必死で探す四面楚歌

旅人として古里の駅に降り

かごめかごめみんな夕陽に包まれる

百歳の浜崎あゆを想像し

河内長野市 植村 喜代

子沢山親はどの子も忘れぬ

子沢山ついでに猫も犬も飼

休み増え喜ばないよお母さん

サッカーが心結んだ世界中

もうすぐ五十年朝日取りつづけ(新聞)

岸和田市 原 苑子

日記帳反省ばかりぐちばかり

待つというときめき忘れた古女房

当面は畑の肉ですませてる

主婦のうつ慰めている無駄話

占いの大器晩成的はずれ

岸和田市 藪野 けい子

コロリ死を願う中年座談会

正面きって進んでうしろついてこず

人並みに爪だけはよく伸びてくる

言い訳へ語尾適当にオブラート

株価下降今買いどきとねらっている

岸和田市 木村 正剛

期待する方が無茶だよわたしの子
捨て石を打って重荷がまたひとつ

二時に飲む食後の薬効くのかな
検察は身内の逮捕で忙しい

何のため入院したのか医療ミス

岸和田市 原 さよ子

入院の祖母を和ます孫の顔
すかたんな返事補聴器つけながら

月並みな礼状軽く読み流す
晩学の読書目薬さしながら

手作りのいびつな豆腐ほめられる

岸和田市 井伊 東吉

逢わぬ間に孫大人びて初ニキビ
茄子胡瓜やはり露地もの旬の味

日韓の落ち目の首脳肩を組む
夏バテの予防料理に目を凝らす

サツカーにリズム狂ったタイガース

堺市 西村 りつえ

半額にけちな財布がウフフフフ
しくじりをエへですまし憎めない

叔母見舞う堰切るように回る舌
弾みすぎびくびくしてる血圧計

閃めいてくしゃみで飛んだ五七五

堺市 渡辺 さだを

ワールドカップ終り虚しい蟬が鳴き
娑婆はいい面会済んで吸うタバコ

エース井川惚れ惚れするでいいおいど
生きなはれ蛞蝓みたいに這つても

愛染さん貧乏神はほつていい

堺市 黒田 真砂

点滴のしずくルンルン快復期
童心に還り七夕笹飾り

親友だから痛い事ズバリ言う
静かなる闘志苦難よどんとこい

露受けて紫陽花頭重たそう

堺市 和田 つづや

開いてる扉があればつい覗く
体調で和食洋食決めてる

食べて寝てそれが苦でない有難さ
神様はライバル最良だと思ふ

諍いで夫婦の部屋が広くなる

堺市 源田 八千代

スマートに日の丸振ったW杯
連勝に沸き連敗に吠える虎

七夕に夫婦の絆深め合う
ビールから酒 水割とフルコース

御仕置の如く牽引首と腰

堺市 矢倉 五月

喜怒哀楽とても素直で憎めない
頭打つまではと我慢の親でいる
賑やかに厄年終える誕生日
読み終えて著者略歴をいま一度
日々凡々夫婦でボケをうつし合う

堺市 山本 半銭

海と空見飽きず五日太平洋
水平線渺渺三百六十度
歳を得て姉妹の絆育まれ
滴する光も優し遠花火
お月さま優しく見えて独り言

四条畷市 吉岡 修

一筋の道で信用されて来た
喜寿きたら人が恐いともう言えぬ
ストレートの愛をかゝるくいなされる
台風を数えだしたぞ秋の陣
魂の抜けた手で書くさようなら

吹田市 岩屋 美明

喉ごしをビールの泡に騙される
男には男の似合う酒がある
少年のピアスが光る盆の墓地
真っ白いシャツを着てゆく別れの日
ユニクロヘシニアも元氣買いにゆく

吹田市 穴吹 尚士

実力がないから世辞でカバーする
喜んでやがて淋しい子の巣立ち
生まじめな亭主に少し飽きかきた
酔眼に美人に見える古女房
初めての席譲られた日のシヨック

吹田市 野下 之男

いつの日か父を越えたい墓の前
カルガモの母の視線は温かい
完走を誇りに思う定年日
万歩計犬の散歩と顔馴染み
王将を天国でまたヒットさせ

吹田市 瀬戸 まさよ

W杯余韻を残し無我の幸
頭だけ下げる責任ない社長
ロボットの犬に癒され暮らす日々
聴診器当てる医者です信じます
ハイと言う返事確かな家族愛

吹田市 太田 昭

我が青春に汗進る山がある
悲しみを一汗かいて包み込む
宅配の西瓜に団扇入れてやり
団扇揺れ球宴の風どよめきて
散水車暑さ拾って通り過ぎ

大東市 児玉 蛙

怒らずに怒られながら生きている
正直で通す仮面を風よぎり

かくしても女は牙も角も持ち

語らねどやさしくれる羅漢さん

添え書きの母の情けに弾む朝

高石市 浅野 房子

わたくしのマグマ間もなく自爆する

年寄りも安定剤で安らかに

クーパーゲープルああ青春はセピア色

朝刊も夕刊も待ち草臥れる

両親に逝かれた猿は木から落ち

高槻市 井上 照子

凜として電話商法はねつける

朝食の納豆元氣信じてる

労わりの電話をくれる兄傘寿

闘いに敗れ握手の固い顔

新参もシエフを目指している氣迫

高槻市 傍島 克治

逃げ水の中に潜めし青い鳥

誘惑多き友の格付け下げる妻

化粧品減らなくなつて老いすすむ

仏飯も亡父の好みの柔らか目

片隅に咲いて可憐に見せる花

高槻市 生田 義一

古い二人半身の魚つつく宵
てきばきと物事こなす妻も古い

日韓が固い握手でW杯

有能な秘書は両刃の剣を持ち

通勤車英紙ひろげて高軒

高槻市 江原 秀夫

ご機嫌が伝わるキッチン軽い音

雨しとどいのちを洗う朝の筆

発泡酒でいいよ朝晩軽くやる

人生を満喫してます余生です

足して二で割つても答出てこない

高槻市 西谷 治三郎

変人に不足をしない永田町

横文字と片仮名あふれ世事うとく

ひねくれて賞味期限に不信感

栄転が今もあるのは官公庁

同権のはずが男性弱くなり

豊中市 松岡 久留美

御仏の教えで悟る人の愛

母の絵馬見付けて知つた親心

人柄の良さに魅力がにじみ出る

うちの嫁ストレスそつと抑えてる

手帳から昔の恋の物語

豊中市 安藤 寿美子

さあ殺せ横目で執刀医にらみ
のんびりと入院してたらほけそうで
台風の間をねらっているフライト
槓若葉ほつたらかしの庭も夏
まだ早いまだ行かへんと鬼に言う

豊中市 樫谷 郁子

独り居の窓には眩し初夏の風
遠花火錯覚しそんな戦中派
プライドが損な遠慮をしてしまう
出る釘は打たれるだけで用を足す
旅立ちに賞味期限はついてない

豊中市 江見 見清

介護する人される人旅無縁
幼子と同じ歩数で走る親
治療力を頼みに治療費が上がる
旅仲間終りになって名乗りあう
母娘孫の歴史知ってるネットクス

豊中市 岸田 知香子

妻だけにイエローカード出し渋り
旧友の勧誘断る勇氣持つ
むし暑さいやす口なし雨の中
慕われた歌を残して黄泉の国
潔く断る勇氣持ち合わす

豊中市 山門 幸夫

デイケアー今日もみんなの輪の中で
デイケアーみんな運命に素直です
ヘルパーの笑顔嬉しいリハビリー
広告紙折り紙巧くなりました
七夕やケアーの笹の賑やかさ

豊中市 山門 夕ミ

善人も悪人もなく陽はそそぐ
言う事を聞かぬ足だと可愛がり
なだめつつ足が足がとほやいてる
通夜の席見知らぬ身内たしかめる
介護受く親もお利口さんになり

富田林市 中井 アキ

四季咲きのバラも私も疲れてる
割り切ればどうってことない嫁姑
ゆるゆると逢う珈琲館の午後三時
ひと言が絡んで長い夜になる
結び目を解いてときどき息を吸う

富田林市 片岡 智恵子

それぞれの個性に丸味つけて老い
これからを寿命と貯金天秤に
減塩減糖 毒もへらして皿に盛る
晩学の今日がスタート机買う
心の奥の微罪も仁王お見通し

富田林市 藤田泰子

初ものを母は拝んで食べていた
捨てる服捨てられぬ服更衣え
言い訳はしないでおこう負け戦
水甕を充たし台風去ってゆく
泣いている時も笑顔を忘れない

寝屋川市 平松 かすみ

辛うじて雨漏りしない誕生日
みつ峰のタッチがほしい梨の花
満員車うっかりタッチありそうな
ドレミファソ タッチ遅れてまた目玉
熱帯魚ダンスしてますのは雄で

寝屋川市 籠島恵子

子を計る物差し夫婦して違う
食べてよし結果よしですヨーグルト
腰かけたままで挨拶してしまう
予定表に削られてる命
事後承諾参加になっているツアー

寝屋川市 堀江光子

短夜は短夜なりに思案ごと
還暦へ人生半ばと元氣付け
瞬きもせずに子の見る蛍籠
灯明を点せば小さい己が影
有難うを誰にも言える歳となり

寝屋川市 富山ルイ子

立板に水で心が伝わらぬ
目標を決め馬車馬のよう走る
人を見る目に狂いあり後悔す
桂浜の龍馬の顔のあたたかさ
ごはん食べぬと卒寿の母が少し呆け

寝屋川市 森 茜

炎天を脇目も振らず犬通る
昼下がりボサノバ耳にここちよい
おとほけが一人輪に居てほっとする
ワイン少々ポリフェノールに期待して
ものほしげだった私の青春記

寝屋川市 酒井勇太朗

矛盾などどこ吹く風のムネオ節
広告を見て始動する日曜日
火に油注いで郵政民営化
甘党に徹した報いがインシユリン
古希過ぎて留学の夢叶えられ

寝屋川市 太田とし子

山も田も捨てて日銭を追うくらし
梅雨どきのタンズに冬がまだ残り
赤い服恋を探しにアルバイト
4Bの芯うぬぼれていませんか
蛙の楽隊いまはどここの慰問隊

羽曳野市 安芸田 泰子

一つ知り二つ忘れて恙無し
シナリオは書かずのんびり生きている
好物が同じで孫と馬が合う
廃校の村に残ったわらべ唄
整形した天狗の鼻ですく折れる

羽曳野市 酒井 一壺

土砂降りへ行かねばならぬ訳があり
得手勝手ほどの雨待っている
相槌を打てばますます自慢する
気が付けば自慢話を聞いていた
自慢など決して言わぬ副社長

東大阪市 安永 春

うず潮にもまれた鯛の祝い膳
コロッケを真似て自慢の隠し芸
ご多分に漏れず我が社も左前
あじさい園雨に際立つ美しさ
当てにせぬ毎度遅れる雨のバス

東大阪市 北村 賢子

無理をせず自分を生きてゆく余生
同年齢になつてしみじみ母慕う
酒とろりとろり親父が恋しなる
まだ必要とされております飯を炊く
馴れそめはドラマチックな凡夫婦

東大阪市 指宿 千枝子

あの奥さん今日も小走り何処へやら
七月一日歯の工事始まった
目を閉じて大口開けて歯科の椅子
ニアミスの歯医者を時に薄目して
いよいよとなれば豆腐に玉子粥

枚方市 安達 忠央

どの服もおしゃれにみせる微笑あり
愛めばえおしゃれひとかわむけてくる
遺伝子と折合いさりげなくおしゃれ
走る世を横目に眺め青テント
かえりみてはしりすぎたのかもしれない

枚方市 鈴木 政子

三界に家なしとは姑のこと
戦犯と戦死者同穴とは知らず(靖国神社)
フリーガン無事故に協会ホツとする
ワールドカップ陰で医療費の値上げ
中東に武器を売るのは何処の国

枚方市 海老池 洋

ひた走る僕には目指す塔一基
気休めにぼっくり寺を拝んどく
カラオケで横綱 相撲いまひとつ
犬猫のホテル見上げる青テント
迎え火の揺れの一つは亡母の風

枚方市 森 本 節 子

生みつけた木に舞いもどる揚羽蝶

白むくげ芙蓉のような花ひらく

和箆笥を手離し押入れタンス買う

リハビリ中デザイン靴はひと休み

風にのりおいでおいでと檉若葉

藤井寺市 太 田 扶美代

生年月日にしばしば邪魔される

淋しさに負けそうだからまだ喋る

もう歳ですからと女の中ジョッキ

目一杯働いた日の缶ビール

二二三発なくつてくれるとありがたい

松原市 小 池 しげお

捨て猫の目と目が合つて帰れない

会計簿風呂敷ぐるみ引継がれ

夫婦になる前の手紙が笑わせる

一等席柵にもたれてよく見える

サンパツは月一回と決めてある

守口市 井 上 桂 作

染め髪のヘルパーさんは左利き

口利きのビジネス献金秘書までも

道頓堀水浴び好きな浪速っ子

泥沼化戦い好きなシャロンさん

三原則いつまで続く傘の下

八尾市 村 上 ミツ子

台風逸れてほっとしている無責任

クーラーつける家計簿にきいてから

怖いもの見たさのこころ騒ぎだす

うれしさを言うと自慢にとられがち

丹精のじゃがいも届く義弟から

八尾市 高 橋 夕 花

爪染めて両手の皴が気にかかる

トランプの凶に心が苛まれ

物さしを一本持つている安堵

パソコンは諦めましたというお脳

丹念にパツクしておく誕生日

八尾市 宮 西 弥 生

辞書全部開きこれから生きる知恵

ケイタイにふりまわされる二十四時

ひとほめる瞳の奥が美しい

外面も内面もないほんまもん

流されて傷つき人間やめられぬ

八尾市 高 杉 千 歩

女性専用車並ぶ若さに遠慮する

ひとり言大きな声になつている

デジカメに辿りついたぞ負けまいぞ

ひとりでは秋刀魚を焼く気にもなれず

私のことばかりしてすぐ昏れる

八尾市 長谷川 春 蘭

九十二が闘っている暑さかな
体力に自信炎天何のその
親馬鹿になる気帰省の三ヶ日
夏布団きっちり掛けて老いたもう
また一年 生さんと梅酒封印す

八尾市 内 海 幸 生

先ず酒の肴から買うひとりもの
杖持ったせいで席など譲られる
ブレイキがなくて深酒に要る自戒
風流を解せぬ男に雨しとど
やんわりと断る男のひとり旅

八尾市 吉 村 一 風

幸せな顔と言われて酒を酌ぐ
カタログが来るとご機嫌さんの妻
咲いている私を誰も気付かない
いい笑顔今日も鏡で確かめる
よく笑う人だご主人見てみたい

大阪府 初 山 隆 盛

夏バテに追い討ちかけてくる残暑
人生の夏の峠がきつくなる
幻覚が四次元の酒求めだす
手品師の鳩はみごとに折りたたむ
妻が妬く男の友情見せつける

神戸市 山 口 美 穂

熊警報予定の五湖が巡れない(知床)
残雪の山ラベンダー畑によく似合う(富良野)
空も水も青い摩周湖にむかえられ(摩周湖)
梅雨明け間近か紫陽花は疲れ気味
ユーモアが通じず話ブツと切れ

神戸市 池 田 善 守

人生のごほうび老いの日々過す
ふくれ顔かわいいたと憎しい時
寂しさがすてきな愛を芽生えさす
妻のミス見て見ぬ振りの老いの知恵
日本チャチャチャ エアロのリズムもW杯

芦屋市 黒 田 能 子

カラオケの自分の声に酔っている
子の頼む無理をたいがい母はきく
抱き方がママと違うか泣きやまぬ
握手しただけでファンになっている
ジョギングのコースゆっくり歩いている

相生市 中 塚 礎 石

目を閉じて南無と一言手を合わす
腕時計とまってくれてありがとう
耳元にたわいないこと告げにくる
飽食となる芳香の自動ドア
別れても愛を引きずるとは素敵

尼崎市 長浜澄子

きつと夢叶う木苺熟れる頃

心音の乱れを刻む一筆画

都合好い女はこの世にはいない

この辺が潮時だろう通話音

逆らわぬ子猫を甘く見るでない

尼崎市 春城 武庫坊

過去の悔い全て流して夢を描く

炎天の恵みを受けて茄子の紺

梅雨あける前に台風ふたつ来る

秋が来るまで我慢我慢とビール飲む

風鈴が昔の夏を醸し出す

尼崎市 春城 年代

幸せを生涯かけていただいた

自由奔放に残り少ない絵を画こう

斜視の身に駅の雑踏不安だらけ

駅前が変るデパートの店変わる

ボロ自転車で走り抜く八十歳

尼崎市 松下 比ろ志

てきばきとやるが笑顔を決やさない

あの一球この一球と悔い多し

心まで一皮剥けて古希となる

花と人 行き交う旅路風薫る

母と子の絆に赤と白の花

伊丹市 小熊江美

ねぎ刻む音は朝餉の母の音

明らかに雨が来そうな空模様

誘われて断り切れず悔い残し

心無い乗り捨て自転車泣いている

自転車の前後子を乗せ若いママ

伊丹市 山崎君子

長電話友に元気を貰う朝

素直になろう心に決めるひとり言

ホームシックかわたし馬鹿よね旅便り

夏茗荷そえて味わう里の匂

真夏日の風鈴涼しとなりから

西宮市 山本義子

反骨心あることたまに示しとく

捨てましょ拾いましょと粗大ゴミ

鉛だまをくれた 黙れと言うことか

雑魚だつて五体もつてる意地もある

折角のチャンス阻むのはわたし

西宮市 菊池 トミエ

顔に書く赤青黄色応援団

引つたくり自転車が来る気を付けよ

朝顔の紫色に足を止め

川風を身近に思う衣更え

足腰が我が年輪を告げに来る

雲流れ時流れても終戦日

西宮市 緒方美津子

山寺に人を訪わせる牡丹園

譲られて心もおしゃれ片ピアス

村おこし頼みの綱はりピーター

ともかくも夫婦別室まだ若い

西宮市 井上松煙

踏み出した一歩つづける気張らずに

長寿箸使つて難をのがれてる

走らずにじっくり機会待つて老い

慎ましい城を築いて夫婦老い

親不孝の思いが老いて深くなり

西宮市 牧 潤 富喜子

足らざるもまたよし朝の深呼吸

真つ直ぐな目が我がままに気付かない

不器用な血の半分は受けている

神戸まで来ているらしい雨模様

スリッパで大怪我しそうになつて汗

川西市 米原雪子

ご自分で出しゃばりおよね名乗る友

旅の宿友の軒のリズミカル

トンネルを抜けて明るい老いに会う

古傷を流し切れずに抱いている

切り出せぬ用件愚痴を聞きながら

長身の花婿さまの髭やさし

幸せ行きのバスが来ました夢乗せて

無人駅風が挨拶してくれる

落武者の里かも知れぬ霧深し

裏道を抜けて自転車空仰ぐ

西宮市 秋元てる

整わぬほととぎす鳴く誕生日

無洗米納得いかぬのも老いか

傘寿過ぎて今も親持つ友見舞う

さんりんぼう帽子拾つてあげたのに

感動をすぐ口にする軽い人

姫路市 古川奮水

職引いて体力試すスニーカー

湯あがりの父上機嫌音痴節

山小屋で歌う寮歌に余生燃ゆ

サッカーの記念貨祖父も駆り出され

老人大学卒業テスト土を焼く

兵庫県 大谷幸次郎

陽が落ちるビールが喉を越してゆく

うまそうに髭にビールの泡のせる

雑音の中にもあった天の声

むつつりと過せば妻が気にかける

夏が来ていよいよ冴える海の青

奈良市 天正千梢

暗き世を大仏さまは半眼に
上高地たつぷり時間とるときめ
黒部峡トロッコに乗りはしゃいでる
腹すかし唱歌うたいしあの頃よ
砂利道をはだして歩いて来た過去よ

奈良市 米田恭昌

二歳児の手櫛のさまも女めき
午前さまセコムに侵入者とみられ
三高が自慢独身貴族です

お披露目の会旗はためく渦の道(阿波吟行 2句)

喜寿の師と二〇周年祝う幸

香芝市 大内朝子

辛口の言葉ガツンといい葉
二度と来ぬ今日と言う日の顔洗う
ブライドをかざして人を遠ざける
翔べるうちとんでおかなきゃやがて黄泉
静静と緞帳のごと陽が沈む

大和郡山市 坊農柳弘

コスモスが残暑を見切る秋の彩
生き残る術は語らぬ蟻の列
白萩の露に邪恋を論される
予報士の雨に逆らう星月夜
十六夜の月も妬いてるツーショット

橿原市 居谷真理子

専業主婦腹はいつでもふくれてる
口紅をぬるたび嘘が上手くなる
新妻に火傷の跡が二つ三つ
髪染めず子が鬨っている板場
ひらがなの重みを知らず少年期

奈良県 渡辺富子

故知らぬ涙に惑う星月夜
バラとワイン恋の仕掛けをする夕べ
しめやかに愛の増殖する深夜
法の裏知り厚くなる欲の皮
ポケットのメモがアリバイ喋り出す

和歌山市 福本英子

加齢するほど念入りになる化粧
救急の世話になったが生きている
隣国の砂で白浜夏を呼ぶ
先ず自分納得させて一歩出る
初盆に従姉妹が二人兄二人

和歌山市 牛尾緑良

人並みという目標が高過ぎる
切れ過ぎる男で危険とも言われ
自由席だから主張は切り捨てる
暗証番号僕も時々忘れます
ビー玉に秘めてあるのは少年期

和歌山市 山根めぐみ

遠慮せず一番先に食あたり
バスの旅静かになれば食べている
里からの電話翼が疼き出す
卵買う列に老婆の花が咲く
嘘のんでコミュニケーションとる巧さ

和歌山市 細川稚代

心太 上手に出来て友を呼ぶ
益供養御先祖様を目ざめさせ
予告ない訃報へ雨がふりしきる
孫弟子に注いでもらったうまい酒
台風一過蟬が一声啼いて去り

和歌山市 松原寿子

太陽に撃たれて夏を謳歌する
とどめ刺す言葉が胸をかき回す
怒りの手伸びてきそうな曲がり角
途中から心が癒える海の蒼
視線から伝わる合図包み込む

和歌山市 田中みね

毎日どこか痛みますけど口達者
お口だけでも達者でなくてどうします
ブラジャーが不要となって干しぶどう
オイオイ妻よ何ぞ着て来い風呂あがり
糠床をまぜて今日の日締め括る

和歌山市 榎原公子

サルビアが燃えてノラから来るてがみ
カタカナの風に押される日本語
青魚庶民の脚は伸びている
パン コーヒーそして山から不如帰
アフガンよ以来みどりは芽吹いたか

和歌山市 青枝鉄治

抜け道で鉢合わせした金バッジ
世辞言わぬ医師が信用されている
言うことの聞かない子だが真似はする
口下手の叱る言葉に芯がある
行政の不備を補うボランティア

和歌山市 楠見章子

発泡酒のままぬ男のステータス
台風接近 頭の中も渦ができ
蜘蛛の糸はやテリトリーを光らせて
ふわふわと夢のつづきを追いかける
蜘蛛の糸から逃げる ミイラになる前に

和歌山市 西山幸

朝毎の素顔を嗤う姫鏡
紅差指も遠い童話になってゆく
ふところの軽さを試す自動ドア
風鈴が鳴るのもきつと自惚れた
絵の中に誤解が一つ埋めてある

和歌山市 上地 登美代

苦うりの生ると思えぬ葉の可憐

菜園の西瓜ひとつへ大騒ぎ

美味しいもの食べて笑ってアルファ波

止まぬ風ないからいつもケセラセラ

ふる里は脳裏に残る音がある

和歌山市 武本 碧

蛍火がたわむれ闇に播くロマン

前向きの歩みへ風も力貸す

ためらいが運を逃した影法師

地味婚も派手婚も良しマイペース

自分史へ忘れな草の花葉

海南市 谷口 義男

じんわりと何時か効き出す父の鞭

子の悩み悟れぬ親の無関心

親遠慮せねば波風立つ同居

溝の深さ知らずに妥協してしまふ

なるようになるかと楽観生きる日々

和歌山県 中後 清史

無視されていつかいつかの意地を抱く

外見を飾り中身が瘦せている

酔うほどに無口の舌が回ります

鬼の子が人間を見て泣きだした

頷いてしたり顔する書道展

鳥取市 武田 帆雀

ねずみ捕り唯今準備中走る

蜂の巣の下とも知らぬ作業員

新聞をたたむ役目になり下り

逆転打妙な声出す野球アナ

プロ選手スーツを着るといい男

鳥取市 夏目 一粹

娘の手紙不安が封を切って読む

父母からの教えはきつと生かされる

優秀な部下ほど油断禁物だ

ふるさとの山に埋もれていた情け

追われると何だかスリル感じだす

鳥取市 岩原 喬水

バラ色の夢を見させて魔女は逃げ

ダウンした肌よ鏡は嘘言わぬ

喉もとで恋の悩みが行き来する

誘惑に応え体がピンとする

禁煙を決断指が恋しがり

鳥取市 富山 檳榔樹

ふる里の春夏秋冬みんな好き

空と海抱いた砂丘にドラマ棲む

閑古鳥増える不況に沐浴す

静寂を破る一喝頑固ババ

夕立に相合傘のシルエツト

皮下脂肪つまみ女の独り言

鳥取市 加藤 茶人

子を抱いた母はだれでもマリアです

五時からはカラオケ酒で僕出番

若いもん での悪さは神代から

天国か地獄か僕はクリスチャン

鳥取市 杉 本 孝 男

この人となら走れそう手をつなぐ

読みかけの本を取りだす再起の日

雪どけの滴大河の夢を抱く

純情さだけは譲れぬ白椿

僕の城ノックなしには通さない

鳥取市 田 中 憧 子

主婦の性旅でも膳を片付ける

いたわりの言葉に堰を切る涙

面会謝絶知らない顔がやって来る

優しいとうわさの歯科へ予約する

こんなにも白湯が旨いと知る術後

鳥取市 中 村 金 祥

古里を捨てて愚かな街に住む

飲み放題テンポは僕にまかせとき

禁じ手は命賭けても使わない

永田町いじめられても去り難い

休耕田美田の陰で耐えている

指切りをすっかり信じ明日を待つ

鳥取市 山 本 益 子

叱られに行くふるさととは温い風

にんげんは禁止の柵を越えたがる

川柳のレベル上りは限らない

素手で食う握り飯こそ無礼講

鳥取市 福 永 ひかり

たまたまに出会ったものにのめり込む

おめでとうを素直に言つてあげられず

生き急ぎしているようなスケジュール

そのうちと待って逃がしたタイムミンゲ

どつぷりとつかる毎日にちようび

鳥取市 春 木 圭一郎

忘れたら気楽いい事悪い事

頼るのはしよせん自分と言いつ聞かす

認め合うそこに楽しさわいて来る

よく起きるアクシデントを楽しもう

青い鳥開き直ればやって来る

鳥取市 徳 田 ひろこ

パソコンの答にボンと夜が明ける

台風のここは鬼門になっている

つわものと見抜き破門をしてあげる

触診の素手が花畑を守り

ガソリンを一ぱい詰めて逢いに行く

鳥取市 山宮愛恵

とうさんの夢で目覚めたうまい朝

裏木戸を開けてどかっと夏野菜

人情をしつかりタッチしておこう

ハーブの湯皮膚はゆつくり呼吸する

初々しく踊るダンスの丸い背

鳥取市 西村黙光

腹立てた時の笑顔は面白い

お笑いに生命を賭ける芸の虫

お笑いが健康診断してくれる

ご機嫌の悪い笑顔は模造品

上方へ行って笑いの修業する

鳥取市 前田一枝

おんぶした孫の手を借り寺参り

ふり返りや拾い手のないボロだった

気がかりな何時ものクセ字ない便り

料理などどうでもよろし差しむかい

草笛を吹けばとんぼも宙がえり

倉吉市 松本よしえ

遠く来た息子に意見されている

老いてなお夢よ虹よと演技する

汗ふいてセールの人帰らない

信号が赤でも渡る強い人

派手にする喧嘩二人はまだ若い

倉吉市 米田幸子

金蔓と知らずに切って捨てました

人脈もみんな無くして濡れ落葉

疲れたら帰って来いと母の湾

無人駅荒んだ子等が屯する

脱皮する少女に親は偏頭痛

倉吉市 最上和枝

学より盗めと匠もの言わぬ

親燕火の輪くぐって餌を運ぶ

漫画本読んで少女の日に返る

砂嵐 風紋と言う絵を残す

ふるさとに天女伝説ある誇り

倉吉市 野口節子

もう泣かぬと決めた女の肩パッド

列島をウーマンリブが風を切る

愚痴るまいこれも私の分身だ

やんわりとどぎつい事を申される

あじさいに恋しています花遍路

倉吉市 淡路ゆり子

一枚の紙が人生左右する

遠回り二人の愛を確かめる

さびしくて角の取れない姑と住む

姑は今優しくなって宇宙人

県外へ貝殻節をPR

他人事と高を括った膝笑う

台風が大傷のこし夏の陣

苦しさを二分している嫁姑

喫煙に文句ころして息ひそめ

玉子酒楽な寝息に安堵する

倉吉市 山中 康子

倉吉市 牧野 芳光

捨てられぬものが一番捨て易い

少子化の世にも通学列車混む

魂のような蛍が寄ってくる

耳鳴りと蛙の声のハーモニー

家つきの猫がとうとう出て行った

倉吉市 山本 玲子

朧月夜ちよつと冒険したい足

曖昧な笑顔で濁す物忘れ

博物館の常連となる七十路

七十路いろいろあつていま一人

陽は西に自分のための厨ごと

米子市 澤田 千春

ひまわりの黄色い海に溶けていく

不器用でもとに包めぬ包み紙

ポチつれたさむらいを見に上野まで

灰汁ぬきをしすぎ悲しくなってきた

あじさいが肩すり寄せる闇路かな

米子市 木村 春枝

ペンの先自由自在の夢広げ

いぶし銀煌めく光内に秘め

信号機危ないですと声かける

食品のラベル平気で貼り変えて

胸の奥いつかマグマを抱く子供

米子市 光井 玲子

散る日まで煌めくものをさがそうよ

武家屋敷出入り自在の観光地

危険信号出たぞ食事に気を使う

ストレスが溜る空気をうごかさう

赤い服不思議と老姉によく似合う

米子市 門脇 晶子

危ないきのこきれいな顔をしています

どなたさんもいらつしやいませ自動ドア

銀行のカメラが客を覗いている

屈託のない家いつも客がいる

春夏秋冬ふるさとの歌生きている

米子市 中井 ゆき

花達がなぜか次々咲き急ぐ

お歳です そうか耐用期限切れ

ミニトマト三本赤い夢くれる

頑張りの虎のファンになったのに
老犬の夜鳴きにのます安定剤

米子市 本吉宗光

大阪でわいだわてだで二年ほど

神戸生まれ七十九歳明日の運

二歳上姉は須磨区でニューハウス

行儀よく棚の書籍は百万余

孤老にも五年前には妻候補

米子市 白根ふみ

国文祭百にち切つてその気にす

山村は神楽で夢を引きよせる

W杯華は世界へ散つてゆく

不可能はないと拳をにぎりしめ

ごたごたにじめじめ梅雨が輪をかける

米子市 青戸田鶴

遠い旅終えた鳩だな瘦せている

善人になって窮屈そうな貌

毎年の奈良漬終りほつとする

紫の風が香ってハーブ畑

童謡を大きな声で今日を終える

鳥取県 権代康女

気の弱い人が脱線して仕舞う

二番目の趣味は活け花未生流

気安さにいつも我が家によつてくる

庭先に季節の花が咲きみだれ

雨降りになるとつかれがどつと出る

鳥取県 西川和子

上機嫌記念に写真撮つておく

記念樹の伸び過ぎぬよう枝を打つ

衰えを畳の耳に悟られる

年金を狙うお電話だったとは

振り絞る最後の声はありがとう

鳥取県 太田幸枝

桐の木はすすく伸びて娘が嫁かぬ

まだ未練あつておしろい捨てられぬ

あじさいは一雨降つて艶を出す

有名になつて貧乏忘れ去り

物の無い国の家族が睦まじい

鳥取県 鳥羽玲子

大の字になれる畳のあたたかさ

荒々しい言葉の裏に愛のぞく

あ・うんの呼吸の日々で波立たず

トンネルの向うは晴と決めている

テーブルへそれぞれ趣味の陣を取り

鳥取県 鳥羽直市

薄笑いされてところが見えてくる

さわやかな趣味で残り火ふくらます

洗車した途端に黄砂攻めてくる

晩学へ電子辞典が背中押す

歯車を合わせながらの老いの旅

鳥取県 上田 俊路

泣きに來た砂丘で風も哭いていた
リストラの首で海鳴り聞いている

未完の絵抱いてひと息つく余生

あのひとに逢う日は少し若返る

あのひとと逢おうむなしくても逢おう

鳥取県 林 露 杖

万緑の社に拍手研する

岩清水竹の柄杓が掛けてある

魚跳ねて川面の月に皺寄せる

迫真の響き和太鼓撓む撥

胸奥に怒涛轟く大太鼓

鳥取県 小 谷 孝 美

トラブルを避けた本音が口ごもる

不器用な文字の手紙が捨てられぬ

台風の目について世間知らぬまま

虐待としつけ錯覚してる親

仮面みな捨てると枷がゆるくなる

鳥取県 西 冲 彰 雄

頷いて聞くが同意は出来ぬ案

反論もせずに腕組む人怖い

己惚れがあつて馬鹿にもなり切れず

定年後やっと覚えた死んだふり

生き様は人それぞれの胸の中

鳥取県 土 橋 睦 子

サッカーの熱気に続け夢フェスタ
恥をかき逞しくなる鼻柱

寝ても覚めても寝言のようにナムアマミダ

目の鱗とれて白内障サラバ

肺活量充分あつて吹くラッパ

鳥取県 田 村 きみ子

朱のカンナ片思いかも一途かも

カンナ咲く娘の縁談が一つくる

吉野くず母の痛手をあたためる

秋咲きの菊咲きました地蔵さま

美しい言葉はいらぬ他人ばかり

鳥取県 岩 崎 みさ江

風を読むことも覚えて山を越え

みみずから学ぶ落葉の土作り

種蒔いて雨の降るのを待っている

良心もときどき余所見するらしい

音楽を聴くときは脱ぐ割烹着

鳥取県 近 藤 春 恵

雨つづき仕事の子定組み直す

愛のつば空っぽになる日がこわい

先の先 神様だけが知っている

血税の乱費を神は御存知か

空っぽになって出直す意地を出す

鳥取県 黒田くに子

ありがとうおおきに何といいひびき
朝一番明るい声でお早うさん

胸の奥滾ってるのに素っ気ない
赤いバラこっそり老いの誕生日

記念樹もすくすく伸びて未だ嫁かず

鳥取県 山本正光

小綺麗に老いたい日ひげは剃る

昼寝もし余生に力蓄えん

手を叩く鬼が一匹つきまとう

シナリオは一行もないひとり旅

陽が昇るまでに乾かしたいなみだ

鳥取県 奥谷彩子

幸せを反芻してるのど仏

氷まくらゆつくり融けて今日生きる

向い風まだ負けまいぞ古希の坂

待つ間愛ふくります花時計

千羽鶴一羽が降りてする童話

鳥取県 下田茂登子

耳ピアス 口ピアスした出土品

脳味噌もカビが生えそう梅雨最中

校則が面倒だとは許せない

元の妻忘れぬことに子が一人

面倒なことに父親みな違う

鳥取県 石尾かつ乃

夏祭り金魚一匹売れ残り
親離れ子離れつばめ今巢立つ

廃校の切ない気持ち手にとれる
老いてまだお洒落仲間に居て楽し

ああ不況買った金庫の痩せ我慢

鳥取県 国森武子

忙しく川柳忘れハツとする

どうしても川柳やめる事出来ぬ

一歩でも得るものあればよしとする

七十を過ぎて生き方見直そう

ゆつくりと自然を眺めくらそうか

松江市 小川注湖

同窓会やはりマドンナ見栄つぱり

梅雨晴れに街に溢れるキャミソール

サッカー騒ぎ小さい村が全国区

城の石垣悠久の誇り持ち

女房は財布の上に座ってる

松江市 安食友子

新世代インスタントが待っている

唐突に孫留学と事も無げ

明日以後が未知数だからどんぶらこ

焦心が癒されるのかイヤホン

落陽に今日のこも差し上げる

松江市 佐野木 みえ

ピカピカのコップに白い顔うつる
騙された事に気づかぬ夏帽子
揚羽蝶うっかり乗った騙し舟
星屑が降って私は鳥になる
引際に光る涙を見てしまう

松江市 川本 畔

豆の蔓やさしいしなで首しめる
白状する首の角度が美しい
老いてくる机の背もわたくしも
頬杖の先に死のこと恋のこと
涛々と空を許して川流る

出雲市 園山 多賀子

赤ワイン私は既に無重力
娘からメールが届く新茶の香
未だ少し余力があった向かい風
転ばないようころばないよう努力する
蝸牛 寝釈迦のポーズに馴れて来た

出雲市 吉岡 きみえ

ふるさとにだあれもない かくれんぼ
ふるさとは他人ばかりのほたるとぶ
花のある家にしばらく立ちどまる
ふところにラッピングした種をもつ
たいていのことは急いでやるつもり

出雲市 板垣 夢酔

流れ星用事終えたかやみに消え
キューキューと帯を泣かせてうれしがり
遠雷を手招きしてる鳴き蛙
ラッパには大風呂敷は負けていぬ
桑の実のうまさ蟻から聞かされる

出雲市 久谷 まこと

わだかまり解けない塀が高くなる
ためらっているからチャンス通り過ぎ
留守電に本音の方が入れている
家中が息吹きかえずサクラサク
不況風財布の軽さ身に滲みる

出雲市 小白金 房子

古書の市大きな心学びとる
ひと時の昼寝を誘う本枕
ラッキョウの名産砂丘の味を買う
戦中派過去は語らぬ太い指
福耳をもって哀しい事を言う

出雲市 石倉 芙佐子

ほんとうのことは言わない 凌香花
妥協点探してる間に日が暮れる
右向けば一日右を向いている
幻のような蛍が灯をとます
トンネルが続いて視野が掴めない

出雲市 岡 あきら

鉛筆の先に散らして今日のうつ
風鈴も逆らわれないで風の道
同僚の訃を悼んでか梅雨の空
線香花火ポトリ落した里の川
焼茄子が旨い明日が待っている

島根県 伊藤 寿美

晩学の挫折いくたび猫柳
古い家に住んで一人の祭りかな
MRIの音がわたしを切り刻む
過疎バスがいつも乗る子を待っている
麦秋や笠智衆に似た僧侶

島根県 榎原 秀子

明日は一日 神様用の榎買う
蛙鳴く田舎暮しも面白い
模様替え気分をかえて座る椅子
アイサーピス笑い上戸になりきれぬ
歩かねばと思う無理して歩くみち

岡山市 井上 柳五郎

改革のとぼちり不況の風が舞う
喜怒哀楽素顔は見せぬ都会の灯
こぼれ種朝顔見事咲いて見せ
色褪せしアジサイの花ちよん剪られ
盛り上る若葉の山を揺する風

倉敷市 小野 克枝

幸せな人に朝掃く道があり
野良犬の大きな耳も夏に入る
台風の目の中にいる自己嫌悪
それからの旅を心の絵に残し
倒産を知らぬけむりは垂直に

岡山県 富坂 志重

何事も軽く受け止め八十路坂
掛け声を出してから立つようになり
手をつなぐ子等に貧富のないひとみ
退院の祖父母をつなぐ茶の間の灯
階段の途中で休む老いの足

岡山県 小林 妻子

人間の弱さが祈る神仏
ダイエット信じ切ってる女舞い
既に朝一番乗りの洗濯機
紫陽花よ桜ほどには散れもせず
ゴキブリよ立入禁止区域だよ

岡山県 矢内 寿恵子

血縁地縁まだ古里は捨てきれぬ
想い出を集めて遠い日に戻す
物忘れ生きる証のように増え
辞書を引く指の先まで老いが責め
酸欠の街で光っているピエロ

岡山県 福原悦子

半世紀生きた夫婦の道しるべ
口元が微妙にゆるみゴーサイン
黒枠の父の顎髭なつかしむ
ストレスを皿一杯に盛り上げる
混ぜ合うて夫婦ほどよい彩となる

岡山県 山本玉恵

さらさらと命をつむぐ朝の露
泣きやんで夕焼空の彩に酔う
定位置がぼかんとあいた日を思う
魔性もう解けたか女髪を梳く
魂をあずけてからの高いびき

広島市 森田文

育ちよき稲田を揺らしカモ親子
朝顔を十本買うて夏を待つ
行つてきます朝日が包む一年生
紫陽花のうたのなきこと不思議がり
歓喜と絶望ドラマを生んだサツカー戦

広島県 藤解静風

田植笠そろうてイベントになった
何もかもそろった頃の神経痛
夫婦でもポロリ言うてはならぬこと
生卵片手で割って料理好き
白桃のような慕情は枯らすまじ

竹原市 三宅不朽

とりあえず明日へ冷ソーメンがある
ときどきは鴉が好きになるひとり
咬みつかんばかり下弦の月の冴え
あるときは烈しく過去を打つ太鼓
鬼だった頃のネクタイ紐に見え

竹原市 小島蘭幸

術後三日目とても明るい車椅子
大部屋でもまれて生きる日が続く
お見舞いに愛犬だけが来てくれず
松葉杖退院の日は決めてある
退院をする向日葵のシャツを着て

竹原市 石原淑子

太陽と大地の愛に生かされて
読経のようにも聞こえ朝の蟬
夏の彩パッチワークにとどめおく
コーヒーミル朝の頭に活を入れ
夕映えの二人の旅や縄電車

竹原市 古谷節夫

極楽のバスポートなら買っておく
この川を上れば生家見えて来る
源流のせせらぎ心地よい音符
戦友の妻がときどき隙を見せ
本当に夜逃げをしたい時がある

竹原市 時 広 一 路

ちよつと顔見せておくれよホーホケキョ
さてどちら硬貨に聞いてみようかな

方言の森に優しい水が湧く

躍動感あふれる滝の水しぶき

すいすいとメダカ素足を誘つてる

宇部市 平 田 実 男

黙つてる時が一番怖い妻

耳打ちがとつても好きな族議員

火傷する恋を一遍してみたい

盃を交わすと解けてくるしこり

千鳥足へ戸惑っている万歩計

熊本県 高 野 宵 草

マニュアルの筋書どおり騙される

薄情になれぬ負け犬寄る屋台

ペイオフや由緒正しき貧に居る

家具調度座敷の他はみな安い

温泉に脱いで平和の極み知る

唐津市 山 口 高 明

義妹の方がお猪口の相手する

目標があるから辛さ感じない

捕まれば共犯主犯なすり合い

面倒な事は嫌いな大使館

投げ出せば楽になれても卑怯者

唐津市 宗 水 笑

石段を見上げ弘法大師様
妻の留守葱のついでに指も切り

茶柱の当たり美人の横の席

ダイエツト風が哀れむほどに痩せ

夢を追うただそれだけの宝くじ

唐津市 市 丸 晴 翠

夢を追う男に添うて米を研ぐ

排気ガス出さぬ自転車乗り回す

核廃棄青い地球は皆のもの

パトカーに送られ祖母の得意顔

鉦チンと鳴ると饅頭消えてゆく

唐津市 樋 口 輝 夫

武器はある米を寄せと不審船

山の子ら塩っぱい波に大騒ぎ

他人の妻だけに優しいわが亭主

宅配便隣の家で行き止まり

W杯オウンゴールで泣く不運

熊本県 岩 切 康 子

梅雨最中 下駄箱中の靴磨く

立話最後は夜の献立は

百円シヨップ暇を潰して面白い

再診の告知へ何も手に付かず

歳かしら睡魔に負けて朝になる

香川県 池内 かつり

反省をしながら酒を飲んでいる
ゴミ出し日男同士の照れ笑い
年金で大振る舞もたまにする
腰曲がっても信念はまげられぬ
Sサイズの店から安売りのハガキ

香川県 神保 坊太郎

順々に脱いで大人になった竹
神さまの見せてくれないお手の内
人間は怖いとエンマの独り言
三寸の舌の先から嘘の山
譲られた美田は重しまた軽し

松山市 宮尾 みのり

赤い色には血が騒ぐ野次馬で
急いだら山頂はなお遠くなる
烏合の衆という保護色を持っている
ゴシップを逆手にとつてのし上がる
フォローして火中の栗を拾う羽目

松山市 丹下 美津子

女ごころとにかく隠す腰の線
冗談も言えてお見舞いホツとする
伏魔殿つぎつぎベール剥がされる
馬耳東風 妻は言い訳聞いてない
スズメの涙ほどです満期利子が来る

高知市 北川 竹萌

植え置きし桜景色の公園に
お旅所公園 歌碑は故里仁淀川
銀髪ふさふさ黒一筋の悔い持たず
九十入りやるべきことの多過ぎて
長らえて心静かにやる誓い

香川県 瀧井 勝

繁盛を捌く陽気な七分袖
ひとり娘が孫三人目産む吉事
天才に俺より鈍なところがある
手の内は読んでるらしい目が笑う
遅々とした我置き去りに稲の穂よ

砂川市 大橋 政良

ものわかりいいお芝居が上手です
水車コトコト案山子の愚痴を聞いてやる
恐いのは刺さるあなたの言葉です
追いついてゆく人ばかり風の街
わかったようでわかってない記憶

黒石市 相馬 一花

平成になって案山子が雲隠れ
腰痛をいたわりながらよされ節
熟年を笑うな君も途上中
女房にまだ褒められたことがない
夫だけ妻の素顔を知っている

十和田市 阿部 進

子ども等に支えられつつ生きる偉
笛吹けど我が家の主人踊らない
渡る世に近道棚ぼたなどはない
卒寿でもまだ忘れない薄化粧
お人好し疑う事を知りません

弘前市 高瀬 霜石

皮下脂肪柔和な顔を創り出す
公も私も頭痛の種にことかかぬ
ケータイは手にも耳にも馴染まない
毒舌はよし本人の前で言う
嬉しいな馴染みの店が混んでいる

弘前市 福士 慕情

飲み代は何とか都合つく財布
宴会を一足先に出るトップ
腕捲りして飲む女に捕まった
忘れたい死にたいなどと呑むコップ
ネクタイを外し冷蔵庫を覗く

弘前市 須郷 井蛙

農業の敵恐ろしい輸入品
売れ残り狙って向かう市場籠
母の字に引退はない木綿針
ケーキよりまんじゅう美味しい老いの歳
高級のメロン大事に腐らせる

弘前市 小寺 花峯

君の瞳は百万ドルの輝きだ
三合で終りにしようまた明日
ラーメンが無難と思う観光地
五体満足次の欲望ひよいと出る
呑める日が今日もあつたと生きている

弘前市 岡本 花匠

金婚の橋越え次へつなく夢
水玉のネクタイ凜と惑わない
変換キー押した決断ロスがない
カテーテル ハートの悩みときあかす
健康の夢へつなげる梅を挽ぐ

弘前市 一戸 ツネ

梅雨寒や宵宮は何処ぞ遠花火
無感覚 河童の水が洒れてくる
老人性なんやかんやと医者通い
古い詩集ことばきれいな懺悔文
エネルギーシユに格安旅行口シアまで

弘前市 蒔苗 果林

梅雨寒に着膨れ老いのあどけなさ
声嘎れも恋枯れと言う紅マフラー
お客みなサツカー解説して帰り
相合傘歌う夜霧よありがとう
梅雨の明けママに花束パパが選る

弘前市 櫻庭順風

わくわくと主治医の顔を見る杞憂
肝臓と頭に血腫持つなんて
宿痾を持つている歳になりました
二時間も待って一分診る予約
もうちよつと主治医を信じ六ヶ月

弘前市 中山雅城

今もなお二人三脚やってます
ばちばちと垣根の樵切る匂い
蜘蛛の巣を払うと空が青く見え
紫陽花が咲いて庭から顔を出す
岩木山見れる朝日を背に受けて

東京都 後藤早智

それとなく母が出してる助け舟
葬送の曲を選んでる佳き日
梅雨空も上がり笑顔の星まつり
悩み事まで受け止めるボランティア
カスミ草時々買って生き返る

横浜市 清水潮華

冷房車睡眠不足とり戻す
一理ある話へ迷う選択肢
自己流の強気我儘とも取られ
紫外線黒を選んだ夏帽子
緊張の空気が満ちる離着陸

横浜市 菊地政勝

節々が痛み中古度さらに増し
沈黙を通すひとつの意思表示
自販機の前で少年大人ぶる
欠点と思っていない笑いぐせ
未来図を描けなくなつた若い人

横浜市 田中笑子

浪人も限度があると家族の目
在庫品少なくなつた知恵袋
家計簿と四つに取り組むふた所帯
途中下車しながら生きる歳になり
引き取れた母に笑顔の出た安堵

富士宮市 渥美弧秀

ククアタアタアス朝刊読む間鳥の啼く
宅配のメロン夫婦のティータイム
歩行玉入れ努力溢れる車椅子
飲むほどによもやま話星月夜
訊き返すこと多くなる傘寿過ぎ

静岡県 蘭田猿杏

うるさいと言われる前に外に出る
精巧なロボット人の真似をする
老人の夏のファッション高が知れ
今日一日財布開けず日が暮れた
はんやりが金儲けには長けている

滋賀県 中 宗明

すんなりと縁談話進まない
情熱のバラを胸にし似合う妻
禁煙も三日坊主に終りそう
言い出しつぺ面倒見るは当然だ

大阪市 大川 桃花

靴の紐ほどけてるのもファッションで
内股に脱ぎ捨てられた父の靴
請求書みて節電の三日程
タイガースやつぱり遠い優勝旗

高槻市 左右田 泰雄

逃げ腰のコメント誰も信じない
失敗談聞かせて心開かせる
振り向かぬ後姿にある余韻
降りそうな空に急かされ弾む息

枚方市 二宮 山久

ふる里へ帰れる母はまだ元気
下積みの人生見送る送別会
転勤も慣れたか息子の電話ベル
あと二年妻がせつせと手并当

西宮市 刈田 泰司

心配の種は息子の起業欲
心配は卒業前に仮免許
心配がふくらむ風船破裂する
苦労した人だと思ふ目がやさし

鳥取市 田村 邦昭

痴呆かな母が小さな嘘を言い
貧しさを乱す隣のいい匂い
大器待つ親の願いを子は知らぬ
宿帳に震えながらも嘘を書く

米子市 野坂 なみ

殿様のルーツ辿れば野伏せりだ
初孫を囲むとっておきの笑顔
バトンタッチ少しのほん生きてみる
ある予感お寺へ寄附をまつ先に

米子市 永井 三津子

嫁ぐ娘と仏間で語る過去未来
人なのになの心が消えてゆく
早乙女に茶髪の子等ももんべ穿き
子も巣立ち我家の主役犬となる

米子市 神庭 詩郎

秋近し蟻早々に冬ごもり
定年後の役生きがいの糧に受け
信号の先に警察待っていた
盆終わり初秋を知らず赤トンボ

鳥取県 平井 栄翁

退職しても家では太刀を持つ
秋の蚊に親切こめた平手打ち
髪型を変えた妻見て若く成る
子を持たぬ寒さが募る老いの坂

鳥取県 吉田 孔美子

パンパス外したままでもめている
健康に駅までつらいつらい距離
表には二流の面で立っている
燃えることないからもめる事もない

出雲市 富田 蘭水

いやな梅雨柿の葉ばかり艶々と
ボランテア少しはお役にたつただろう
初なりのリングに思いよせている
御ていねい食べ頃書いてあるメロン

高知県 小澤 幸泉

たたかいを終えて素顔を取り戻す
孤の部屋で季節を過ぎた花を生け
理由もなく娘の部屋が騒ぎだす
ときめきをまた再びと待ちつづけ

(社)全日本川柳協会役員改選

六月九日の沖縄総会で次のとおり役員が改選された。

名誉会長	仲川 たけし
会長	吉岡 龍城
理事長	今川 乱魚
副理事長	塩見 草映

第12回「太平記の里」全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市民会館・同市川柳協会
後援 太田市教育委員会・(社)全日本川柳協会ほか
日時 12月1日(日) 9時30分から 締切11時30分
会場 太田市福祉会館(0276-4518291)
東武鉄道伊勢崎線太田駅南口下車徒歩10分

第一部(当日参加者)

課題及び選者・各題2句詠とし表現方法自由(但し新作)
「掟」今川乱魚・「青い」川俣喜猿・「重荷」竹本瓢
太郎・「宣告」荻原柳絮・「分け合う」成田弧舟・
「しなやか」田中寿々夢・「決断」太田紀伊子・
「誘惑」てじま晩秋・特別課題「持ち味」羽田桐柳
参加費 2000円(昼食・発表誌呈、当日払い)

第二部(郵送での参加者)

宿題 「働く」選者——斎藤大雄(北海道) 関水華(神奈川) 大野風柳(新潟) 西来みわ(東京) 橘高薫風(大阪) 磯野いさむ(大阪) 山本翠公(大阪) 小松原爽介(兵庫) 吉岡龍城(熊本)

応募方法 二句詠、参加費1000円を添えて郵送
第一部、第二部の特選句の中、最優秀句の句碑建立。
前夜祭(5000円) 出席・宿泊の方はお申込下さい。
締切 9月30日(月) 当日消印有効

申込先 〒373-0851 群馬県太田市飯田町八一八

「太平記の里」川柳大会係(Tel 0276-4518291)

白選集

七夕忌

夫婦にてその後酒の詩ありや

敗戦の胸に育てていた牡丹

掃去来ふる里に友一人

桔梗の皆向こうむく別れかな

嗚呼09006304444之墓

橋高薫風

川島諷云児

穏やかに生きたし夜はクラシック

何はともあれ夫婦喧嘩の出来る幸

髭剃って風の誘いを待っている

潔癖で濁った川は渡らない

飛行機は苦手高所恐怖症

木村あきら

日々好日余生此の掌は白いまま

羅針盤少し怪しくなる卒寿

老農の鍬は今でも光っている

蛩ほどのあかり燃やして未だ死なず

数珠入れた巾着がゆく寺詣で

工藤吟笑

大海で雑魚も鯨も同居する

組板の鯉はいっぱん跳ねてみる

ダイオキシン残して川は流れゆく

風呂敷に包み切れない母の情

号笛も高らか瀬戸のミカン船

黒川紫香

残照や鴉が一羽西へ西へ(悼む水客さん 5句)

潮花亡く水客も逝き梅雨明けず

毎日が作句七十年つづく

何処までも澄むみずうみを見てしまふ

個性派の一句は七味唐辛子

小西雄々

息抜きのもり天声人語読む

貯めすぎた遺産でもめるいやな記事

ミラーボール回ると何時も温い風

夢蛩いのち燃やしてつつ走る

コンセント抜かれ気付かずミステーク

小林由多香

すんなりといけばいったで物足りぬ

なんぼ暇でもシャッターは上げておく

ためらわずまぐるのトロと大ジョッキ

けんかには両成敗という裁き

休耕田雨が降ろうと降るまいと

斉藤 嘉

青虫だって真剣に生きている
裏庭に七星天道虫を飼う
土曜日の子等へ羽はたく花畑
この川の誇り螢が来てくれる
若草の匂うお方で牛好きで

田口 虹汀

午後四時になると風にも見る風情
寝転んで浮かんだ詩は掌に乗らぬ
道中は皆詩の種山頭火
十年前に見た紫陽花は若かった
八代亜紀するめに何か書いている

竹内 紫鏞

教練の銃の部品はすべて死語
戦場短歌詠む健脳を見習おう
厄年の二倍のバーが見えてきた
学園駅エレベーターは要らぬ足
骨導の補聴器まずは名曲を

玉置 重人

風媒花風のなさけに身をまかす
気がかりは妻がやさしくなってきた
表紙絵の塔から元氣戴きぬ
我慢我慢と窓ぎわの椅子が言う
全集を買えとゴツツイ値の電話

月原 宵明

一つおきに胸のボタンを外しとく
倅せな家は笑顔と笑い声
眠れない風鈴外す風の夜
外商の不首尾夕焼雲を背に
広辞苑遂に枕になつちまい

恒松 町紅

喜んでくれたと皺の汗を拭き
婆さんのかまどの話中ばつぱ
自慢した筈がいつしか愚痴話
洗濯機昔話を聞きたがり
盃にめでたい話浮かばせる

遠山 可住

裸婦像へ犬がオシッコして通る
雷があばれて妻は女なり
一病をかかえ二軍に従いてゆく
信念やおへん頑固と言いますねん
一輪の山百合老いの部屋満たす

土橋 螢

負けてから五十七年生きのびる
零戦に乗った夢からまだ覚めぬ
ワイルドカップ八月十五日を思う
小説に出てくる美しいおんな
水無月の月から飛んでくるほたる

仁部 四郎

見たままの顔と鏡が返事する
見たままをテレビだからと信じない
見たままの男と今を反り返る
見たままの景色で忠治国を売る
見たままの国だがやはり投票所

西田 柳宏子

梅雨バイバイ台風も二ツでお見送り
雨しきり祇園の鉾も山も濡れ
知事辞職即立候補と手際よし
もう一度行きたい旅に事故続き
バイバイと手を振り保険も切れていた

西村 早苗

茄子漬けがうまい風鈴よく響く
蠅叩きながら蛙焼いている
雨止んでトンボが持つてくる手紙
窓開けりゃサツと飛び出た赤トンボ
お握りがうまそう半分くれそうな

野村 太茂津

囀る小鳥それは極楽余り風
昔握った操縦桿の腕揮う
老いの症状そのまま捨てた免許証
婚約条件可笑しな頭剃れ
サツカーで負けたら剃ろう丸坊主

野田 素身郎

入退院くり返えしたすえ義姉は逝き
妻という杖がなければ歩けない
人生に退屈しきった大欠伸
電話ひとつかかってこない梅雨最中
買いいおきの肌着も尽きた梅雨最中

波多野 五楽庵

ふり向けば可も不可もない柳かな
虞や虞や吾が師の孤愁かい間見る
花言葉花も弱音を吐いている
虚と実のはざままでニトロ効きはじめ
一周忌極楽浄土に着いた頃

藤井 明朗

友の元気知らされうれし敬老日
台風よ少しは西北地方も雨を待つ
初盆の友の写真が淋しそう
北の海離島事件起きていた
小泉総理改革後退する気配

藤村 女

さしかけた人が濡れてる俄雨
別れての傘の雫が重くなる
叱られる泥んこ夕陽が朱に染める
野の仏さきれいに染めて月が出る
物忘れだんだん命軽くなる

舟木与根一

クレヨンの個性いじらぬ方がよい
百点の嫁でモンベがよく似合う
親子にはやはり見えない夏帽子
飛行機が落ちててもさほど驚かぬ
晩鐘が鳴って宍道湖幕があき

芳地理村

急坂を喘ぎあえぎの奥の院(宝生寺)
目を見張るシダ群落の無明谷
急坂へ一息入れる無明橋
スッテンと尻もちついた鎧坂
神橋を包む紅葉の丹生の川

宮口笛生

百葉の長を信じてのんでいる
美容院から妻美しいお婆ちゃん
し放題の悪を政府も少年も
洗濯の乾かぬ不平雨続く
人生の余白を埋める酒がある

森下愛論

老いてなお愛の鼓動を確かめる
触れる肌重さに愛のいさみ足
人様の弱点探して悦に入り
負けぬ気の敗者孤独の憂き目みる
残命を呪文で満たす修羅の道

八木千代

紫陽花の闇は私の仮住居
瑠璃か玻璃か雨に輝く梅雨の花
こうもり傘を伝って落ちてゆく名前
誕生日忌の日と重くなる文月
雨に翔ぶ翼のしづく振り切つて

八十田洞庵

因習へ脱皮の口火切つた嫁
ピアニシモ今宵の月がなぐさめる
よう待たせたな今きたところわたくしも
繕えばともるものあり女です
埋もれ火をワインがそつとかきたてる

両川洋々

神様のトラブル四季が狂い出す
着飾つても心のくもり隠せまい
満点の人生妻よありがとう
地球儀の芯がグラグラするテロだ
沈黙を破るモラルのため破る

阿萬萬的

生きるためとは言え軽い嘘をつく
古日記つくづく頑固な僕を見た
腰叩くしぐさが癖となる八十路
日々好日老いの散歩に万歩計
人生の迷路出口がまだ見えぬ

石川 侃流洞

捨てるもの陋習の外何もなし
大物秘書虎の威を借り反つて来る
雲の峰むくむく待つてた海開き
宇宙の果てそこが極楽かも知れぬ
少し酔つて女と踊つていたタンゴ

板尾 岳人

輝いた星が流れて逝くように(故正本水客氏)
四十年古い乳房を愛すべし
親不孝母を背負つたことがない
母連れて山の中なる風の盆
人間が好きで逢いたい風の盆

奥田 みつ子

十重二十重祝福に酔う師の笑顔(祝薫風先生喜寿)
ちさい幸見つけて今日も恙なし
雨の日は雨に倣つて生きてゆく
我が影と向き合っている夜の底
子も孫もみな健やかに一周忌(6月30日夫一周忌)

越智 一水

路郎忌や軸 短冊をかけ静坐
子の声も光り輝く柿若葉
念ずれば仏は心丸くする
ででむしが雨を降らせて動き出す
食べぬのに口が酸っぱい青い梅

河井 庸佑

喜怒哀楽こもごも駅にあるドラマ
写経して山門あとに軽い足
スランプを抜け出す手立て模索する
言いたいことぐつと押さえた喉の奥
温かい風に押されて湧く勇氣

河内 天笑

いらつしやいませと藪蚊に手を刺され
かまきりにしばらく背中歩かれる
蛾の粉に爆撃された腕が腫れ
産む池を探しあぐねているとんぼ
一斉に茎のぼり出すかたつむり

第10回相生市もみじまつり川柳大会

日時 10月20日(日) 開会13時
開場10時30分 締切11時40分
会場 相生市総合福祉会館 4 F
相生市旭1-6-28 0791-22-7125
参加費 1000円
お話し 題 「生きる励みに」 泉 比呂史氏
各題2句 欠席投句 拝辞
「背」 高橋はるか 選
「踊る」 井上あや路 選
「祈り」 河内 月子 選
「ゲーム」 小林 妻子 選
「主役」 赤井 花城 選
「自由吟」 小松原爽介 選

主催 相生市・相生市教育委員会ほか

水煙抄

奥田みつ子選

今治市 塩路 よしみ

明るさを演じて点る灯が温い

酸欠の街で笑いが固くなる

愚痴吐けば心のうちは晴れますか

正直な答がかえる水鏡

紫陽花の吐息聞いている銀の雨

意にそまぬ流れのままに棹を差す

鳥取県 福西 茶子

茶断ちした祈り届かぬ訳がない

嬉しすぎて少し苦めの茶漬喰む

朗らかになるため笑いぐすり飲む

歯にダイヤ埋めて昏明らかだ

交換の時期か脳みそ軋みだす

辞書にない日本語しゃべる宇宙人

奈良市 乾 春雄

会って来た余熱日記が燃えている

友情がつづく友との車間距離

相談に乗って噂にまき込まれ

輪の中のお真ん中においてなお孤独

履き馴れた靴ではまった落し穴

さりげない笑顔で痛い釘を打つ

竹原市 正畑 半覚

いい汗をかいて人間らしくなる

父の汗かいた帽子が捨てられぬ

汗を拭く母の笑顔にある命

戦争の汗がぐらぐら煮えたぎる

親子孫 汗と涙を継いできた

汗が乾くとふっと寂しくなってくる

鳥取県 澤 裕子

幸せを盛る菜箸が弾んでる

錯覚に気付き笑いが止まらない

太い眉細い眉にもある悩み

主婦と言う枷に泣く日も笑う日も

ユニークなCM脳に入り込む

綾部市 藤田芳郎

飯の世も三途も平泳ぎで渡る

百葉の長がこの頃長居する

プリクラへ孫とネクタイ締めて行く

身の丈をでんでん虫の命がけ

実直に生き実直を嫌い抜く

神戸市 両川無限

好きという弱味きつちり握られる

計算は合うがお金は残らない

負けて勝つ女は先の先を読む

人妻の幸福論が行きづまる

花言葉全部覚えて恋終る

札幌市 三浦強一

新しい眼鏡に誰も気付かない

人間臭い志功の刻む仏たち

一言の魔力毒にも薬にも

自己過信梯子は空に伸びてゆく

終章へ欲ひとつずつ捨ててゆく

愛媛県 花岡順子

生き方に迷う若さを持つている

子育てに時々使う鬼の角

真心へ鬼がゆつくり回れ右

マイペース道は歩いた方がよし

そろばんを仕舞うと終わる小商い

檀原市 安土理恵

いかがです蓮の台の住みごこち

白百合を女ときには武器にする

口惜しくて火あぶりにする茄子二つ

鬼あざみ今更善女にはなれぬ

オレンジ色の鬼火がさわぐ八月忌

京都府 前上英一

南座がはねて余韻に酔う川原

町衆の汗が支える辻回し

千年の銚を支える縄の自負

命まで売らないタイムカード押す

囲いだけの禁煙席にきた煙

堺市 藤井一二三

それからを喋らす餌を練っている

想像に任すと細い目で笑い

勿体ないことに余命を持って余し

それからを信じて虹を描いている

比翼塚濡らして梅雨の音もなし(野崎詣で)

東京都 やまぐち 珠美

別々の時を過ごしてひとつの灯

棄てるには脱げなくなつた顔の皮

花道を去る顔に浮く負の安堵

くくる手が次第に荒ぐ別れの荷

まず答えがあつて迷宮から出ない

愛媛県 黒田茂代

ストレスの溜まった声がり出す
怠け癖死ぬまでついて来るだろう
一人来て命を洗う滝の音
里の庭 妣ははに繋がる花ばかり
歳月へ風鈴の音は変わらない

横浜市 荒井広和

目立ちがりやを誘い込む悪魔の手
酸欠の脳が目覚める里の風
パソコンが老いの孤独を目覚めさせ
空っぽの脳裡補うフロッピー
何気無い言葉の端に情が透け

横浜市 川島良子

亡母に逢う月下美人の花が咲く
針の位置息をひそめるダイエツト
血液型聞いて納得してしまふ
長男に嫁ぐ勇気がありますか
飛びついて夢中になってポイと捨て

横浜市 芦田鈴美

お世辞でも美人だなんてはひふへは
老犬に頼りにされている老後
身辺整理するには空が青すぎる
中流を疑っているカラスの目
サポーター先ず髪型に魅了され

横浜市 三村八重子

ブランドにくすぐられる虚栄心
弱点をさらしてからの友の位置
大阪弁切口上を軽く逃げ
足音を消して軍靴の有事法
お茶にごす術を覚えて社会人

松山市 高橋宏臣

言い切った言葉に迷い後で来る
咀嚼するうちに反論気が萎える
煮詰まって浮かび上がったのは本音
生き延びる都合言わねば黙らねば
青春の詩集書棚で独り言

柏原市 永浜加津子

バーゲンのサンダル弾む炎天下
かすがいの娘嫁いですさま風
ウツの日は大きな声で笑います
スキップをまだ出来るかな夜の道
寝つくまでそっと扇いでくれた母

羽曳野市 森下一知

賞味期限僕もラベルを書き替える
ちよぼちよぼの暮らしが繋ぐ友の縁
ポロポロと脳の壊れる音がする
ヒーローを譲って機打を積み上げる
パーフェクト求めて息が切れてくる

秋田県 湊 修水

サポーターのひとりとなつて夜を更かす

元氣だけ取り得しよつちゆう物忘れ

九十年部品も換えず生かされる

卒寿から老いが加速をするらしい

いい酸素吸いたい朝の万歩計

日立市 加藤 権悟

一滴の水八月を忘れない

学徒蚩知覽の母を忘れない

玉音の慟哭 天を見ていたり

まだ父に精神棒が夢に出る

輪の外で独り影法師と語る

町田市 土田 今日子

みな明日を期待するから生きられる

やる事へその気にさせる鞭を打ち

ミニもよしロングも似合うのが若さ

家事をする母が好んだ七分袖

マイホーム陸の孤島にやつと建て

横浜市 長島 亜希子

明るくて帰る気しない北の夏(中欧を旅して)

王宮でテレジア気分ワルツ聴く

支払った額より多いつもりもうらう(ユーロで払いコルナのつり銭)

村中が菩提樹の香に包まれる

楽聖の愛した森で口ずさむ(ウィーンの森)

横浜市 山梨 雅子

人生の半ば大きな落とし穴

百名山果たせぬ夢に地図広げ

菜園のいん元を摘み朝の膳

ありがとう優しくなつて退院す

念入りのメイクで席を譲られる

川崎市 小林 久美子

逆風の鬱を救ってくれた趣味

身内より他人の中にいる味方

ポイ捨てへ心痛める子に育て

開発の陰で泣く者笑う者

地に墮ちたモラルにいつも泣かされる

岐阜市 平野 あずま

善戦へもう一勝の欲が湧く

一球の重みが明と暗に分け

旅の味 宿の膳よりうちのめし

無病だと肩身の狭いOB会

老人と役所で決めて手帳来る

大阪市 三浦 千津子

何事も許せる今日の青い空

価値観にかなしいほどの距離がある

堪忍袋今日は妥協をせぬつもり

占いは吉だが税上がらない

突き当たたる壁へ賢くなつて行く

大阪市 岩崎公誠

世話好きが押しつけにくる高い寄付

雨の恋百円傘で濡れて行く

雑魚ばかり騒いでいるか稲光り

封印の恋の映像巻き戻す

絵手紙の母の署名が瘦せてきた

大阪市 尾崎黄紅

自画自賛なり落款を強く捺す

寝返りを打ってあしたはあすのこと

消印をみて迷うだけ迷うたなきび団子貰ってからの猜疑心

絹の暮しも木綿暮しも日は昇る

和泉市 横山捷也

ソロバンに合わない趣味の鋏を持つ

冗談の出る病妻の回復期

切札があるから楽に生きられる

公園に私と猫の指定席

消灯の月の光に詩人めく

泉佐野市 稲葉洋

爺ちゃんの麦わら帽で夏休み

暑氣払い量はとつくに過ぎており

あっちこち迷い悟れぬままで枯れ

これからの為これまでを反芻し

こんなにも人人が居てひとり旅

河内長野市 大西文次

近江路の旅の疲れに仮眠する

あんだ等も散歩ですかと犬同士

百歳で百万やると言われても

住み慣れた浮世そうそう出て行けぬ

辻褄の合わぬ言訳聞かされる

吹田市 木下敏子

耐えること母に習った座りだこ

善人にされて毎日忙しい

一日を精一杯に咲いた花

飾るものないが笑顔の老夫婦

普段着のつき合い丸い顔揃う

吹田市 須磨活恵

花菖蒲しつとりさせる小糠雨

捨て切れぬものを大事にして生きる

残念な涙を明日の糧にして

雑学で努力してます蝸牛

こだわりを捨てると別な風が吹く

羽曳野市 福田悦子

脳梗塞母を童女の顔にかえ

どの窓にも秋を届けた赤とんぼ

秋の雨シヨパンの曲を聞くような

祝敬老母は米寿になりました
また来てねベッドの母が手をにぎる

東大阪市 田中 美弥子

トロッコで黒部の風に酔うている

満天の星へ忘れている痛み

美人の湯女ごころが浮いている

まだ蓄いつか咲く日の夢をみる

塵ひとつ取れてなめらか夫婦独楽

八尾市 松葉君 江

古時計ときどき音を確かめる

傍目には非の打ちどころのない夫

けん悪な空気ベツトがやわらげる

不用意な一言傷を深くする

ユーモアで介護地獄をのりこえる

尼崎市 軸丸勝 巳

手を叩くだけでは鯉も寄ってこぬ

通帳と相談して余命表

元任地訪ねるつもり古い地図

山登り一息つけと池がある

8・15掠れることのない記憶

尼崎市 河津正治

晩成の夢は気軽に打ち明けぬ

古墳なお時を刻んで謎を秘め

口紅が濃すぎて本音出て来ない

権力と野望渦巻く派閥地図

企みは持たぬ小さな手が温い

篠山市 谷田 多美子

亡母の味手が届かずに山椒煮

三猿でおさえる老いの生きる知恵

泣き笑い山坂越えた欠け茶碗

負うた子に後はまかせて趣味に生き

指の先まで菩薩になつて曾孫抱く

篠山市 円増純子

感謝さえすれば和む日々がある

お化粧をしたのに訪問客がない

逢いに行く貌は一途で美しい

残る命うんと明るく生きたくて

生き様が決める余白を埋める色

奈良県 江波正純

ライバルに勝たせておこう僕は僕

さまようてやつと見つけた僕のところ

サラ金のティッシュにひよいと手がのびる

褒めごろし乗ってほぞ噛むへぼ将棋

吸血鬼庶民の生き血ばかり吸う

和歌山市 土屋 起世子

冷凍魚 戸籍抹消されている

大家族共に暮して頼られる

炎天下井戸水汲んで墓まいり

胸の中整理したくて手紙焼く

フルムーン十指にあの日甦る

鳥取県 橋谷 静江

手を繋ぐ親子の浴衣なごやかに
影だけが私を信じ従いてくる
早起きがリズムになって畑へ行く
菜園へ行つて空気のうまい朝
立話ほどよい頃の俄雨

鳥取県 竹森 富久江

今すぐに逸るころを自制する
仏前にぬかずき今日の無事祈る
呻きから生まれた詩だ人の子よ
着想を固めた詩が笑つてる
一匹がまた新しい空を見た

鳥取県 奥田 保子

しあわせは身近にあると気付かない
楽しみは食事人生にも飽きぬ
感動の幅を広げて生きていく
年齢と共に心が広くなる
ありのまま生きていいんだがんばるな

鳥取県 吉田 弘子

六十五年人のころに未だ迷う
平和だなアンテナ張つて噂好き
二人だけの記念日昨日だったのか
奔放に泳ぐと敵が増えてくる
何気無いことばの棘に苦勞する

松江市 松本 知恵子

すつきりと忘れ上手の日日草
雑草も怯むかばちの蔓の先
ケータイを止めて夜空の星といふ
まなざしは未来永却地蔵さま
鼻先のサイン見ている象使い

出雲市 荒木 英子

比叡山リユック背負つて無我の境
老い二人重い荷持たず旅に出る
花嫁衣裳重さ忘れて幸に酔う
原爆に命の重さ考える
今にして母の形見の重さ知る

岡山市 大森 純子

公園のハトわたくしを通せんぼ
中抜きの話が出来るハーブティー
君を待つようにあじさい雨を待つ
日本代表みな親戚が増えたらし
百均の一寸ステキな男の子

岡山県 国米 きくゑ

いざ本番やっばり姑の割烹着
つましい父の足跡子にゆずる
おいしそうなレシビ眺めて冷そうめん
どちらかが折れて道づれ長い旅
追憶の人の若さよ風の盆

府中市 馬場 利子

針の穴母の元氣さ知りつくす

夏へ浮く雲へケロイド疼きだす

わたしだけの角度が欲しい万華鏡

本を伏せ明日のドラマ模索する

凜としてバラはカリスマ謎の彩

農を継いだ棚田で生きた父の腕

傷ついた心繕う母の糸

結局は妻の虜になつて生き

腹の虫そつと押さえて先を読む

窓を拭くこの世の表裏見えるまで

今治市 野村 清美

石投げた波紋に心揺れ動く

割り箸が上手に割れぬ気の焦り

平凡と言う幸せを噛みしめる

たかぶりへ真つ赤に染めて日が沈む

今日も無事暮れて仏と語り合う

ストレスもついでに飛ばすサポーター

諦めの連続老いる事と知り

梅雨空をおしゃれ心で跳ね飛ばし

買った花でんでん虫のおまけつき

梅雨だものたつぷり降れと網戸ごし

高知市 伊野部 和江

高知県 桑名 孝雄

うちの有事法起床ラッパと五分前

年金は十俵二人扶持の禄

腰弁にすれば男の味になる

どんぐりと雑魚の仲間にある温み

孫一色こんなオマケもある老後

たたかれてはじかれ西瓜値ぶみされ

爪と髪老化も知らず伸びてゆく

幸せは夫婦ともども老いてゆく

まあいいさ俺には俺の道があり

二十一世紀曾孫にバトンタッチする

高知県 百田 幸

朝市の世間話に知恵貰う

うたたねの夫に年輪浮いている

暗い世にこんな明るい月が出る

散歩道今年もおなじ葵咲く

激流も度々あつた夫婦舟

ひたむきな努力に味方する女神

無事これ名馬過労死なんぞするな子よ

故郷の夏もまたよし西瓜割り

故郷の夜を素敵にする蛍

男にはどう効くのだろ美人の湯

北九州市 岡田 幸生

堺市 荻野 像山

松山市 古手川 光

そうりゆう会育てて急ぐ師へ合掌(小林周信氏を悼む)

孫が画く顔へ頑固も丸うなる

針箱に亡母の匂いのする指輪

わらべ歌素敵に歌う介護の輪

箕面市 北川 ヤギエ

瓢箪を出てから騒ぐ軽い嘘

大将の腕に見惚れる鉋屑

甘い水求め蛍の逃避行

ペコチャンのほっぺ膨らむミルフィーユ

八尾市 山本 宏至

青い空心にかくすものがない

大言壮語小さな肝がしゃべらせる

菓子ひとつふたつにわけ孫やさし

改札機何と利口な奴だろう

海南市 堂上 泰子

生き急ぐなと眠りの精が出すサイン

勝ち抜いて敗者の涙身に染みる

七合目あたりに待っている試練

国境の不協和音が呼ぶ涙

南国市 小原 圭二

残業のあかりを眺める散歩

うっかりと滑った口が呼ぶ波瀾

ときめきをグラスの酒に閉じ込める

肩書きがとれて戻った国訛り

正論のように聞こえる太い声

重く受け止めていますと軽い口

梅雨空へムズムズして登山靴

巣立たせた日から臍抜けになった妻

横浜市 秋元 和可

天国の絵ハガキ待てど届かない(満秋先生)

天国へ伝言託す星まつり

晩年は夫好みにとは行かぬ

親と子の距離を縮めたW杯

神戸市 伊勢田 毅

鴻毛の軽さで男ゴミを出す

肩書を外し分った敵味方

夫婦喧嘩時の氏神待っている

定年の父がたたんだ破れ傘

大阪市 星野 さらり

大往生笑って送る思い遣り(友の訃に)

有為転変人の流れに逆らわず

絵手紙のおどけた友の蝸牛

美しい色になりたい鴉の子

米子市 小塩 智加恵

デパートは濃い目スーパ薄化粧

這い這いのポーズで庭の草を引く

スーパで頭の体操して帰る

川柳塔ゆつくり読むと次がくる

島根県 福岡 博利

終章が雨のあじさい眺めてる
明日があるあしたがあると万歩計
コップの中の平和だけでは笑えない
日が昇るキジがあいさつしてくれる

藤沢市 妹尾 安子

人の字になって居眠る老夫婦
サンマまでグラマーぶりを言う夫
無免許のくせに指図の多い妻
小粒だと思つて蹴つた石に泣く

愛媛県 安野 案山子

紫陽花が思い出させる初デート
台風一過入道雲にほつとする
少年の日に戻りたい遠花火
逆境に堪えて男の顔になる

和歌山県 辻内 次根

どの門も開く心を弾ませる
踏ん張つていてもこぼれていく時間
山みどり少し濃すぎて少しうっ
雨の午後ゆっくり沈んでいく時間

枚方市 大昇 隆広

みかん一つ人に情あり辻地蔵
どれもこれもうまく行かぬは世のきまり
耐えている僕を知つて母の顔
顔 顔 顔 祝宴に居るお陰様

島根県 毛利 幸

夜店には覗いてみたい味がある
三世代心をつなぐ夏休み
海眺め心は遠く水平線
夏風情 蚊帳も昔の語り草

高槻市 乙倉 武史

熱帯夜続く思考力ゼロの鬱
バラ咲けば薔薇の字辞書で確かめる
健康へ自分のために汗を掻く
部活の子 礼儀作法は流石だな

大阪市 熊代 菜月

靴磨く日課続いて一周忌
息子より姑の眼鏡に合った嫁
嫁姑仲良く出来るだまし合い
ありがとう元気をくれた好奇心

野田市 那賀島 雅子

台風の予報見上げる昼の月
余生なお心ふれ合う音の欲し
胸奥の乾く心に水を撒く
野の草を折つて生命の臭い嗅ぐ

アルゼンチン 松井 美稚子

発酵を幾度も重ね夫婦酒
このミシン相手次第で丸く縫う
毎日が移住ドラマの種ばかり
口髭が少し惑わす御人柄

ニューオリンズ 阿良喜 聆

バビキユーが暑さを飛ばすジャズ祭

母の歳越して五姉妹元気です

古い物昭和一桁捨てきれず

孫だけが光って見えるリサイタル

日高市 根岸 方子

私しか知らぬ夫の良い所

今こそが学びの旬という笑顔

亡母の詩歌えば夢で逢えそうで

五十肩メニユーを減らす口実に

東京都 清原 悦子

住所録友が地方に散って行く

結局は心の中で泣き笑い

行き帰り花屋で足がつい止まり

今頃になつて気付いた真の愛

横浜市 近藤 道子

ハーモニカ遠い昔の音で聞く

再会の友と思ひ出探し当て

携帯の会話の中をすり抜ける

八月の波間漂う死者の霊

横浜市 巖田 かず枝

本当の事を言わない売り子さん

朝顔とほおずき競う江戸の夏

真夏日に備えキムチを漬けて置く

素面では娘の彼に会えぬらし

横浜市 金森 徳三

携帯と知って悔やんだ長話

ストレスの吸取り紙の孫の声

現職の夢でうなされ汗をかき

細々と年金吸っているストロー

横浜市 吉田 裕峰

放し飼いされても妻の見えぬ糸

愛の字を淡く支える老夫婦

衣更え無くしたメモがポケットに

足跡を消されOB面出来ず

横浜市 鈴江 純子

美容室帰りの妻に会釈する

奢るよと言われ胃腸が目覚ます

病名をポーカークフェイスして告げる

ふとこゝろに個性隠した蟻となる

横浜市 平達 也

幸せは思いのままに生きた甲斐

一言の労りあれば耐えて行く

妻の留守昼寝助ける盗み酒

朝顔につづくほおずき江戸の市

横浜市 石原 三郎

恥じらいし頃懐かしい喜寿の妻

女傘帰った妻が気にかける

生れ来て差別はないか黒金魚

輪の中で一人ぼっちに耐えている

川崎市 大島 三四朗

不況風かねの成る木はよく育ち
賽銭をはずむ心を見抜かれる
優しさはまぼろしだった鬼の面
夢に出る妻は優しい顔ばかり

静岡市 中西 雅

星空に自分の価値を問うてみる
いざれ行く私の通る道がある
スランプを雲の流れと話合う
赤い糸五十余年をつなぎとめ

京都市 清水 英旺

W杯ルール音痴も血がたぎる
庭の隅梅雨のにおいの半夏生
デフレ風吹いて人心安っぽく
あすも天気つゆの晴れ間のあかね雲

京都市 三宅 満子

リフォームしても住んでる人は老朽化
友がいて抹茶を点でている至福
左右の手持ちかえてまで長電話
癒される自然時には牙をむく

大阪市 伊藤 博仁

内科歯科眼科リハビリ ヘリが要る
囁きは聞かぬがよいと耳が鳴る
ほけた振り疑われない歳になる
雷も横向く臍が闊歩する

大阪市 西川 更紗

威勢よく暑さも飛ばすみこしギャル
日焼けした子等の喚声こだまする
炎天の僧に真心添える人
雨上り桃を携え友が来る

大阪市 平井 露芳

武蔵駅ドラマを前に活気づく
原節子追いつく女優見当らず
フランスが負けて淋しいパリ祭
九十歳他人は誰も悲しまず(母の死)

大阪市 伴 洋子

情に動く男で危ない橋の上
御仏の情け時には手厳しい
腑甲斐ない母に苦勞をさせている
幸せの星を握っている手相

大阪市 寺井 弘子

紫陽花に笑顔戻った雨の朝
紫陽花も大気を吸った梅雨晴れ間
不祥事の社名の名刺出しそびれ
あねいもと汁粉を囲み和む宵

大阪市 中村 忠敬

アフターファイブ赤いネオンがウイנקし
飲んでから下戸であるのを思い出し
軽やかにステップを踏む老夫婦
広いデコ知恵経験が詰まってる

泉佐野市 備後 三代子

より遠くハンマー不屈父子二代
情けより自力の欲しい飢餓の民
打つ手なく老舗佐しい貸家札
思うまま動けぬ吾を持てあまし

交野市 田岡 九好

たかるだけたかつて国も売る議員
サツカーで少し目覚めた愛国心
糞に懲りて膾を吹く平和
デフレでも運賃だけは下がらない

河内長野市 木太久 正一

生き甲斐を分け合うように友と囲碁
健康の幅も広がりゆく長寿
カメルーン中津江村と仲良しに
トラファンの悲鳴聞える梅雨はすぎ

堺市 大橋 錦

パソコンは趣味ない夫に打って付け
W杯にわかファンで会話あり
シミ老化 日傘帽子も効き目なし
花笑い鳥歌う世に生きる幸

吹田市 木村 無禄

写経して少し仏徒の顔をする
初恋へタイムスリップしてみよう
リサイクル利かぬ我が身をいとおしむ
自分史に今日も幸い書き留める

吹田市 二宮 栄子

バスツアー老人客は薬好き
ツアー客帰りのバスはよく眠る
一人住み家族ごっこの夢をみる
和服着て鏡の中に亡母を見る

大東市 南原 正和

幼子が若鮎のごと走り抜け
友の絵に心の色がにじみ出る
相客と気楽に話す旅の宿
パンチ効く親の一言子を支え

高槻市 大崎 侑子

マラソンは見るスポーツと決めている
アンカーでテープを切った花の頃
楽しさと虚しさ半ば宴果てる
結末を知ってから読むミステリー

豊中市 藤井 則彦

老いてゆく先を見越して嫁自慢
呆けぬうち女房自慢もやってみる
ばつ悪くなると眼鏡を拭いている
悪い癖見では真似する僕の孫

富田林市 稻川 惠勇

素敵だと素直にいえぬ自尊心
朝市で手料理も聞く宿ゆかた
夏祭り子等は夕餚もそこそこに
大ジョッキ髭へ泡立つ飲みっぷり

羽曳野市 永田章司

かき氷幼き昔つれてくる

教えない父の仕草を子がなぞる

孫五つ札より銀貨嬉しがり

故郷の空 今も鳶が円を画く

東大阪市 今岡貞人

老若のはざまで息をつめている

やすらぎを求めて鮎と旅に出る

あと一步譲れば風のおだやかさ

まだ続く我慢がまんの三宅島

枚方市 二宮紫鳳

ふるさとにストレス流す河があり

孫パワーあびて元氣を取り戻す

老いをまだ認めたくない赤を着る

ひまわりの花堂々と夏が好き

藤井寺市 若松雅枝

Ｌサイズ陽気な母でお人好し

試着室から満足顔でＬサイズ

百歳のとほけた返事受けている

元氣かと心と和ます子の便り

藤井寺市 伊藤アヤ子

身から出た錆とは言えど重い足

表情にほんのり嘘と書いてある

七夕が過ぎれば森は蝉しぐれ

短冊に家族のあした祈りつつ

藤井寺市 吉田喜代子

猛暑にも体重増えている不思議

世界は広い髪形で知るW杯

夏休みみんな帰って夏終る

忘れたと笑顔に祖母の生きる知恵

箕面市 寺井柳童

紫外線避ける真夏日黒い街

全身にUVカットどなたはん

惚れやすく厭きやすいのも無党派層

体内時計狂いがちです熱帯夜

八尾市 田中トシエ

肩書で五欲を満たす人も居る

ミン汁が出て行きパンが目覚ます

戦争の絵しか描かないキャンプの子

ああ平和星の輝く原爆忌

八尾市 中島春江

蛭狩園ありてこそ風情あり

うれしげに多忙を嘆く定年後

ここもまた女性天国ピヤガーデン

生涯のほほ見えて来て夕端居

大阪府 藤井郁代

人並みに育ってほしい孫二人

老夫婦ずばり言うのに仲が良い

かぶり付く西瓜の味に秋の音

夏野菜勢い奪う九月雨

大阪府 前田 忠子

いつの間にほんにお似合い老夫婦

遠花火今年も無事に音を聴く

古希近しもう止りたい走りたい

箸置きに女の夢は捨て切れず

大阪府 小栢 こずえ

一つずつ浄土への道つゆはらう

梅洗う乙女のような匂いして

花の苗立派に咲けと嫁に出す

日に一つ日課になった一行詩

神戸市 山口 光久

かばい合いよちよち歩く共白髪

生きるとは方程式がまだ解けぬ

逡巡をすればチャンスが逃げるかも

丹念に育てた苗の恩返し

尼崎市 山田 耕治

どこからか水かぶる音熱帯夜

終電車帰巢本能疲れはて

一日が終るよいしよと老夫婦

激動の昭和を生きてホーム行く

伊丹市 延寿庵 野 霏

モー娘歌って跳ねるペンライト

意地悪なことばが背を刺しに来る

まちの噂耳のうしろを通り抜け

意地張らず気楽に生きよ風が押す

川西市 井本 清山

孫くれば直ぐに両手で見る重さ

ブランドも末期は同じ粗大ゴミ

裸婦の絵を審査する目で見て通る

半世紀税金吸っているタバコ

兵庫県 徳平 毬子

君だけと聞いてみたいな初夏の風

山河越えあ・うんの中の夫婦曆

微笑みが内に秘めたる人情味

糠床に亡母生きている四季巡る

兵庫県 安達 厚

薬にも毒にもなった自負がある

どきどきと古希の胸うつ柳誌くる

その意見他で言うなと妻の知恵

風鈴の音色にストレス癒される

生駒市 飛 永 ぶりこ

大波を越えてはんなり友の笑み

螢火に似たよな恋のはかなさよ

句読点ないまま友の愚痴続く

プライドが高くてガード崩せない

和歌山市 松尾 和香

今日の鬱雨に流して明日に虹

滝水の清い流れに足浸す

山響き雨風激しふるさとに

紀の川にいのち養う恵みうけ

和歌山市 北村 光男

蛩にも一瞬ロマン闇に舞う
定年の駅降りてより夫婦坂

父さんと呼んでみたいよ盆が来て

真似で良い笑いが欲しい昨日今日

和歌山県 中村 君枝

自信もつその日へ爪を研いでおく

思案にも人それぞれ腹事情

拳骨と雷とばぬ老父の背な

農に生き風に妥協を強いられる

和歌山県 森 下 順子

しばらくはオキナワパワーに酔っている

わたしなりの楽しみがあり農作業

カルチャーの友が頼りになっっている

火種まだあつてカルチャーへ通う

和歌山県 村 中 悦男

話そうか迷う話を持ち続け

ろうそくの炎静かに読経聞く

いい天気慈雨を待つてる気も知らず

神経がズームアップの熱帯夜

鳥取市 永原 昌鼓

正直は青いと嘘つきが嗤う

アルバムのページで若い日が笑う

口だけはダウン知らない古稀の坂

夢を追う心に老いは寄りつかぬ

鳥取市 山口 千代子

八月は怨み悲しみ永遠に泣く
大家族休日もない洗濯機

幸せは五体満足動くこと

化粧して見てもやっぱり歳の顔

鳥取市 横田 春名

病む友に小さい嘘を見舞する

その時になれば弱腰逃げ回る

さざ波のような幸せ身を包む

ありがとう若者の笑みさわやかに

鳥取市 西尾 敬之介

苗植える手際の良さをほめられる

妖しげな光水辺に蛩舞う

梅雨空に燕一閃空をきる

どうしても意地通したいがむしやらに

倉吉市 森 川 あらた

仕事より遊びに力いられている

ミスしないために両目を開けている

森の中さまよい続け抜け出せず

嘘をつくたびにこころは汚れている

米子市 足立 由美子

伝書鳩うれしい便り持ってきた

思い出の頁ページに歌がある

歌声がうちのどこかにいつもある

煌いていたい若い日のように

米子市 猪森 スミエ

御先祖と逢う八月の扇風機
煌めいて手の届かない母の星
来る来ないやけに煌めくイヤリング
侍も家庭円満米を研ぐ

鳥取県 山岡 久枝

辛抱の両手に受ける汗の金
喝采はなくとも強い母の汗
控えめに暮して家族円満に
曲り角こえて女は強くなる

鳥取県 岡村 孝明

諦める口実にする時の運
トラブルを処理するたびに腕が冴え
次世代を思い杉山手入れする
飲み仲間怪我を看に賑やか

鳥取県 平木 公子

一寸先は光と思ひ生きてみる
枷だけど生きるバネにもなっていた
三世代トランプ避ける知恵もつき
朝一番嬉しい客がやって来た

鳥取県 山下 節子

そのままが一番いいと夫は言う
お小言は喉までにして丸く住む
唇を拭って嘘を消している
ファックスでレシビを送るお母さん

鳥取県 平尾 菜美

大物が座して多くを語れない
回り道して花みちが美しい
つらくてもため息受ける壺になる
真っ白い紙には少し遠慮する

鳥取県 竹信 照彦

這えば立つ目を逸らしたら消える孫
苦勞した妻の背中に灸据える
手作りの野菜ばかりでする朝餉
月見草可憐に咲いてはびこって

松江市 松浦 登志子

ミニトマト急いで赤くなりたがる
大鍋に恋ほうりこむ煮ころがす
コップからあふれる愛をイッキ飲み
騙し舟調子に乗っていた私

安来市 原 煩惱児

炎暑でも熱爛だよという頑固
輪になって一揆高山語り継ぐ
飲む話すぐにまとまる溝浚え
惨状を語り尽くせぬ原爆忌

鳥根県 武島 ちよえ

孫という金食う虫のいる励み
聞かされた亡母の口癖子に移し
怒られぬとぎれとぎれの言い訳に
脳味噌が軽くて足が地につかぬ

島根県 菅 田 かつ子

ゴールまであと一周の笛の音

亀は亀うさぎはうさぎのスケジュール

ハイポーズ若い気分Vサイン

痒いとこみんな知ってる悪友よ

島根県 持 田 多輝子

判断は父に任せる危機管理

古里の本場の味を娘に送る

想い出がうず巻く過去の古日記

からまれてリズムが狂う我が歩幅

倉敷市 撰 喜 子

主婦の座にあぐらをかいた割烹着

ポケットの秘密とびだす洗濯機

一人居にコンビニの灯生きている

来客の性格を見て猫が寄る

因島市 村 上 和 輝

業績は上げます社員削ります

てきばきの嫁におっとりした姑

包丁のさばきてきばき独り者

母求め瓦礫を掘った子も六十路

広島県 福 島 万 年

独り居の癖になりたるひとり言

風邪の子が爺婆の愛独り占め

虫食いの我が家の野菜喜ばれ

理想より仕事をくれる方につく

宇部市 高 山 清 子

めぐり来る辛く悲しい原爆忌

原爆のドーム見守る復興史

丸い背が納得をせぬ若作り

幸せは古い差し向かい熱いお茶

今治市 渡 邊 伊 津 志

生と死の接点それが藍の色

自惚れを確かめられた言葉尻

声かけて笑顔で話聞く看護

失恋を知らぬ椿の乱れ咲き

愛媛県 宮 本 末 子

種なしのスイカが苗となる不思議

ふんわりと石の水吸う苔の花

ひたむきに生きて文化に遠く住む

夏至の夢誰にも告げずあたためる

唐津市 岩 崎 實

虫の音を聞いて浄土の中におり

蟬の声聞いて温泉一番じゃ

用足しの順序くるわす不意の客

一期一会何と不思議なこの出会い

宜野湾市 杉 谷 一 栄

手の震え気持静めてボールペン

歳言うて他人に少し甘えてる

神様は在ると信じて憚らず

卒業のない趣味下手で続いている

東京都 井上 つよし

再生紙でも人生の絵は描ける
孫入れて川の字に寝る久し振り
横車押した轍の悔いの跡

堺市 河盛 龍三

お互いに利口じゃなくて夫婦仲
一つ釜食った仲間と飲み明かす
人前は苦しさ見せぬ女将さん

高知市 小川 てるみ

呆けてないから悲しいことを口にする
病窓の赤いカンナを眩しがり
六十を案じる老母の苦労性

青森県 福士 トキ

日に何度陰に日向に受ける恩
梅雨晴れて指呼のうちなる岩木山
我老いたり暑さ寒さも愚痴となる

宝塚市 飯西 ミサヲ

お急ぎの女手ぐしで髪をとく
チューリップ家より大きい園児の絵
何事もないよな顔で一大事

大阪市 小川 恵美代

血の流れサラサラ感の夏野菜
夏雲を活力源に食したし
まだ未熟腹に一匹虫が住む

八尾市 鷲見 章

窓外はダイヤモンドの灯がともる
ミドリしてふるさとの山信貴生駒
照る日くもる日我もベッドで老い重ね

藤井寺市 西村 栄一

酒場へ行くと先生社長ばかりです
雨上がりの虹に希望を叫んでる
悪口を聞く耳だけは達者です

和歌山市 橋爪 佐一

往生際わからないから面白い
あの世へも持って行けない金を追い
恋と言う特効薬で若返り

香川県 松村 輝夫

本番になると針穴通らない
控え目に立場認める夫婦仲
足腰を鍛えて目指す秋が来る

八尾市 與田 明

ひとりの灯ひとりの音に馴れて住み
枝豆とビールやっぱり夏の顔
欲しい雨降れば降ったで文句言う

鳥取市 河田 のり代

金いらず地図で楽しむ旅行好き
平穩に馴れて手を出し口も出る
しゃべるのも口の体操若返る

愛と寄せ別れも寄せて夏の波
夏最中遺書など遠い青い空
飾らない素焼きのような人が好き

秋田県 秋野 宏

横浜市 山本 為佐子

光らない石をだんだんもて余し
日本語もできないうちに英会話
身に合った素敵な服が高すぎる

横浜市 布山 嘉信

梅雨闇に明かりを灯す花ざくろ
雑草に生き方学びそれを抜く
飛車角で盤上埋める巨人軍

横浜市 豊田 羊子

我が寿命主治医にきいて知っていた
手作りのラーメンすすり話聞く
大陸の昔の歌を知っていた

川崎市 中村 泰竜

深窓にロングシユートが届かない
フェイントをかけて本音を誘い出す
窓際でもしやのバスを待っている

川崎市 浦野 昭志

よく動く孫からパワーもらってる
クラス会童心にする国訛り
朝顔の笑顔にひかれ立ち止まる

梅雨あける鬱もひさびさ汗をかく
観音に心を洗う涙涌く
新しい道に卯月の花探す

川崎市 塩澤 ひで

新潟県 高野 不二

留守番を酒があるからがまんする
父の歳越えても父は越えられぬ
欠席が肴にされるクラス会

草津市 久保 和友

若者と終日カラオケ五号室
軍艦の模型作っている老後
やせても枯れても七十歳の戦中派

和泉市 小坂 凡英

遠望の景落ちつかす古寺の屋根
来世では二物与えて欲しいです
これでもかこれでもかダイレクトメール

泉佐野市 大工 静子

九十の坂も未だまだ元気です
くつろぎは部屋の片隅机に向かう
仲人の大役身内持って来た

門真市 矢阪 英雄

鮎賞味冬のボタンにつなげてる
風力にさいなまれても山我慢
故里を捨てない積り老夫婦

岸和田市 坂口英雄

お年寄りみんなプールで歩いてる

胸躍るダンジリ祭りの笛太鼓

ただいまのランドセル先家上がる

岸和田市 亀井皎月

歎納めこれでわたしの農を斬る

失意の日優しく包む故里の風

同期会ひと癖持った顔が寄る

高槻市 安田忠子

遊ぶのに電話で予約今の子等

やっと来た友の笑顔に安堵する

遅咲きで幸せな日々日本晴れ

高槻市 執行稲子

寝もやらずわくわく流星待つことに

万葉の花の雫を待つポスト

ときばきと同年輩の七不思議

寝屋川市 岡本勲

体重計針も気持ちも揺れている

少し鈍根はそこそこ運がよい

丸々と太って膝が軋み出し

羽曳野市 山本たけし

孫と共に仕掛け花火に酔う夕べ

絵手紙に祖父母の顔と孫娘

どうやって開拓しよう未知の明日

羽曳野市 濱口フジ

六十の手習い楽し笑いの輪

富士山は私の名前の由来です

富士登山ガレキの中に白い花

東大阪市 笠井欣子

友の愚痴聞きつつ雑巾縫い上げる

連れ立って仕掛花火へ塗りの下駄

心ブラを久方振りに老夫婦

枚方市 小川良吉

七夕や支えきれない願いごと

笹飾り無理難題をぶらさげて

来し方に朝ドラセリフ胸を刺す

枚方市 荘司弘之

山登り生きてる証一歩ずつ

甲子園カチ割り売りの活きの良さ

晩鐘の心で今日も終りたい

八尾市 平川幸枝

ライバルの嘘つぼくなる褒め上手

ライバルが陽気な話提げてくる

さまよってやっぱりいつか来た道だ

大阪府 高木道子

山頂の御仏拝す遠眼鏡

生き過ぎた言う母だけど薬のむ

電線といっしょに揺れるオニヤンマ

大阪府 東 文江

夏の夜 孫は時計の針のよう

老いて子に従いながら自我も出し

娘は嫁ぎ親は子ばなれむつかしい

大阪府 桑田 ゆきの

覗きいるベットのカルテ横文字で

そろそろと身辺整理するつもり

ウィンドー覗き財布に相談す

大阪府 大屋敷 婦美子

句作りは泉湧き出る時を待つ

孫の筆生きる力と壁に貼り

ふと目ざめ窓いっぱい赤い月

大阪府 畑中 節子

涼風の聞こゆるほどに闇静か

夕暮れにコーラスしきり田の蛙

真の闇螢乱舞の夢世界

大阪府 野田 栄呼

電動で削って子等の手無器用に

しっかりと同居で家賃稼ぐ嫁

万歩計栗花匂う里の道

神戸市 木村 忠義

店員は夫婦で行くと寄ってくる

田を回る農夫ねぎらう青田風

安い分だけ多く飲む発泡酒

神戸市 田中 章子

心病み真摯に生きて逝った友

水はった棚田をすべるつばめたち

ハンドルを持つとわたくし変わります

尼崎市 桑原 東園

達筆で読めぬ碑文に止める足

花びらも流れに乗って舞うワルツ

台風が逸れて輝く街明り

三田市 石原 歳子

夕立に似た性格の男親

納得をさせて涙がぼとり落ち

下り坂猫背もピンと反りかえる

三田市 辻 開子

笹飾り年金保障願い込め

七夕に宝の孫の無事願い

親の日に娘から届いたラブレター

姫路市 服部 一典

森林浴へ山菜の匂も食べ

初鱈タキで食べるひとりもの

歳一つこだわる老いは若さゆえ

兵庫県 黒崎 美紗子

ひとり居へコーラス誘う思いやり

楽しさの記憶アルバム語り出す

ゆつくりとたしかめ歩む老いの知恵

兵庫県 岩本 美緒子

目薬をさす続けたい趣味の皿
アトリエに鍵はしなが吾が領土
寡婦六年明るい彩が溶け出した

生駒市 小西 稔

夕涼み昔なつかしき水
健康は笑う家庭に歩み寄る
白い歯が並ぶ笑顔の保育園

和歌山市 今 一步

水の流れ読めないうちは眠れない
ワールドサッカー世界の人と巡り逢い
ためらわず一人住まいを選ぶ母

和歌山市 前岡 健三郎

来月に古稀となる身を信じ兼ね
婆さんの商魂目立つ輪島朝
肉断ちの妻へ誓った孫娘

和歌山市 根田 美子

雨水に宝石もらう花しようぶ
車道で春の小川の顔隠す
還暦で趣味も一服息をつく

和歌山市 宮本 三喜夫

明快に判りやすく説明を
思いつき税金ばかり浪費する
困ります平和な街に波をたて

鳥取市 大呼 天涯

玄関にランドセルあり靴はない
宿題をしたがらぬ子だ俺の子だ
忘れものしたふる里の山に行く

鳥取市 岡田 信恵

何もかも許す涙だいらしい
老いの道淋しさ告げる暗い声
振り向かぬ決めた心が揺れている

鳥取市 近藤 秋星

国会で俺も居眠りして見たい
居眠りしても議員金になり
わが胸を通過した人指を折り

鳥取市 森 美智代

意地張ってもう進めない通せん坊
顔見えぬ人と螢を追いかける
化粧品うれしい朝を確かめる

鳥取市 谷岡 清子

あじさいの彩に娘の心見る
干しものが風にはためく気も晴れる
無愛想が犬を相手にお世辞言う

倉吉市 前田 喜美子

大豆畑鳩も人間も監視する
初なりの胡瓜畑で丸かじり
取り敢えずタンスに入れるあぶく銭

倉吉市 大下 智子

着メロを待つて携帯離せない

和紙の味我にやさしい障子の間

ラジオから流れる歌がなつかしい

米子市 池尾 保子

波風を立てないように老いていく

野仏にやさしい雨がふりそそぐ

葉草で体の中の大掃除

鳥取県 池澤 大鯨

砂時計三分間のリフレイン

メールではもうふるさとへ帰っている

卒業後学び直して父となる

鳥取県 河本 晴子

実権を秘めた夫を尻に敷く

サッカートのスピード感に元気づく

お祈りをしつつカメラを胃の中へ

鳥取県 西垣 美知子

ごみ収集ストレス捨ててる場所がない

風のような噂がいつも前に行く

学ぶことたくさんあるにもう米寿

鳥取県 鈴木 一弘

風向きが変った頃に窓を開け

風鈴を吊し縁先碁の指南

耳奥に消えぬ懺悔の風の音

鳥取県 岩崎 和子

赤じゅうたん言った言わぬで泥まみれ

今を生き未来の事は風まかせ

リボン替え麦わら帽子若返る

鳥取県 蔵本 悦子

紫陽花に雨がちよつぱり気を遣い

バラの花野暮なことばは禁止する

トラブルも生きるためには必要だ

鳥取県 細田 裕子

解散が怖い先生脛に傷

やめたとは言えぬ子育てど真ん中

心地良い空気と人がいる故郷

鳥取県 松川 行男

可愛くて頬をこすれば叱られる

日程がごろりと変る梅雨の旅

妻がいるやさしさそつと抱きしめて

松江市 山根 邦代

時々母の助言にはげまされ

瑞瑞しさなによりうれし茄子胡瓜

ふるさとの自然ゆつたり時もらう

出雲市 梶 ミツエ

夫亡くし心の底が冷えきって

海静か波と昼寝がして見たい

かるはずみ石につまずき老いをする

出雲市 加藤 スズコ

断りが下手で重荷を背負う羽目

とぶ帽子いたずら風が弄ぶ

満ち足りた暮し何時しか染まる老い

出雲市 川 島 和歌子

今日もまた倅せだったと書く日記

青葉陰帽子を脱いで一休み

新築のローンが重い父の肩

岡山市 清 水 金太郎

たなばたにお願い事が多すぎ

ちちの日は母の日ほどはさわがれず

なるようになれと覚悟は決めており

府中市 岩 本 雅代

ぐち聞いて相槌打つのもボランティア

柳友のマネキで和む湯の香り

焼き茄子も花柄皿で味がよい

香川県 伊 勢 八重子

海沿いに住んで夕日と仲が良い

手を借りて貸して余生を延ばしてる

病棟の長い廊下にドラマ見る

香川県 向 山 治 延

皆の意見聞いて我が家に波立てず

どうあると心の花は散らせない

子のために火中の栗を拾うかも

松山市 山之内 八重美

やわらかいよもぎ団子は母の味

遍路旅過去はベールに包み込む

大花火どーんの音で夏が来る

高知市 澤 村 哲 史

風へ吐くわたしは草になり切れぬ

ハローワーク網目ますます荒くなる

失敗の自覚へ懲りず二日酔い

高知県 貞 岡 佐紀子

明るさを避けて葉裏のかたつむり

今を生きる日一日の重きこと

蟬時雨 自然の中にそっと居る

唐津市 坂 本 兵八郎

塞翁が馬の身震いする平和

窓際で残るドラマの策を練る

妻と娘の電話聞きつつ飲み過ぎる

第72回 大阪川柳の会

日時—10月3日(水) 17時開場・18時締切
会場—サンケイビル本館322号室
題と選者

- △「ヒント」 番傘みどり川柳会 上野多恵子 選
- △「塗る」 大阪川柳人クラブ 竹森 雀舎 選
- △「強い」 川 柳 塔 社 奥田みつ子 選
- △「番号」 番傘川柳本社 磯野いさむ 選

各題2句・席題なし・会費千円

麻生路部物語

(9)

—同志の人々—

東野大八

「土団子」休刊のあとをうけて、大正八年六月「後の葉柳」を出した。「轍」「矢車」「雪」「土団子」と生命的な川柳の新しい運動に没頭していた私は、その頃日車君とともに、句だけを遺しておく意味から「後の葉柳」を出すことになり、それへ半文銭君も引すり込んでしまった形である。(山南樓メモ)

「後の葉柳」は、樹型四頁の小さなものを三部だけ出して止めた。理由は小島紺之助君が出した「楊柳」の応援を頼れたので「後の葉柳」を犠牲にして句や柳論を「楊柳」に発表したのであった。(山南樓メモ)

「楊柳」は「土団子」の誌名を変えただけの体裁で二十八頁建ての堂々たるものであった。創刊は大正八年二月、その第六号あたりから「後の葉柳」は同誌に吸収された形で、日車だけが同誌同人となり、路郎、半文銭は松窓を加えて社友となっている。なお顧問に浪花坊と柳珍堂の二人を迎えた。

「楊柳」の編集兼発行人の小島紺之助(本市松)は、大阪府泉北郡大津町に住む地主の息子で、浪花坊の「大正川柳」の系列を標榜して紺前楼、紺前懸などの筆名で埋め草も手がけているが、柳文は生硬で句も

—見わたす限り海の柱にもたれけり

—斗わずして勝つあげがたの雲

といつた傾向のものが多い。

この紺之助が「楊柳」誌上で、古川柳抹殺論の一大論陣を張っている。その中で久良伎を「宝暦六代の江戸ツ子を自負し、その陳腐の川柳」のくだらなさを正面切つてコキ下ろしている。日車もまた「先輩無用論」で久良伎川柳に大ナタを揮えば、路郎もまた「若き川柳家に与ふる言葉」を書き、暗に久良伎流に筆誅を加えている。時に彼、三十二歳—短文なので全文引用を試みよう。

「柳樽はお前の求むるもの影に過ぎないと思え。それがこんなにお前の心をひきつけ

ようと、いつまでも柳樽に頼つてはいけな。頼るときにお前の句には命がない。そして柳樽の句よりも小さいものにしかならぬ。常にお前自身の力で、お前自身の句で柳樽を覆ふてやれ。しかしながら柳樽を読むことを忘れてはいけない。眼で読むことは避けよ、心で読め、読んだら直ぐに捨ててしまえ」

こうした論陣に頭にきた久良伎の手紙も「楊柳」に載せられている。要旨早次の通り。

「兄等の態度の卑怯なのはナゼ俳句や短歌に向つて戦争をしかけないのか。川柳界に向つてグズグズいうわ短歌俳句のマワシ物にかみえぬ。死んだ六厘坊はソレ迄に卑怯な男ではありませんでした。私は川柳家とし江戸趣味を保存し宣伝するの合理的なのを知つて六厘坊と別れた。(中略)道を信する上は二つはありません。都市享楽の美に渴仰するワレラです。ケチなアリキタリの短歌や俳句でやつている思想(むしろそれ以下)をただ川柳に移して新しがる連中、ソシテ古川柳にケチをつける連中に反対する。川柳に江戸趣味を再現する。様式の新古は問うところに非ず、私等は古川柳に対し侮辱を加ふる奴等は進んで刺しちがえて死せんとする位の意気を持つている。少子は現に郵船株二百株を川柳に擲ち、献身的に川柳を宣伝する者故、ヘンなことを言つて川柳をソ害するものはドシドシやつつける。(日車題)」

浪花坊流の新川柳を遵奉するその門流にと

つて、古川柳一辺倒の江戸っ子川柳の久良伎流とはもともとその肌合いを大いに異にするわけで、紺之助も日車もその争点をふりかざし、相手を名指しで罵倒する。その様を横合界から冷静に凝視しながら、わが道を往く柳界の一異材がいた。俳人鬼史こと松村柳珍堂である。路郎と柳珍堂の風交は『葉柳』以来で、『雪』『土団子』の同人から、路郎が「後の葉柳」を出した頃に、路郎が持ちつづけける結社大阪川柳社同人でつき合ってた。路郎の同志の筆頭格でもある。

柳珍堂は明治十三年生れ、路郎の八歳年長で、死去したのは大正八年九月十四日享年四十であった。『楊柳』の終刊はその翌年二月で八号で終止符が打たれた。柳珍堂の死が原因だとされている。日車は『楊柳』六号で『柳珍堂の死』と題し次の様に書いている。

「柳珍堂はつぎのように遺言をした。」

一、句集を出さぬこと。二、追悼会を営まぬ事。三、追悼号を出さぬこと。家族に対しては、一、香奠を受けぬ事。二、葬式は血族のみにて行う事。三、短冊類は一切焼き棄てる事。法号は死ぬ三、四日前自分で「黙操鬼史居士」とつけ只管死期の至るを待っていた。葬式の際、坊主がこの法号は法にないといったが、この坊主こそ坊主ではない。黙操とは、四、五年前碧梧桐（河東）氏が柳珍堂に贈った『黙操洞』の洞名から出ている。葬儀に碧師の追悼文が寄せられた。

柳珍堂が俳句から川柳に手を染めたのは、明治三八年であるが、句は『葉柳』第一号から『番傘』『雪』『土団子』を経て『楊柳』で終る事になった。句風は古川柳を基礎とせる自然の順路から入り『雪』時代にやや変調をきたし、『土団子』時代において最もその個性を發揮し、『楊柳』においてその全人格を表現し、わが畏友は寂滅した。今日の大坂柳壇の人々は大なり小なり柳珍堂に刺激せられ、啓発せられた。これは言う迄もない。特に私はじめ当半、半文銭、路郎が故人に負うところが多かつたと思う。」

路郎も大要次のような悼文を書いている。

「柳珍堂の死は日本の新しい柳壇の為に致命傷であろうと思う。思想の非常に進んだ、しかも表現法の最も巧みな同氏を失った事は遺憾千万である。百人のやくざな川柳家を失つてもいい。千人失つてもいい、ある意味から言えば殆んど全部を失つてもいいから柳珍堂氏一人を生かしておきたかつた。この人がある時は友とし、ある時は師とも仰いでいた日車氏の落胆は想像に余りあるものがある。」

「されし日の昼の暗さを忘れかね

この旧作が出たとき私たちをどんなに唸らせ、嬉しからせ刺激したところであらうか」

日車はまた『酒少し飲めば淋しくなるものぞ』の題名で柳珍堂の死を書いている。

「忘れせぬ今年六月、雨のドシヤ降りの日、鯉魚と二人で彼を見舞った時、柳珍堂は

瘦せ衰えた身体を無理に腹這い、今日は鯉魚君がいることだから日車君の事について話しておきたい。僕ももう水くはないから、他日などとは言っておれない。二人ともよくきいておいて貰いたい。日車君は僕の知っている人間の中でいっちゃん素質を持った男だが、第一に己惚れ心が強い。第二に野心から免れる事ができない。第三は軽はずみでいけない、どうぞ僕が亡きあとにはこの点に気をつけて貰いたい。それだけいって疲れたから暫く失敬すると横向きになった。柳珍堂と鯉魚の別る日はこの日となった」

「楊柳」に連載された『柳珍堂句集』より

— 風呂場から胡瓜を揉んでおけという

— 執達吏蔵へ入って眼がきかず

— 十四の春剃刀が欲しかった

— 鮎は焼かれ水は鮎に似て残り

— 馬おのきて橋おのきて渡り

— 水引は掃き残されて膳が出る

— 脂手といふを姑が先に知り

— 酒する女は蘭の花を見し

— 茶をかける時にみだらな目を遣い

— 北の空より我に迫りては消え去り

(臨終)

日車は明治二十年生れで路郎より一つ年長である。路郎と六厘坊は同い歳だが、日車は六厘坊とともに大阪の市岡中学の第一期卒業生である。日車が一年落第したからである。日車の父は、この落第は川柳のせいにしてこ

の趣味を厳禁したため、その柳名七厘坊を日車と改めた。この七厘坊は、六厘坊より一ツ年上だからそうしたまでだという。

天才六厘坊と自称し、当百という出来のいい先輩すら手古ずつた六厘坊に対し、日車も似たような才子肌の男、二度も絶交を宣言しあい、そのたびに路郎と齋藤松窓が仲裁役を引き受けている。日車も六厘坊ともに商家に生れ、中卒後は、往時の仕事者である厚司姿で、川柳に血道をあげ『葉柳』誌上ではとにもその筆鋒を競い合ったものである。

筆者は本稿を纏めるに当って、必要資料を数多く眼を通す立場におかれたわけだが、次々とその資料を手にするたびに、眼をみはる思いにさせられたのは、川上日車という人物の多彩かつ迫力に溢れたその作句論と柳論の凄じさであった。自らを天才に凝して六厘坊すら影をひそめ、路郎とても茫乎としてその画中には無いのである。「竜眼よく鳳眼に点ず」で、柳珍堂としてその死の床で、若き日車への戒告に馳られたのであろう。

日車は昭和34年11月9日に死去したが、それに先だつ三年前に『川上日車句集』という小冊子を出している。大正三年から昭和三十年までの作句の中からわずか一三句を抜き出した唯一の遺品である。その自序に言う。

「人生の果てにたどりついた私は、これでも何にもすることはない。ただ峻烈な世上の批判は、やがて一句も遺さず削り去つてくれる

であらう」

この自らへの峻厳さに、筆者は死の床の柳珍堂の遺言や、彼への遺訓の陰をみる訳だ。

— 思わじと椿の花を日に焙べて 日車

— 土ほれば土 土ほれば土と水

— 賽銭も手にあるうちは只の金

この日車に見合う、若き日の路郎の同志がいま一人いる。木村半文銭である。

「萩の茶屋のころ、つい眼と鼻の先に半文銭君がいてくれた。毎日のようにお互いが往来し合つて、暇さえあればわれわれの主張について語り合つたものだ」(山雨楼メモ)

木村半文銭(本名三郎)は、路郎より二ツ年下で六厘坊に兄事して柳三厘坊。萩の茶屋のころは砂糖の仲買人をやつていた。

「木村半文銭氏は貧乏と川柳を一緒にしている。惜しい男である」(土団子喫煙室)

『葉柳』のころは、清新の気溢れる古川柳調であつたが、「土団子」から詩川柳の傾向を強め、『後の葉柳』では生活苦が句の前面に押し出され、その廃刊とともにプロレタリア川柳とも称すべき悲惨な人生に没入する。

「大正十二年度のいわゆる川柳革新運動に参加して以来、窮迫せる生活のドン底に沈みつつ、精神的にも物質的にも幾多の難関に直面し、あるいは家主より家を追われ、金貸より封印をうけ、妻とは別れ、住み馴れた土地を去り、三人の幼な子をつれて幾度路頭に迷うたかしのだ。この間、なお屈せず所

期の目的を貫徹するため、同志の陣営に拠つて文字通り悪戦苦闘を続けてきた」(木村半文銭句集「昭和8年刊・自序」)

— 九尺二間の家の砂漠に秋の風

— 机—お前も明るい家に行きたいか

— 杖から死は二寸さきにある

— 生活のインクも残り少けれ

— 死の梯子をかけおる—ひとりと

第一次大戦後の一大経済恐慌にさらされ、無産階級運動の吹きあれる中に、米騒動や、関東大震災、アナキストの虐殺、プロレタリア革命運動をめぐる弾圧、暴動の流血や、護憲運動をめぐる政局の混乱、農村では凶作飢饉、売られ行く娘達、奸商汚官の横行—そうした大正デモクラシーの暗い面皮の裏側で、谷底で、川柳、—というかほそい灯を掲げて必死で暮しの怒濤と斗いぬく人たち。

正常な世間の眼からすれば、正しくそれは風狂の狂の字が、やけにきわだち妖奇とも感得しているのかもしれない。だが、ひたすらに、川柳人は歩む、歩む。日車と半文銭はこうして、路郎の視野から遠ざかり、ついにかつての日の路郎の傍らに還ることはなかったのである。この二人によつて新興川柳誌の旗手の「小惑」は生れた。時に大正12年2月、同誌に現われた二人の作品傾向は次のとおり。

— 元日—暮る

— 錫 鉛 銀 半文銭
日車

愛染帖

波多野五楽庵選

海南市 三宅 保州

道具箱に入れてあるのは魂だ

おくびにも出せぬ悩みを飼い馴らす

振りすぎてちぎれたのだからか尻尾

和歌山市 木本 朱夏

蝶の昼 携帯電話とハーブティ

雨の日は雨の音聴く調律師

文月の髪もつれては人想う

和歌山市 川上 大輪

海を見た日から蛙は歌わない

あやふやな記憶を辿る足の裏

脳みそにイースト菌を混ぜようか

松原市 小池しげお

最高の日を壊すためにしておこう

その先が祝儀袋に入れている

大正琴 ああ大正は遠くなり

富田林市 池 森子

夏の風金魚のフリルから食べる

蝶は内気で真つ赤な薔薇を遠ざける

雪ばかりが離合集散して流れ

愛媛県 中居 善信

桶の輪が少し緩んだ倦怠期

俺が死んでも松井須磨子はもういない

豊中市 田中 正坊

所在なさそうにポツンと忘れ傘

妬くほどの器量ではない女といる

和歌山市 福井 桂香

心太つるんと雨はまだ止まぬ

ジッパーを開けるとそこは夏の海

京都市 都倉 求芽

有頂天になった時から空がない

心の傷わたしひとりで手術した

八尾市 高杉 千歩

止り木にすぎぬこの世で戦など

駅へ急ぐ歩いているのは私だけ

羽曳野市 吉川 寿美

幸せに気づいていないバンの耳

残照へ悟り切れずにいる十指

鳥取県 さえきやえ

砂を手によればさきこえる亡父の唄

最後のベル 涙のおちる音がする

米子市 青戸 田鶴

安住の宿に翳りが見えてきた

蓋とれば私のマグマふき上げる

弘前市 斎藤 劬

紫陽花の藍に道草してしまふ

サクランボの種を飛ばしている無策

弘前市 高瀬 霜石

もうちよつと歩いていたい雨上がり

人間国宝こどものまんま歳をとる

大阪府 前 たもつ

敵がなくなりご飯ゆつくり食べている

松原市 玉置 重人

唾つけにゆけばホホホと逃げられる

弘前市 高橋 岳水

旅終る日まで離さぬ石一つ

弘前市 蒔苗 果林

眠らせぬ闇から御伽嘶聴こう

松江市 三島 淞丘

運使い果てて終着駅に着く

和歌山市 武本 碧

許される範囲に切り取り線を置く

香川県 川崎ひかり

握力をぬれ雑巾に試される

堺市 和田つづや

運悪く神の裸を見てしまい

鳥取県 岩崎みさ江

みぞおちに昇華しきれぬ水たまり

和歌山市 楠見 章子

ゆつくりと歩いてここは風景画

米子市 鷺見 正子

還暦の私の顔を今日も彫る

八尾市 井尻 民

胸に抱く炎仏心にはなれず

交野市 田岡 九好

逝クモノハカクノ如シと歯を抜かれ

鳥取県 西沖 彰雄

ゆつくりと暮らそう明日は過去になる

東京都 やまぐち珠美

まるで今あなたに会ったように虹

藤井寺市 高田美代子

しばらくはどちら向いても夏の彩

藤井寺市 太田扶美代

お昼までボクが使っていたジューク

箕面市 出口セツ子

愛見えるまで手のひらを陽に透かす

西宮市 西口いわゑ

真っ白な紙から夢が盛りあがる

綾部市 藤田 芳郎

二つ目の乳房は夜叉に化身する

岡山市 矢内寿恵子

年々歳々老母は小さな風になる

香川県 木村あきら

方円に従う水が手に負えぬ

和歌山市 吉村さち子

包まれたように包んで返す恩

和歌山市 西山 幸

傷口へ海を満たしてみたくなる

鳥取県 田村 邦昭

弱者には折ることしか許されず

愛知県 早川 盛夫

さて何処へ空を掴んだ豆の蔓

東京都 播本 充子

クラシックだから上とは限らない

倉敷市 小野 克枝

鬼の面ゆつくり脱いで旅の空

尼崎市 春城武庫坊

平坦な道を歩くときくたびれる

尼崎市 春城 年代

ゆつくりと歩こ幸せ逃げぬよう

茨木市 藤井 正雄

明日逢える動悸が夜を長くする

黒石市 相馬 一花

ご亭主をリサイクルする腹積り

京都府 丹後屋 肇

好きですとアイスクリームからメール

堺市 志田 千代

西瓜にもプライドかぶりついてやる

大和高田市 鍛原 千里

のびるだけ伸ばしてみよう入命綱

愛媛県 花岡 順子

胸に住む鬼が私をもてあそぶ

姫路市 古川 奮水

二人三脚コントが続き真珠婚

今治市 塩路よしみ

隙だらけの夫の寝顔を見る安堵

大阪市 三浦千津子

定年やひとつ終止符いとおしむ

愛媛県 黒田 茂代

歳の数ほどいろんなものが見えてきた

北川ヤギエ

阿波踊り見るも踊るもヒト科ひと

箕面市 北川ヤギエ

重ね塗りしても消せない傷のあと

川崎市 和泉あかり

コンバクトへ和願愛語の呪文かけ

倉敷市 井上 富子

ポケットの隅に溜まっている不義理

今治市 渡邊伊津志

幸せを見付けるように綜解く

今治市 月原 宵明

この村の噂集める話好き

吹田市 岩屋 美明

青春のかけらへッセが書架の隅

和歌山市 古久保和子

炎天へふわふわ凡人の帽子

西宮市 門谷たず子

砂時計にボクの命を計られる

東京都 後藤 早智

桐喝という傲慢な平手打ち

松江市 川本 晔

哀しいことばかりは無いさなあ夜空

三田市 北野 哲男

雨に負け風にも負けて越えた喜寿

鳥取県 上田 俊路

失いしものみなふるさとは許すだろ

大阪市 神夏磯典子

知らぬ間に息子が同じ丸を書く

鳥取市 武田 帆雀

足枷がガチャツと嵌まる偽証罪

寝屋川市 森 茜

水たまりぼつぼつなんてことないさ

富田林市 大橋 鐘造

ゆつくりと炎を消していく暦

弘前市 福士 慕情

親の背を見せる子供が見当らぬ

弘前市 中山 雅城

ねぶた絵師 一年中が三国志

米子市 林 瑞枝

向日葵と余生明るく語らんか

人間の匂いがほしい淋しがり
澤田 和重

情報を鵜呑み痛みに触れていた
鳥取県 石谷美恵子

方言に戻る墓参の立話
八尾市 長谷川春蘭

吐く息はみんな炭酸ガスになり
鳥取県 土橋 螢

災いの口にチャックをして出掛け
鳥取県 橋本多哥田

植山へ行く気ひれ伏したりはせず
宇部市 平田 実男

私の本音鏡は知りつくし
高槻市 乙倉 武史

何もない日の卵焼き厚くする
西宮市 牧淵富喜子

酔態のうらのわびしさ悟られる
池田市 栗田 久子

浅き夢見し酔いもせず高齢化
出雲市 園山多賀子

アメリカット考えてたら買えませぬ
八尾市 村上ミツ子

国なまり遠い故郷をつれてくる
和泉市 横山 捷也

温暖化の地球が変える花暦
札幌市 三浦 強一

ではさらばさらばと落ちる夏椿
枚方市 海老池 洋

一日の終り自分に手紙書く
鳥取市 岸本 孝子

原点に還り始めたアマリリス
弘前市 宮崎ヒサ子

愛憎の過去に怯えておれませぬ
弘前市 岡本 花匠

抱き合えた形で舞っていく落葉
横浜市 近藤 道子

そつと来て梯子はずして去つた人
大阪市 浦田 綾子

小説にならない日々が今日も暮れ
横浜市 金森 徳三

愚痴吐かぬ妻がだんだん遅しい
鳥取県 土橋 睦子

プライドも上着も脱いでうちが良い
吹田市 山本希久子

議員逮捕拍手を送るわけじゃない
唐津市 仁部 四郎

土用鰻が元氣出しなと叫んでる
唐津市 田口 虹汀

おでんぐつぐつドルもユーロも知らぬ鍋
唐津市 久保 正剣

点滴の無聊に耳の浪速節
大阪市 川原 章久

色褪せていてもたて糸よこの糸
高知県 桑名 孝雄

床の間に座ることは別にある
鳥取県 土橋はるお

低い鼻なんと可愛い宮詣り
西宮市 緒方美津子

包装の中で澄ましている粗音品
藤沢市 妹尾 安子

病む妻のわがまま胸に畳む日日
因島市 村上 和輝

フットワークの軽さライバル寄せつけず
堺市 矢倉 五月

手まねきをしても帰つてこない過去
寝屋川市 籠島 恵子

街道を岐れて細い道が好き
鳥取市 徳田ひろこ

セールスにご尤もごもつとも騙された
熊本県 高野 宵草

忘れ物不用の頃に顔を出し
和歌山県 村中 悦男

リストラにあつたおつむを叩き売る
奈良市 米田 恭昌

損得を嗅ぎわけ雑魚は寄つてくる
岡山市 井上柳五郎

つい本音しゃべつてしまふ聞き上手
神戸市 田中 章子

辻ごとに指示待つ癖がまだ抜けず
唐津市 市丸 晴翠

教科書の重さ減らして五日制
唐津市 樋口 輝夫

単純で尽くしてくれる怖い妻
唐津市 井上 勝規

腹時計鳴つても会議まだ続き
川崎市 小林久美子

辻褄の一言ばれて闇の中
大阪市 鈴木トヨ子

腹時計だけは時差など無関係
横浜市 長島亜希子

誹風柳多留二四篇研究 45

伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・橋本秀信
粕谷長生・山田昭夫

清 博美・佐藤 要人

336 天蓋のよふなを和尚ねだられる

伊吹 「天蓋」は仏像などの上にかざすきぬがさで、江戸時代では、若い娘が死んだときに、振袖などでこれを作って寺に納めた。梵妻や囲いなどから、若い娘の振袖のような派手な着物をねだられる和尚なのである。

大黒にねだられ恵比寿屋へ和尚 一五八10
清 贊。女の命は着物。しかし強請られる和尚は辛い。
佐藤 贊。

337 馬士の新米どぶへたれて居る

伊吹 「越前たそふてアノ馬士溝へたれ」

(一五〇二) 江戸の排水路には、表通りに面

した家屋の前の「雨落の下水」と、その家の「裏の下水」や「裏店のどぶ」などがあった。新米であったり、男の一物に欠陥のある馬方は、恥かしいので「裏店のどぶ」へ小便を垂れるというのであろう。そうでないベテランの馬方は、表通りの「雨落の下水」や往来で堂々(?)とやったのだらう。すなわち「裏店のどぶ」で小便をしているだけで、その馬方は新米であると見破られる。

馬士のしんまい小便ヲとふへたれ 五五22
どぶへたれたで馬かたはやすくみへ

清 贊。公衆トイレのない時代のお話である。馬士ならずとも不便であったらう。
佐藤 贊。

338 行燈へ針八よしやれと和尚いゝ

伊吹 裁縫を中断する時、針を畳に刺したりすれば危ないから、行燈の紙に刺して置くのが当時の女性の習慣である。

ところが梵妻が針仕事の途中にこれをする、行灯に針穴が残り、寺に女が居ることが知れて具合が悪いので、和尚はやめてくれとたむ。

針穴のある行燈でくらしい寺 八七31

かならずくりへ出やるなと和尚いゝ、

一七39

清 贊。どら和尚の気遣いも大変なもの。
佐藤 贊。

339 市二日突出しの出るやうじ見せ

伊吹 「市二日」は浅草歳の市の十二月一七、一八日。「突出し」は禿からでなく、素人女のいきなり女郎となった者。また、初めて女郎として客を取る者。「楊枝見世」は浅草寺境内で、客寄せに美人を置いて営業した、楊枝や五倍子を売る店。

歳の市の二日間は、楊枝見世にとつても書入れ時である。そこで臨時雇の娘を見世番にしたというだけの句だが、歳の市には近くの

吉原も書入れ時であり、「突出し」という遊里語を使ったのが句の狙い。

すり子木てなぶつて通るやうじ見せ 四4

清 賛。今でいうアルバイトの娘。「突出し」と洒落たところがミソ。

佐藤 賛。

340 息子の手届く所に金ハなし

伊吹 ドラ息子の句。家の金は手当り次第持ち出して、遊里で費やす息子、家の者としては、たまったものではないから、息子の手や目の届かないところへ金を置こうとするのである。ところが敵もさる者、

かくしても金の有ルことをむす子しり

明八仁5

なのである。

清 賛。金をめぐって親と子の攻防。この攻防が高じると、やがて座敷牢、はては勘当となる。

佐藤 賛。

341 神道としゆ道の米ハ雪とすみ

伊吹 「神道」は神道者で、神道を食とも言われ、神主の服装をして、おはらいをして回

つて米銭を乞う者。「儒道」は儒者で、孔門十哲中の子路。二十四孝の一人でもあり、「親の為に米を百里の外に負へり」と「孔子家語」や「蒙求」にある。

「雪とすみ」は二つの物事の相違がはなはだしいことのたとえ。神道と食が他人の家の門口で乞う米と、子路が親のために百里の道を負う米とでは、同じ米でありながら甚だしく違っているというのが句意。

神道者身にばろ／＼の不浄を着 六二二〇

米背負の男一粒攘りの儒者 二二二九

清・佐藤 賛。

342 大黒屋市兵衛ゆだんせぬおとし

伊吹 「大黒屋市兵衛」は歳の市に大黒などを売る人の擬人名。歳の市に見世で売る大黒天の像を盗んで持ち帰れば福を授かるという俗信による句。何時なるとき、大黒像を盗まれるかわからないので、片時の油断もできない。

どろば／＼と大黒屋おつかける 傍四三二
女だてらに大黒をお市取り 傍三三〇

橋本 賛。なれど、市兵衛＝浅草歳の市の客の擬人名（「川柳大辞典」）とあり、「市様」「市さん」も同じ。例句はその女擬人名。

はぐれたらゑの木の下と市兵衛 二〇三4
の句もある。

故にこれは大黒屋、市兵衛と二人ではあるまいか。大黒屋は市兵衛（市の客）に油断しない（常に警戒している）男（でない）と務まらない」という意味では……。

粕谷 橋本説に賛。初めは礎稿のように考えていました。

清 一人の人物の氏名と考えていいのではないか。即ち、歳の市で大黒を商う商人の意。二人の名とすると、しかるべき助詞が入らねばならぬ。

佐藤 礎稿賛。

343 囲れの母ねんころにゑかうざれ

伊吹 囲れの母は、僧侶にとっては、養母のようなものであり、亡くなれば、勿論僧侶の仕事柄、丁重に読経などが行なわれ、冥福も祈られることであろう。正式な妻として囲れを迎えることが出来ないやましさ、よけいにそういった親切な行為に出るのかもしれない。

清 賛。これも人情というのであろう。囲れの母親の成仏間違いなし。
佐藤 賛。

首巻のむ

政岡日枝子選

いち日を臥しいち日の音を聞く
 五分前が脳の隙間に入り込み
 十葉の白にとけ込むひそかな日
 不協和音きつとあるはず五色豆
 生き抜いた火の輪くぐりの日を飾る
 人ひとり許せぬ日なり遠花火
 友達を数えて森へ来てしまふ
 誰からも学んで余生うるおわす
 神様にねだる三日間の晴れ間
 目いっぱい抱き寄せて見る愛の距離
 プライドを捨てて一人でこえる壁
 いきちがい修正液が出てこない
 ご近所をただ歩くだけそれも旅
 私が世話したように花が咲く
 年齢をかくさずちよつと優越感
 違和感で黒い日傘とすれ違ふ
 第五章はは読めてきた私小説
 鬱蒼と裏の空さま家は揉めている
 生きてひとりの旗振りかざす両の手よ

堺市 矢倉 五月
 東大阪市 田中美弥子
 米子市 白根 ふみ
 尼崎市 長浜 澄子
 富田林市 池 森子
 藤井寺市 高田美代子
 吹田市 山本希久子
 米子市 野坂 なみ
 藤井寺市 太田扶美代
 和歌山市 松原 寿子
 大阪市 三浦千津子
 生駒市 飛水ふりこ
 八尾市 村上ミツ子
 和歌山県 森下 順子
 倉吉市 山中 康子
 東京都 後藤 早智
 西宮市 門谷たす子
 尼崎市 春城 年代
 和歌山市 西山 幸

友が来る話ざわさわ雨になる
 ウィンドーシヨツピング心にひびくものがない
 音が音呼んではじまる母の朝
 ひじき煮る遠い匂いの中にいる
 右と左がアンバランスな知恵袋
 上品なひとの隣で目立つてる
 長寿法 聞くだけにして好きに生き
 生きたいね 今に宇宙へ電話する
 子の友に大臣がいる高い鼻
 女偏忘れてからの耳鳴りや
 マンネリに流され明日の絵が画けず
 花石榴わずかな風に脆い首
 バラの棘胸に刺さつて自閉症
 逆撫でる刺が残り火かき立てる
 どつぷりと浸っているのは飯の宿
 感動が薄れぬようにする化粧
 真心に触れて仮面がはずれそう
 のびのびの返事葛蒲も百合も散り
 汗をかき少し自信らしきもの
 紫を辿れば老母の鮫小紋
 とてもやさしく歌ったはずの子守唄
 窓際に座つて本を読んでいる
 軸足がぶれて崩れる自己主張
 客まちのタクシーざらりでも歩く
 友の闇一緒に学ぶ介護法

弘前市 宮崎ヒサ子
 八尾市 高杉 千歩
 岡山県 矢内寿恵子
 羽曳野市 徳山みつこ
 倉敷市 井上 富子
 西宮市 西口いわゑ
 倉敷市 撰 喜子
 河内長野市 植村 喜代
 和歌山市 福本 英子
 川崎市 和泉あかり
 富田林市 片岡智恵子
 鳥取県 土橋 睦子
 米子市 鷺見 正子
 横浜市 保田 絹子
 大阪市 神夏磯典子
 箕面市 出口セツ子
 三田市 久保田千代
 寝屋川市 太田とし子
 西宮市 牧淵富喜子
 香川県 川崎ひかり
 和歌山市 山根めぐみ
 鳥取県 西原 艶子
 富田林市 中井 アキ
 米子市 青戸 田鶴
 東京都 播本 充子

他人から見れば変人かも知れぬ
からからの心を癒す備炭炭

あじさいの妖気に迷う雨上がり

美しい嘘が勝手に翔びまわる

我が友の長所みつけてにんまりと

もう少し騙されようかハイチーズ

しゃべらない菜っ葉国籍わからない

コーヒーの底に歪んでいる心

善人と言われそれから肩がこる

マニキュアが剥けてこぼれた嘘一つ

特注の凝った傘にも同じ雨

むし暑く蛇人前に出てしまふ

水たまりロダンの顔がわらいだす

風読みが下手で顔ぶれなど知らず

背を流すように逆縁の子の墓洗う

水たまり亡母かも知れぬそつと避け

釣り上げた鯛に裁きを言い渡す

ケイタイは少女の秘密の玉手箱

海鳴りに浜の真砂も身構える

少しやさしくなれた手術記念日

細波を立たす私の水鏡

要するに時間わかればいい時計

真夏日の独楽へ油を注いでおく

ワープロの鞭に目葉離せない
梅雨寒にゆさりゆさりと栗の花

横浜市 近藤 道子

寝屋川市 平松かすみ

和歌山市 古久保和子

大阪市 板東 倫子

米子市 澤田 千春

松江市 川本 晔

和歌山市 土屋起世子

倉敷市 小野 克枝

今治市 塩路よしみ

羽曳野市 吉川 寿美

寝屋川市 堀江 光子

藤井寺市 鴨谷瑞美子

和歌山市 楠見 章子

大阪市 渡部さと美

八尾市 中島 春江

鳥取市 福田 登美

和歌山市 福井 桂香

熊本市 永田 俊子

米子市 木村富美子

鳥取市 徳田ひろこ

倉吉市 米田 幸子

和歌山市 田中 みね

鳥取県 さえきやえ
和歌山市 桜井 千秀
弘前市 一戸 ツネ

採めごとが嫌いで今日も貝になる

冗談が言える人ならついていく

方向音痴のわたし頑固に一人旅

おにぎりに握った人の顔がある

ゴミ袋ちらりと見せる暮らしむき

こつこつと母がまたか花が咲き

美術館ころおしゃれにして帰る

何も彼も捨てると軽うなるのだが

親切で言うて波紋を呼んでいる

エピソードきつねうどんに一つある

漬ける前に嫁入り決まる梅

転職でつけた力で独り立ち

日程がクリヤー出来ぬ秋の暮れ

振花は振れていても美しい

泣き砂を踏んで忘れた恋もある

椅子取りに勝って仲間に入れない

大和高田市 鍛原 千里

米子市 池尾 保子

米子市 林 瑞枝

横浜市 長島亜希子

八尾市 生嶋ますみ

堺市 西村りつえ

芦屋市 黒田 能子

岡山県 山本 玉恵

香芝市 大内 朝子

鳥取県 石谷美恵子

大阪市 津守 柳伸

川崎市 小林久美子

倉吉市 野口 節子

三田市 石原 慶子

鳥取市 岸本 孝子

倉吉市 淡路ゆり子

五月さんの句―一日を送るのどれほどの音に接することか。臥して
いればこそ聞こえる内なる心の声、一本一草の声、そして花の開く時の
微かな音まで聞こえた事でしょう。何もかも消化し切った翌日の軽ろや
かさが目に浮かぶ。美弥子さんの句―三秒前の稲光りという言葉はよく
耳にするが、五分前からはちきれんばかりの感性和との真剣勝負。自分
に負けないためにもというわくわくするものが伝わって来る。ふみさん
の句―樹木の下草としてのどくだみは庭の隅などで白い花を咲かせ、決
して表舞台には出て来れぬ運命をもっている。何かひそやかに夜でも人
目を引く十字花弁の白との密約は他人には判らない。澄子さんの句―大
好きな五色豆を食べる時いつもそう思っている。それぞれの豆は、対等
ではあるが、同質ではないぞと互いに思っているであろうと。社会全般
に当てはまる事であるが、個々の不満や個人を追いつめていく時代では
ないので、目配り、気配りでいきましようと思えらる句である。

小 説

井伊 東吉選



小説の最後の頁にある余韻
織田作の口縄坂に影もなし
清貧の妻が支えたベストセラー
初恋の人が占めてる私小説
夏の夜は八雲の世界入り込む
新聞の小説明日を待ちきれず
小説のペンは貧乏知り尽くす
小説家めざす貴方の誤字脱字
小説の好きな家内の鼻メガネ
信濃路へ短篇読破の気まま旅
付けられたヒロインの名が娘に重い
小説のモデル噂の中で住む
聖子さんでんでん太鼓が縁となる
ヒロインに重ねた恋もセピア色
やんごとなき武部の恋の糸車
小説も頬杖をつく斜陽館
小説のヒロイン死なせない投書
小説はブックカバーで隠してる
私小説ひらがなで書く亡母の章
ベストセラー筋書だけは知っている
老母の生き様小説に負けてない
和洋中あり小説も具沢山

活 恵
しげお
隆 盛
像 山
ひかる
邦 昭
一 知
み ね
雅 城
柳 弘
泰 竜
あずま
九 好
絹 子
三代子
順 風
正 雄
千 代
洋
ちかし

小説より漫画に熱中する少女
パソコンの中で筆執る小説家
ヒロインと愛しい人がダブってる
豆本が最初で真田十勇士
小説家遺品にポールペンはない
読み終えてまた現実へ夕支度
書きよんで火種にもなる私小説
私小説ハッピーエンドで終りたい
小説に作家の芯がある魅力
小説の一行ほどは僕だつて
漱石の猫へ諭吉が居候
小説の恋にはまってゆく世界
影武者が書いたら困る私小説
小説の世界に生きている敬語
小説のモデル小さく訃報欄

佳
診察を待つ間も楽し文庫本
プロログ母が見送るくのに駅
人情にふれてみたくて周五郎
脚色をされて武威も苦笑する
鬼平と一緒に歩く江戸の街
人
ロボットも小説読む日くるだろう
清張が老いの頭を揉みほぐす
天
軸
物書きの夢は捨てない指の胼胝
分身に語らせ踊る恋の夢

俣 子
珠 美
虹 修
勝 巳
あずき
岳 水
典 子
半 覚
孝 雄
惠 勇
朝 子
正 子
保 州
たもつ
章 久
次 根
寿 美
妻 子
霜 石
雄 々
勝 規
福士慕情

ライン

山根めぐみ選



正論をラインの外でふりまわす
目に見えぬ線を引いてる嫁姑
母のラインに届きかねてる匙加減
アウトラインだけで中身の無い話
水着ううエンストライン欲しい妻
ラインダンス千金の足はね返す
嫁がせて心にラインそつと引く
子の歩むライン勝手に親が引き
宇宙から見るとラインのない地球
大国のエゴが勝手にライン決め
三段腹ライン気にせぬ妻がいる
飛び越えたライン重たくのしかかる
踏み込めぬふたりの仲にあるライン
アイライン引いて寄りつく虫を待つ
ラインからはみ出している元気な子
大切な夫唱婦隨と言うライン
管制官の引いたラインにミスがある
ライン引く皆平等になるように
アイライン引いて戦に出る女
波しぶくライン下りの竿さばき
生真面目でラインの向こうまだ知らぬ
青春のタンスに眠るAライン

兵八郎
弘 子
シマ子
女 也
清 山
さち子
活 恵
彰 雄
ひかる
松 煙
和 重
ヒサ子
朝 子
輝 夫
雅 城
寿 恵子
順 子
次 根
倫 子
愛 論
典 子
早 智

謎めいたラインが残る日記帳

子育てへ軸線しかと引いておく

オンラインも政治も先に立つ不信

すれすれのラインで神が手を放す

ラインからはみ出してゐる意地っぱり

横一線みなライバルとなるスーツ

腕を組みキリトリ線の風見鶏

リストラの切り取り線が追ってくる

一線を引くには思慕が深すぎる

晩酌にライン守れぬ父の酒

授乳するポニーラインは気にしない

合格に裏のルートがあるらしい

どん底にまだどん底のあるライン

此処からのライン女は崩れない

線番のミスだと騒ぐフリーガン

一線を画して揺れる自立心

瀬戸際のラインを歩く生活費

ラインダンス青春を蹴る長い脚

千里

あずき

セツ子

鐘造

邦昭

しげお

勝視

強一

みね

五月

正子

可住

天涯

洛醉

鉄治

絹子

次男

この頃

小澤 幸泉選



古釘でこの頃茄子の彩が冴え

新聞はスポーツ欄に乗つとられ

この頃は家金あつてホームレス

この頃の子が液皿の中で跳ね

飽食の街で旬の字死語になる

輪を抜けて輪の中字と見えてくる

この頃は先ず孫に聞き嫁が決め

この頃の若いもんはが見直され

この頃は母の非行を見が脱む

この頃は犬も主人をなめている

バツイチが魅力ともなる世の流れ

この頃の女性怯まぬ大ジョッキ

この頃は税に立てたいムシ口旗

この頃も続く昭和史血の匂い

君付けがこの頃さんになって恋

この頃の群れて会話のないメール

最近はメル友できたらしい母

歳かいな五体丸ごとよう痛む

この頃は妻が握っている余生

この頃になると病気になる地蔵

この頃になると子のこと原爆忌

この頃は夫に合わず言葉尻

この頃は糸が切れない糸切り歯

保護色の中でこの頃生きている

万歩計この頃い汗かいている

肩書が取れない汗かいている

右耳がこの頃噂よく拾う

雑踏を若者ぶつてすり抜ける

捨てかねる命この頃ついてこぬ

この頃は妻がメールで茶を知らせ

この頃は案山子も覗く求職誌

正雄

次根

保州

みね

しげお

とし子

哲男

たず子

伊津志

敏子

兵八郎

智加恵

絹子

一粹

ヤギエ

正剣

圭二

初歩教室

題 — ペット

はんだ きん いち
吐田 公 一

私達は作句に際し、句の中に差別用語や差別観が含まれているかどうかを作者自らが細心の注意を払わなければならない。不断何気なく使っている言葉の中にも、その使い方によつては大きな社会問題にもなりかねないからである。いくら自分は「そういう意識で作句したのではない」と強調しても、一旦これが活字化されるとこれを否定することはできない厳しさがあるのです。

また選者にとつてもこのことは重要なことで、投句の中に差別観や差別用語の句がある時は、いくら着想のよい句であっても「没」にしなければその選者自身の見識が疑われるというもの。

添削句

- 一人っ子ペットのママの奪い合い 裕峰
ペットの母親と誤解される。一字が大切
- ▽一人っ子ペットとママの奪い合い

○法改正盲導犬も入れます 真一

着眼点は面白い。ただ盲導犬はペット(愛玩動物)と言えるのかな? 他に類句あり

▽これからは盲導犬も人並みに

○犬だけは認めてくれた定年後 洋介

中七の表現にやや無理があるのでは

▽定年後犬が仲間となる散歩

○孤独者ペット頼りの暮らしぶり 敬之介

頼りの言葉が弱いのでは

▽独り者ペットへ暮らしの愚痴こぼし 稔

○旅行にはペットも共に家族なみ

中七下五と類語で冗長と言えよう

▽家族旅行ペットも嬉しそうに吠え 輝夫

○ペットの目人間さまにいる首輪

転換法(転置法)を採ってみると

▽人間に首輪はめたいペットの目

○ペットネーム新製品が募ってる 三喜夫

○愛称募集する玩具屋が 三喜夫

二句を合成すると

▽玩具ペットの愛称募ってるお店 和友

○五十万円のペットですよと元社長

上五がいただけない

▽社長よりペットの毛並はめちぎり よしえ

○離し飼いペットも望む一軒家

望むの内容を少し変化させると

▽放し飼いペットのびのびするお庭

○恨み言ペットに聞かせ気が晴れる 弘子

下五で説明句にしてしまった。ペットの立場に立つてみると

▽時々愚痴聞かされているペット

○飼い主が猫の顔色窺って 郁代

猫の中でもベルシヤは気位が高いと言わ

れているようで

▽飼い主がご機嫌をとるベルシヤ猫 ふりこ

○老猫がた打ち回り生きてきた

表現はスゴイが内容が乏しい

▽老猫の病氣いたわる子の看取り フジ

○いつの間にかペットの世話は親がする

この場合上六になつてもかを入れた方が

▽いつの間にかペットの世話は親まかせ 栄呼

○ひとり居るペット嫌いが邪魔をする

上五を素直に表現してみると

▽飼いたいがペット嫌いがいて困る 智加恵

○孫いない隣はペットの毛を梳かす

下五は世話・焼くの代用詞でしょうが

▽孫の居ぬ隣ペットが孫代り 更紗

○ペットにも言いたい事が山程に

同じ内容を

▽しゃべれば文句山ほどあるペット 惠美代

○身勝手な主とも知らず買われゆく

立場を代えて表現してみると

▽飽き性の主人にペット捨てられる

○医師の書くベットのカルテ横文字で
上五が冗長。見付けはいい

▽人並みにベットのカルテ横文字に

○イエスマン時に意見も我がベツト 孝 明

原句は人を擬態化した句でいいと思う

▽おとなしい犬も辛抱の緒が切れる

○ベツト飼う余生少くぬいぐるみ 喜 子

余生（残り時間）が少ないので、ベツトが

飼えないというのであれば

▽老いの家ベツト代りのぬいぐるみ

○へびやワニ飼つてる家は行きとない 登志子

下五の表現に一考を

▽へびやワニベツトにしてる怖い家

○嫌がらずいつも愚痴聞くマイベツト 弘 之

ベツトに愚痴を聞かす句は多数

▽愚痴を聞きストレス溜めてるベツト

○愛犬と雨が止むのを待つている 錦

同じ内容を犬の立場で詠んでみると、やや

川柳らしくなるのでは—

▽雨脚をにらんで犬が待つ散歩

○団欒の輪の真ん中を猫が占め 惠 勇

真ん中の表現を代えてみると

▽団らんの中へとけ込むベツトの座

○十八十色ベツトの種類多種多様 章 司

説明句に近い

▽ベツト飼う家それぞれにある事情

○つぶらな瞳わが家猫は首かしげ
説明句。首をかしげる猫だけでは

▽飼ひ猫が首をかしげる古い餌

○長い奴嫌いな父へ子がトカゲ 像 山

上九音字が冗句。面白くするには父の動作

を詠むといひのでは—

▽トカゲ飼う子供へパパは逃げ回り

○妻よりも高価なベツト美容室 宏 子

中七の意ではベツト自身が高価と誤解され

る。本来の意味を表現すれば

▽妻よりも高価なベツト美容代（原句では）

▽美容にも妻より高くつくベツト

○夫に似る気弱な猫が子ども生む 美代子

夫（男）子を生む猫（メス）で釣り合いが

とれない。視点を代えてみると

▽夫似の負け犬だから憎めない 侑 子

○他人様のベツト抱こうと思わない

下五が句を駄目にした

▽他人様のベツトを抱いてひっかかれ

○ドラ猫のナンパ地声が大いいな 栄 一

ドラ猫はベツトとは言えないのでは—

▽思春期で時々夜遊びうちの猫

○ワンだけでいろいろんな事をうったえる 文 江

いろいろんなが冗句

▽飼うほどに夫の言葉が解り出し

住 句

おじいちゃんうちをベツトに日もすがら
（日もすがらは造語・面白い）

初孫をベツトのように可愛いがる 忠 子

三毛猫にベツトフードのバースデー

コンビニーターが命をにぎるロボベツト

一人居に隣りの猫が居候 栄 子

糖尿の犬と一緒にダイエツト 菜 月

傍にいてくれるだけでも気が和む

老い猫に話して老いのうさばらし 満 子

ストレスを発散させるベツト飼う

表札にベツトの名前書いてある トシエ

ロボ犬にベツトリストラされる破目 敏 子

ベツトにも弱い所を見透かされ 益 子

愛犬に家族のくせを教えられ 鈴 美

ベツトにもストレス溜まる梅雨の空 和 香

よく動くうちのベツトは旦那さま 昌 鼓

職を得てベツトと妻のお見送り 清

這い廻る我が家のベツト八ヶ月 欣 子

ベツトにも飼ひ主による運不運 照 彦

（全く人間も同じ）

飼ひ主に似てコロコロとよく肥り 山 雅 子

（ユーモラスな情景）

飽食の猫と主人が医者がよい 美 弥 子

（現代諷刺）

私の句
貴婦人のベツトで甘んじる男

秀句鑑賞

同人吟 堀端 三男

— 8月号から

過日、川柳塔社の句会部の方から、本社句

会での選の依頼がありました。老齢による視力の低下から、短時間で選に手落ちがあつては申し訳ありませんので、ご容赦をお願いしたところ、今回はからず秀句鑑賞の依頼がありました。川柳塔にお世話になつて二十余年、塔のため、何一つお世話をさせて頂いて居りませんので、家でゆっくり出来る仕事ぐらひは、と引き受けさせて頂いたようなわけです。

三百九十七人、二千四十句と対峙、結局自分好みの句となりました。お許し下さい。

群にいてあらぬ妥協をしてみましょう

石原 靖 巳

仲間うちにおいて「あの人はいい人だ」と言われるためには、不本意な妥協を強いられることが多い。考えて見れば、これが世の中かも知れぬ。自己を確立していれば、妥協もまた悪いものばかりではない。限られた人生を楽しいものにして終えるための一つの方法かも知れません。

生き恥の一二つは糧にする

舟渡 杏花

恥をかくということは、生きていく証だと思ひます。恥をかいたら、誰でも隠そうとするのですが、それを自分の生活の糧として、今後の生活を切り開いていこうとするあなたのバイタリティーに感服いたします。その意欲があつてこそ、人間は成長して行くんだなと痛感させられました。健闘を祈ります。

死なせない覚悟で金魚すくいする

有沢 せつ子

金魚すくいは、夏の風物詩です。夏祭りには欠かせない余興の一つです。金魚をすくつて帰り飼育すること、すくうスリルを楽しむということもあります。前者より後者の方が多いようで、すくつた金魚を粗末にする人が多いようです。作者は、前者で、初めから「死なせない覚悟」で、金魚をすくい、大切に飼育する気持がわかります。素人の飼育には「和金」が良いようで、数年も育てたことがありました。念のため。

こめねがが上手に言える生き上手

大橋 鐘造

年毎にあやまりつぶりがうまくなる

中井 ゆき

われわれは、子供を外へ送り出す時には、「交通事故に気を付けて」等と送り出しますが、米国では「キューに気を付けて」と送り出すという話を聞いたことがあります。キューとは、サンキューのキューであり、エクスキューズのキューだそうです。「ありがとう」と「ごめんなさい」が、子供の頃から躰けられている様子がよくわかります。素直にありがとうが言え、謝り方が上手になるといふことは、人間が出来たということではないでしょうか。お二人に感服しています。

呼び止めてくれると思ひ席をけり

江口 度

世の中と言つものは、そんなに甘いものではありません。自信過剰から、往々にしてそんな行為を取る人を見かけることがあります。俺が居なければ、君等に何が出来るのかと、見下したような態度には「仲間意識」とか「和」という考えは微塵も感じられません。早くそんな人の、自信過剰を打ち破つてあげたいと思ひます。

少年になる自転車を買換える

播本 充子

兒童から生徒になる中学校への進学のお祝いに、どちらでも、十四インチから十六インチへの自転車を買い与えていようである。わが家でも、三人の孫に、自転車を買って与えるのが、祖父からのお祝いでした。高校生になると、自転車通学をしなければならぬ事もあり、また新品が欲しくなります。子供の成長のことを思えば、苦にならないのが、家族というものかも知れません。

精いっぱい生きよう頂いた生命

米澤 俣子

人それぞれに、神仏から頂いた「寿命」というものがあるそうです。人間は、生れながらにして「生死」が決っているのかも知れません。誰にもわからない造物主だけが知る神秘です。寿命が果てるまで、精いっぱい生きて、感謝を捧げることが大切だと思えます。

五月病父のパンチにあいに行く

原 みさを

父のパンチにあいに行く、ぐらいの五月病なら、父の一発ですぐ直る軽症だと思えます。母の膝に泣きに行くようになると重症です。こういう苦勞と、努力を重ねて人間は成長して行くのです。大いに頑張りましょう。

旅行した記念のタオル取っておく

高田 博泉

同じような考えを持っているのだと感心しています。実は、私も旅行して、貰ってきたタオルを溜めている一人です。妻が生存中は「このタオルで、俺の襦を被うてくれ」とか「死出の浴衣を縫うてくれ」とか言っては笑い合つたものです。

今でも時々、タオルを出して、当時の事を思い出しています。タオルを見ると、その時の様子がまざまざと蘇り、一緒に参加した友達の色や行動までが思い出され、若かりし頃の昔に還ることが出来ます。

タオルは泉州地区が、全国の幾許かのシェアを持つ特産品でしたが、中国からの輸入品に押され苦勞していると聞いています。小さいタオル一つでも時代の推移がわかります。

このラベルほんまもんかと念を押し

中後 清史

最近の世相を皮肉つた一句です。わが国でも有数の企業が、狂牛病発生以来、政府がとつた対策に便乗し、補助金を貰うために、ラベルを貼るかえるという一大失態を演じ、各企業にも波及し、世相を混乱に陥れた罪は大い。一般庶民は、一体何を信用すればいいのか、念を押されるのも当然です。

ともかくも柳の枝で生きのびる

宮尾 みのり

昔から「柳の枝に雪折れなし」という諺があります。世の中の進歩が早く、老いはほつていられるばかりです。昔のことを言つては「世の中が変つたの」と笑われるのが落ちです。ここは、柳の枝と決めこんで、若い人の意見を聞いておくのが得策かも知れません。「柳の枝」が言い得て妙と思います。

ワールドサッカー頼に日の丸描いて笑む

小島 蘭幸

平成十四年六月は、歴史に残る年月となりました。韓国との共催によるワールドカップが実施されたからです。日本各地で試合が行なわれたこともありましたが、日韓両国が、ベスト十六入りの大活躍をしたからです。日本の盛上がりは、東京オリンピックの比ではありませんでした。世界各地からの参加国との交流は、各地で広げられ、大分県中津江村と、カメルーンとの交友など、幾多のエピソードを残し、ブラジルの優勝を閉じました。今月号には、何十句というサッカーを詠んだ句がありましたが、日本を応援するサポーターのオーソドックスな姿として、この句を代表させて頂きました。日本サッカーの四年後の、ドイツ大会を楽しみにいたしましょう。

同人特集 動物百句

平成八年〜平成十三年
同人吟から 編集部

犬洗うことも仕事の浜の家

麻生 路郎

牛小屋に月光 美しき浪費

橘高 薫風

馬の尻並ぶあわれを見て居たり

乗原 道夫

ひろわれて犬はだんだん犬らしく

近藤 豊子

行きずりの犬にも笑顔市場籠

松川 芳子

雪ちらり野良猫飯をねだるなり

宮口 笛生

猫嫌い猫の方でもそう思い

池田 半仙

寝そべって牛は思案を噛みもどす

坂上 高栄

風邪の床 猫が添い寝をしてくれる

細川 稚代

正論を吐き続ける牛の舌

川上 大輪

ペットショップ子犬の運をふと思ふ

井上 照子

犬の代わり鬼も一匹飼っておく

久保まさお

別々に寝る猫好きと猫嫌い

土橋 螢

象の目を見てると何故か泣けてくる

西谷 大吾

春うららかバはいつでも平常心

石原 淑子

男のピアスに首をかき上げるロバの耳

永田 俊子

人間に慣れたヒグマの間抜け顔

竹治 ちかし

象さんはいないが好きな動物園

志田 千代

老犬と目を合わせてぞ老いたなあ

岡本吉太郎

いざと言う時に利くライオンのたてがみ

林 瑞枝

一匹の犬食べさせてホームレス

松本ただし

定年後犬を子分に散歩する

須郷 井蛙

キリンの母の母さんらしい横座り

亀岡 哲子

北限の猿は温泉持っている

中山 雅城

柿の木に猿が登ると風になる

飼犬はばくを主人と見ておらず

老犬の生きる証のようになく

血の筋が火の輪をくぐる虎になり

サラブレッド競う宿命負わされる

猫はいいな少し真似てもいいかしら

東大の猫まで哲学的な顔

虎の欲翼が欲しくなってくる

ダルメシアンの模様は神のいたずらか

犬談義きいてる犬は欠伸する

卒業の無い老犬で賞を受け

のほほんと屋根から降りるネコになる

勲章を欲しいと思う猫のひげ

猫の瞳がボクのつぶやき聞いている

酒呑みの相手は猫も飽きてくる

のら猫の三代目はや青春期

老犬のベースに合やす万歩計

核ボタン猫が踏んだらどうしよう

猫太り流れるようにおりられず

ひとりもの猫におやすみ言つて寝る

田口 虹汀

前 たもつ

山本 半鏡

鴨谷 瑠美子

堀端 三男

山本 義子

結城 君子

海老池 洋

岩佐 丹吉

山口 美穂

二宗 吟平

坂田 和歌子

江口 度

後藤 早智

大橋 政良

小林 トメ子

玉置 重人

岡井 やすお

井上 信子

田辺 正三郎

クローン牛未知の命がいたましい

鹿抜きに奈良の風景語れない

恐ろしいことが始まるクローン牛

引き綱でガイドしている犬の自負

砂丘の駱駝もう日本に飽きている

輪が回る二十日鼠は檻の中

牧場で撫でた羊を食いますか

座右の銘変えては進む牛でいる

お預けの犬も辛から休肝日

仲直り猫がいびきをかいて寝る

職捜しベンツの窓に犬の顔

遣伝子をおもうゼブラの縞模様

チンパンジー何故か懐かしその仕草

飼い主も猫も老いゆく白い髭

おねだりの時の子猫がメツチャ好き

得意先ごとに名前の違う猫

バーゲンの帰りに犬の首輪買う

しがみつくコアラの爪にたまされる

散歩するコリーの顔は哲学者

金魚とも猫とも話す日本語で

栗田 久子

岡本 久峰

青戸 田鶴

榎本 吐来

白根 ふみ

小糸 昭子

内海 幸生

西村 哲夫

角野 仁清

木村 富美子

神原 まさと

玉置 英子

指宿 千枝子

田中 節子

上田 宣子

石上 悦子

杉澤 汀

櫻庭 順風

生嶋 ますみ

門脇 晶子

飽食に慣れてか猫が爪研がず
尾道の猫と人語を分かちあい
年とつた猫も一緒に川渡る
ビール券と一緒に子猫もらわれる
チンパンジーに私負けます記憶力
尻尾振る犬居るかぎり世は長閑
猛犬とあるのは主人のことらしい
お粗末な顔で野猿も花粉症
象の足に潜む哀しみ視てしまふ
猫用の入口よその猫も来る
ケンちゃんという猫がいる洗濯屋
野ねずみの巣があり草を刈り残す
ルンルンの出鼻をくじく熊の糞
我輩はヒトじゃが猫に弱くなり
野良猫の人にも勝る母性愛
老猫の穏やかな忌避目を閉じる
曲者の犬一匹を飼い馴らす
ありがたい友だと思いうちのポチ
猪の親仔と太る里の秋

神庭 詩郎
森 茜
中井 ゆき
松本 よしえ
西村 りつえ
山本 蛙城
早川 盛夫
蘭田 獏杏
岩崎 みさ江
高島 啓子
岸野 あやめ
村上 信子
板山 まみ子
松本 ただし
松岡 久留美
安芸田 泰子
西川 和子
西原 艶子
大谷 幸次郎

流行色 先取りをして犬に着せ
愛犬死す こんな綺麗な陽の中で
因果な事だ いぬのウンコを提げている
抱きよせる猫から貰う静電気
うちの犬 灘高ぐらいなら受かる
美女に化けている狐かも知れん
猫のした悪戯までも叱られる
童心に戻りうさぎと戯れる
帳尻の不足は猫のエサと書く
身代わりに愛犬関節炎になる
盲導犬車を止める威厳あり
匂の味知ってる猿が畑に出る
夏ごもり猫も私も夜行性
野良猫も話題のひとつ老いふたり
寂しい人の犬も寂しい顔をする
猫待っているからとんぼ帰りする
さんま焼く匂いで秋と知った猫
退院の妻待ちかねる猫と俺
ネズミ追う事もない猫日向ぼこ

藪野 けい子
小林 一夫
土橋 はるお
和泉 あかり
嵯峨根 保子
天正 千梢
武田 帆雀
佐野木 みえ
井尻 民
森本 節子
安達 忠央
福士 慕情
藤田 泰子
矢倉 五月
牧野 芳光
河内 月子
石原 靖巳
穴吹 尚士
津守 なぎさ

—水煙抄

秀句鑑賞

—八月号から

田 辺 鹿 太

文化都市蹴りたい石が見つからぬ

木 村 忠 義

アスファルトジャンゲルの大都會では、う
つぶん晴らしの小道具も見当たらないとい
う悲しい現実がある。

おしどりの仮面が揃うツアーバス

川 島 良 子

おしどりの仮面とは少しうがった見方も
知れませんが、案外そんなものと自問自答
しています。

オーバーに笑って暮らす二人きり

土 田 今 日 子

大袈裟に笑い合えば、二人きりの寂しい暮
しも少しは、活気が出るかも知れませぬ。

脳みそをいじめて呆けを予防する

永 原 昌 鼓

何も考えないと、脳はどんどん退化

するといひます。難題をふっかけてせいぜい
脳を活性化させましよう。

いい人だ必死に嘘をついている

両 川 無 限

平然とつく嘘よりも、冷汗をかいてつく嘘
の方がより人間らしく、人の良さを感じます。
年甲斐もなく直球を投げ急ぐ

伊 勢 田 毅

無理して直球ばかり投げないで、時にはく
せ球も交えるのが処世術といえましよう。

君が代もちゃんと歌えるサポーター

桑 名 孝 雄

国歌としての可否はともかく、若者の君が
代の大合唱には久しぶりに感動しました。

アルバムの昔を聞く雨の午後

伊 勢 八 重 子

外は雨。手持無沙汰の日は、古い写真帖な
ど開いて過去をふり返るのも一興でしょう。

冬眠を知らぬわたしの好奇心

稻 川 恵 勇

好奇心のある限り、いつまでも若若しく生
きられます。ただし、ほどほどにしないと墓
穴を掘りますよ。

二駅で化粧仕上げた女の子

大 崎 侑 子

車内でよく見かける風景です。最近の若い

人の生活ぶりが透けて見えるようで、悲しく
なります。

年金の暮らしそよ風にも揺れる

妹 尾 安 子

金利はゼロに近く、ささやかな年金暮しに
医療費や消費税の引き上げは、そよ風どころ
ではありませんね。

青虫も一緒に買った無農薬

秋 元 和 可

最近では食べ物に信頼が置けなくなりまし
たが、青虫が好んで食べているかぎり、大丈夫
でしょう。

悪女にはなれぬ目尻の笑いじわ

国 米 きくゑ

いくら叱つても目は笑っているのですか
ら、孫にさえ効き目はありませんよ。

自己主張強い胡瓜は落ちこぼれ

古 手 川 光

曲った胡瓜はきつと自己主張が強いのでし
ょうね。でもそれはそれなりに、漬物にして
食べると味わい深いものですよ。

人工の孵化で鈴虫義理で鳴く

前 岡 健 三 郎

義理で鳴いているのか、鈴虫に聞いてみな
いと分かりませんが、面白い着想だと思いま
す。

川柳塔みちのく15周年記念句会参加の旅

みちのくの風

7月13日早朝、薫風名譽主幹をはじめ、鳥取からの和歌子夫妻も交え一行14名は、にぎやかに雨の大阪を飛び立った。一時間半後到着した青森はまさに別天地、からりと晴れてさわやかな風が吹いていた。

空港には五楽庵氏をはじめ川柳塔みちのくの五名の方がお出迎え下さっている。

お互いの笑顔が、再会の握手を一層温める。ご用意下さったマイクロバスには、盛り沢山の観光プランが詰められていた。

まず三内丸山遺跡へと案内される。甲子園球場7個分という広さの遺跡公園には、縄文時代千五百年間にわたり、生活した集落跡がある。復元された住居、墓、見張台が点在し、出土品が展示されていた。見張台の栗の大柱は、周囲を焼き焦がしてあったため腐食を免れている等、縄文時代にも、暮しの工夫があったことが窺い知られる。

バスは弘前へと進められた。車窓から、岩

木山がだんだん大きく眼前に迫り、頂上の雲が晴れて、くつきりと全姿を見せてくれた。裾野へゆつたりと続く、やさしく美しい姿は、神々しく輝き、さすが母なる山という趣きである。ふもとは、鮎の棲む岩木川が流れる。

白神山地ビジターセンターでは、アイマックスの大型画面で、迫力のある映像が、白神山中に分け入ってゆくような臨場体験をさせてくれる。

世界遺産に指定されたブナの原生林の四季は、ブナの木のつばやきの形で語られる。

八千年の昔から、母なる森、白神山地では、動植物が共生し、生命を循環させながら、生態系を保ち、悠久の時を受け継いでいるとナレーションは続く。

そのあと、左右にりんこの木を眺めながら、バスはりんご公園、ねぶたの館へと向かう。

車内でも語らいは続き、大阪からの疑問にみちのく訛りで、あたたかく答えて頂き、時



津軽三味線ライブハウス「山唄」で



川柳大会風景

折、爆笑の渦がまく。
ねぶた、ねぶたの由来は、ちよつと変つた
燈籠流しにはじまり、眠気を払う眠り流しか
ら、「ねぶてえ」が語源だという。

弘前ねぶた、青森ねぶたは型も違い、おは
やしも違う等、ねぶたの館での説明であつた。
弘前の夕陽が西に沈みゆく時刻には、本場
の津軽三味線、民謡を聞きながら、地元なら
ではの夕食に舌鼓を打つ。「あとはだり」(も

う一回)という土地の言葉を覚えて帰り、弘
前の第一夜は静かに更けてゆく。

14日は、弘前プリンスホテルの会場に70名
の参加があり、会員総出の働きにより、川柳
塔みちのく15周年記念句会は盛会となつた。

当日の天位の中から、薫風・みつ子・楓楽
3氏の二次選により、本社からの参加メンバ
ーの山本義子さんが五楽庵賞を獲得された。

蒼い森こは胎児のおもちゃ箱

15日は台風の影響によるあいにくの雨とな
つたが、一行は意気軒昂。都合3日にわたる
川柳塔みちのくの方々の案内により、チャー
ターのバスで宿泊のプラザホテルを午前8時
出発。今回の旅のハイライトの一つである
「十二湖」へ向う。

「十二湖」は白神山地内の広大なブナの森
に点在する湖沼群で、一番の見所は「青池」。
神秘的な小さな池は、晴れていたら宝石のエ
メラルドにも勝る色であろうと想像できた。
お天気には恵まれなかつたが、さすが世界遺
産、深い森の空気を胸一杯に吸い、都会の汚
れが落ちたような気分であつた。ただ、太古
からの大自然に車が入り込むことによつて、
自然熊害を壊さないのかと、ちよつびり心配
がよぎつた。

昼食は黄金崎にある「ウエスパ椿山」内の

レストラン。ここは白神山地の原生林とはう
つて変つて、とても日本とは思えない風景。
夕陽の名所で、ドームが閉閉する温泉もあり、
ロッジが点在、滞在型リゾート地である。風
力発電の風車、ガラス工房などふとヨーロッパ
へ来た錯覚におそわれる。

全ての予定を終え、青森空港へ向うバスで
は、クイズが用意され五楽庵氏選による句会
も催された。

当日の入選句

みちのくのリングの香り旅土産	会美
津軽三味の烈しさに酔う旅の酒	みつ子
海の駅津軽の情も買うてくる	楓楽
雨あがり花輝けり旅途中	慕情
日本海荒れて男の顔になる	義子
旅の雨少し無口になるツアー	遠野
みちのくの雨にうたれて旅終る	一夫
秀旅の宿逢うてはならぬ人といる	いわゑ
秀さよならの後髪ひくあいや節	澄子
秀もう一度月の白神見に来ます	和歌子
楽しい三日間はあつという間に過ぎ、一行 は無事に伊丹空港へ着いた。	
五楽庵みちのく名誉主幹、脇主幹はじめ川 柳塔みちのくの皆様、本当に有難うございま した。	

(希久子・楓楽記)

翠洋会二十周年記念

吟行句会

天正千梢

梅雨晴れ間の六月二十一日、翠洋会二十周年記念句会と、薫風先生の喜寿のお祝と重なったお目出度い吟行となりました。

早朝大阪駅前ヒルトンホテル横で集合、今回は翠洋会の旗も新調され、三十名バスで出発しました。

目的地は、徳島阿波の里「阿波木隅人形会館」、鳴門観潮「渦の道」です。早速お八つを配って下さり話の花が咲いています。

先ず人形会館では、かしら（頭）の製作課程をくわしく説明して下さい、全国から色々修理も送られて来る、との話をされる人形健（春名元二）さんは誠実で温厚、人望の高そうなお方とお見受けしました。

お昼時間やおかれて「阿波の里」に到着民芸風の落ち着いた土間のうす暗い感じのする部屋で、珍しい箱に入った昼食をいただき、希久子さんからサクランボのお接待ご馳走さ

んでした。

句会には部屋を替えて三十名の力作の選評に、耳をすまして聞いているうちに、笑ったり納得したり醍醐味を味わいつつ時が流れて行きます。

最後は、大鳴門橋補剛桁の空間に設置された遊歩道「渦の道」。アンカーレイジから四五〇米離れた場所にある展望室まで海上散歩。初めての経験で楽しい時を過ごし記念写真をあちこちでパチリパチリ。

帰りのバスの中で、薫風先生の選で囁目吟の発表です。皆さん上手に作っておられるのに頭が下がります。

いいお天気に恵まれて、目新しい所に連れて下さった恭昌会長さんはじめ、企画して下さい下さった幹事さん方、ほんとうにありがとうございました。

翠洋会二十周年句会と薫風先生の喜寿のお目出度い吟行も全員無事に、大阪駅で解散となりました。

当日の秀句

二十（A）

楓楽選

還暦のはたち三人分の意気

二十（B）

希久子選

真理子

二十歳娘の春をラップする

昭

喜（A）

みつ子選

喜寿の日に二人でわけて食べる鯛 会美

喜（B）

正坊選

泣き笑いみんな喜劇にして終ろ 日の出

囁目吟

薫風選

おしゃべりでたっぷり学ぶ阿波の里 日の出



鳴門「渦の道」前で



多哥由さん 安らかに

村上信子

七月二十二日朝、新聞に海で行方不明の記事に多哥由さんの名前をみて、無事を願っておりましたのに、明朝の悲報に声も出ませんでした。

ただ「どうして」の一言だけでした。一週間前の句会には元気で兼題「金魚」の選をしていただき楽しい句会でしたのにな……。

私が多哥由さんと出会ったのは、もう何十年も前の事で、役場の上司と職員の間で、多哥由さんは若くして村民の期待を受けて、村収入役という責任ある地位についておられました。長男さんを保育所に預け出勤しておられました。口数が少なくきちんとした方で生真面目が背広を着たようなお方でした。惜しくも途中病気のため退職され、療養されながら奥さんと二人農業をしておられました。元氣になられてからは、村教育委員として十二年間の長い間村教育の発展に力を注

ぎ、村行政にもなくてはならない大切な方でした。

十五年位前「川柳がしてみたい」と句会に出席されました。最初は両川先生が大笑いされるような句を作っておられました。

「僕は理数系でさっぱり川柳はできません」と言いながら根はお好きだったのでしょうか、NHK学園や他町村の川柳会に度々出席し、よく勉強しておられました。

持ち前の聡明さと粘り強さは、多哥由さんを立派な川柳作家に育てたようです。ふくべ川柳会の会長にもなっていたとき、川柳大会を毎年開催され、出席の村長が「小さい村でよくこれだけの人が集めが出来たな」と感心されるくらい遠方からも多数の柳友が出席して下さいました。これはひとえに多哥由さんの人柄と活躍に依るものと思っております。近頃は若い時の多哥由さんとは思えないほ

どズバリものを言い、自分が正しいと信じた事を通しておられました。鳥取川柳協会と連盟との関係で、句会の出席者も減っておりましたが、「川柳はやめん」と言って元気で出席しておられました。コーヒーが好きで缶コーヒー片手に作句されていた姿を思い出します。

健康には特に気をつけておられ、夏に海に出て身体を焼くと冬に風邪をひかないからと、毎年夏に海に出ておられました。健康を貰うための海が命とりになったとは何と皮肉な事でしょう。

葬儀の日はすごく暑い一日でした。七月二十八日に赤碕川柳会に行かれる予定だったようで、選者の任を果せなかったことを、きつと申し訳なく思っておられると思います。暑い中遠方より赤碕川柳会の但見石花菜様、岩見川柳会より石谷忠良様が葬儀に参列して下さいました。

多哥由さんもきつと喜んでおられたことでしょう。これからは極楽で作句三昧の日を送って下さい。六十九歳はまだまだ若く、惜しい方を失ったといまさらのように思う毎日です。心よりご冥福をお祈り致します。

合掌

本社 八月句会

八月七日(水) 午後五時半

アウイーナ大阪

35度前後の猛暑が続いているせいか、八月句会は99名といささか淋しい出席者となつた。はじめに逝去された同人橋本多野田、麻生アト両氏の冥福を祈り黙禱を捧げる。お話は路郎師の孫、アト氏の甥に当る西村哲夫さん。現役の仕事である。

路郎師、アト氏の懐旧談にはじまり、私の教えに続く。人は惑・業・苦の中に生きている。惑は煩惱であり、煩惱を抱いて行なうのが業である。業が苦を呼ぶ。煩惱の瞋恚が苦の地獄につながり、貧欲が餓鬼を招き、愚痴は畜生を生む。人は皆、苦しみを持って生きている。その中で如何に生きるかを教えてくれるのが仏である。アト氏も仏になられて、私に人生を如何に生きるかを教えてくれているようだ、と結ばれた。(尚士)

月間賞は鴨玉瑠美子さん(藤井寺市)に輝く。(司会) 遠野(記名) 月子(朝)

(受付) 瑠美子・伽羅(清記) 義

席題「雲」

古川 奮水選

流されて花のうてなに続く雲
雲走り足早になる田舎道
語り部が語る悪魔のキノコ雲
生一本融通の利かぬ飛行雲
ひと暴れキントン雲の孫悟空
雲隠れ出来ぬ私に背番号
猛暑続く天にちらほら秋の雲
青空に折り目をつける飛行雲
秋近く雲から湧いて出る音符
逢えぬまま雲が重たくなってくる
雲白態大空画布に神は絵師
草原の旅はあこがれ羊雲
寝ころんで入道雲と会話する
告げ口が噂広めて雲がくれ
雲掴むような話が金に化け
雲の峰路郎先生顔を出し
涼しげな雲よわたしを乗せてくれ
雲つかむデカイ男の夢がある
雲行きが怪しくなった夜の床
縄電車夕焼け雲と手をつなく
風鈴の音の向うに茜雲
悟空さん乗せて下さい綿の雲
灼熱の都市は雨雲待ち焦がれ
雲を突く男をつれて娘が帰国
雨雲に喝采上がるひび割れ目
倒産で雲隠れする三代目
借金で雲隠れでもしようかな

美代子 紫香 柳弘 シマ子 笛生 かすみ 三男 武庫坊 寿子 泰子 倫子 遠野 利昭 笛生 朝子 五月 吐来 千歩 哲夫 典子 玄也 昭 久峰 昭子 昭子

負けたらあかん入道雲が言うている
約束を追いかけている白い雲
妙案がひとつ浮んだ千切れ雲
雲行きをじっと見つめる懐手
息切れの私を見てる鰻雲
仏にも鬼にもなれず雲になる
天国行きの雲は氣象台でもわからない
につこりと入道雲に母の顔
いち早く察知した子の雲がくれ
風に流れてふる里へ向く浮雲よ
また一人先達が逝く雲の峰

千里風 洋 一二三 アキ 昭 保州 朋月 かりん たず子 正坊

入道雲ムクムクと慰霊祭
地
女工哀史野麦峠の白い雲
天
織田作も見た坂道の鰻雲
軸
雲湧いて山にからくり魅せられる

扶美代 萬的 正雄

兼題「リズム」

川上 大輪選

朝めしを食ってリズムを取り戻す
蜘蛛のリズムに思うことがある
死球から乱れる好投のリズム
じよんがらのリズム命の底叩く
短足もわれを忘れてとるリズム
メトロノームが羨ましいと不整脈
困惑をします予定年後のリズム
ときめきのリズムへ女華になる

螢 澁 正雄 萬的 扶美代 朝子

阪神が負けるとリズム感変わる

ワルツなら踊れる父のリズム感

手拍子で狂うリズムを立て直す

パトカーが壊す交差点のリズム

リズム体操リズムに乗れば転びそう

割り箸で調子をとって唱う父

めでためだのリズムが狂い出し

宝くじ当りリズムが狂い出し

日本のリズムを崩す輸入品

針箱に母のリズムが生き続け

冷えたビールで今日のリズムを整える

お祭りのリズムだったらすぐ乗れる

子守唄祖母のリズムがまだ残る

シャンソンを父は演歌にしてしまい

年金に合わせてリズムとついでいる

リズムからひとりのみ出すレオタード

七難をかくしてくれるよいリズム

バイオリズム私の夏が刻まれる

口げんか朝のリズムが狂い出す

大好きなひとのリズムは忘れない

日本のリズムで回る水車

朝食が今日のリズムを組み立てる

トーストが朝のリズムで焼けてくる

カアちゃんのリズムに家族動き出す

何が起ころうと大自然のリズム

何となくリズムのずれる休肝日

夜行列車のリズムに馴れてよく眠る

企みを抱くとリズムの狂う足

英子

玄也

遠野

求芽

あやめ

保州

泰子

昭子

求芽

寿子

武庫坊

典子

昭子

尚士

義

雅文

天笑

雅文

月子

朝子

光太

金久

房子

奮水

たもつ

洋

紫香

度

家裁出て女の足はリズムミカル

変らないリズムで朝になる平和

心臓のリズムが狂う置手紙

風呂めし寝る一番合っているリズム

何歌っても御詠歌になるリズム

日替わりのリズム泣いたり笑ったり

京の町リズムに合わせぬ河内弁

ありがたいお経だリズム狂わない

兼題「本物」

長浜

澄子選

充子

ダン吉

蝿

弘風

真理子

ふりこ

ルイ子

照

舞夢

一風

月子

諷云児

春蘭

メ女

篤子

人

本物

諷云児

セツ子

久峰

利昭

真理子

美代子

天

地

人

兼題「本物」

長浜

澄子選

充子

ダン吉

蝿

弘風

真理子

ふりこ

ルイ子

照

舞夢

一風

月子

諷云児

春蘭

メ女

篤子

人

無印になって本物見えてくる

白衣に替えさすがはプロの貌でいる

私の指輪本物みたくやろ

本物を見抜けなかった日の誤算

素顔でも化粧をしても好きという

DNA鑑定ズバリほんまもん

本物の水は両掌で掬われる

本物になってしまった夏の風邪

本物が脇でしつかりささえてる

反抗期少し本物わかりだし

本物は何度も洗濯に耐える

鑑定に出したばかりにもめている

Tシャツの汗は本物まだおとこ

ちと安い本物やろルイヴィトン

本物と知らず気楽に持ち歩く

本物と分つてからの騒ぎよう

贋物と妥協はしない両替機

本物はキラキラ光ったりしない

去り際の一言本音光らせる

泥ついた大根誇り持つている

佳

本物に憧れている紙コップ

退くのもほんとの愛と知らされる

警戒な舌が漬物ほめてくれ

本物の花びらだから散つてゆく

爽やかに脱皮はたちを見せにくる

人

本物の愛の痛さを知るげんこ

茜

寿子

月子

たず子

文

萬的

たもつ

菜月

いわゑ

茜

金太

千代

瑠美子

金太

哲夫

いわゑ

諷云児

美代子

みつ子

典子

義

一風

メ女

瑠美子

雅文

倫子

人

倫子

地
本物のトマトの匂いするトマト

扶美代

天
本物の哀しみだから胃に刺さる

扶美代

軸
本物に有象無象が群れたがる

兼題「祈る」 宮崎シマ子選

自分に祈るいつかはきつと遂げる夢
飽食も忘れぬ八月の祈り
一心不乱核ゼロ祈る広島忌
感謝感謝蛇口の水にガス栓に
火の祈り水の祈りの原爆忌
祈らねば今の平和が過ぎそとで
祈つたら何かいい事ありますか
千羽鶴祈つて千の神を呼ぶ
タイミンクずれて祈りも効き目なし
お祈りに神様だって困ること
祈る姿がますます丸くなる祖母よ
祈つても無理は通らぬ青テント
断崖に立つと人間手を合わす
別々のこと祈つてた二人づれ
呆けても安心そんな日本を祈つてる
祈つて祈つてわたしの業を軽くする
青い芽の双葉は祈るかたちして
腹減ったからお祈りは後にする
御祈祷料神も広げる守備範囲
凡人の祈り世界へ届かない
手を合わす祈る形で金せびる

満津子 充子 ダン吉 天笑 柳弘 欣子 大輪 いわゑ 冬葉 弘風 三男 房子 いわゑ 修 一風 美代子 千里 大輪 求芽 寿子 昭

人生の随所祈つたあとがある
鳥居出る時には祈りもう忘れ
半世紀老母の祈りは青いまま
神様に口祈を告げておく
煩惱を重ねて祈り深くする
お祈りの形でメール見ている子
児の末の祈りを抱いた母子手帳
花火師の祈り夜空を華にする
禁酒しています私の祈りです
祈るかたちに伏せてある飯茶碗
百歳になつても祈ることがある
勝手な時だけは祈っているヒト科
心配はもはや祈りとなつている

瑠美子 度

満願へご恩返しをする心
祈りたい心はいつも不意に湧く
残された者の祈りや大花火
あと三月祈っています百になる母
沈黙のお祈りが待つ呱呱の声
ライバルの復活祈る百度石

アキ 隆盛 千歩 桃花 洋 加津子 つづや 諷云児 千里 美代子 千代

母がいて厨に火の神水の神
語り部が静かに叫び出す祈り
ふり返ることのみ多い日の祈り

典子 典子 典子 典子 典子 典子 典子 典子 典子 典子

兼題「冗談」 都倉 求芽選

医療費まで総理冗談なんでしょう
寄席好きの父に冗談通じない
冗談で死ぬると言つた友とのむ
マジで言う核抑止力という冗談
島消える冗談でなし温暖化
役所から届いた私の背番号
余生への序曲か冗談やえる
会心のジョークを聞き返さないで
あハハハ冗談でした悪しからず
冗談のつもりがたんと寄付をくれ
冗談だと言われたことを忘れたい
冗談で言ったことばに縛られる
冗談のような名がつく新生児
先生のジョーク生徒が笑わない
冗談も徹もオッスで返事する
冗談はボンボン言える役立たず
冗談のつもりが修羅となりそうだ
応募用紙女子大生と書いて出す
冗談が通じぬ妻に馬鹿にされ
冗談が通じず女ついて来る
冗談の一番うまいコマージュナル
酒やめろきつて冗談医者が言う
冗談で安心させて首刎ねる
最高のジョークはギネスブックなり
冗談へ残念そうなアイシャドウ
冗談がうわさに化けて追つてくる
捨て身にもなれずさりとして冗談も

ダン吉 哲男 眞理子 泰子 扶美代 三喜夫 天笑 千代 たず子 眞理子 玄也 つづや 瑠美子 かりん 扶美代 則彦 武庫坊 度 弘風 利昭 保州 千歩 公誠 冬葉

— 突然の名誉市民でびっくり —

ニューオリンスズは癒しの街

早川 棲世

都市における環境施設を調査するため、アメリカの各地を回っていました。ニューオリンスズの市長さんは、かねてからこの問題に熱心で、いろいろと取り組みを進めておられ、私たちの訪問を歓迎されました。はるか州境を越えて設置されたごみの埋立地や、汚水処理場など施設はすべて壮大でした。

同市には延べ三日滞在し、このほかりサイクル工場を見学したり、協議検討、情報交換を行いました。私たちの面倒をみてくれた衛生局長は、ジョー・デイ・フォスターさんの薫とした才女で、もともと町の弁護士さんでしたが、市長に乞われて局長を務めています。市長が変われば、また弁護士に戻るそうです。私が名誉市民になったのはまったく予想外で、市の広報が私たちを撮影していました。ハワイや西海岸は日本人でいっぱいです

が、彼女によると同市で日本人を見るのは、きわめて稀だそうです。この旅で旅行社は各市に通訳兼ガイドの女性を用意してくれていました。ほとんどがアメリカ人に嫁いだ日本女性です。いかにも素人っぽい人が多いのですが、それぞれの人がドラマを秘めているでしょう。

愛過去に異国でガイドする女

アメリカへはメンフィスから入りました。実はこのとき私は入院手術の直後で、まだまだ要注意状態でしたが、夕方メンフィスに着いて、早速ライブハウスへ、本場のブルースを聞きに出かけました。禁酒法時代に地下賭博場と蜜酒で売ったビール通りです。生演奏の衝撃は強烈でした。この街はまた、ロッキンロールの帝王エルビス・プレスリー活躍の故地であり、彼の没後三時間で、八万人のファンが忽ち当地に押しかけたといえます。

翌日、全米的なりサイクル組織BFIの工場を見にいきました。日本における状況と比較していろいろ有益でしたが、専門的な事柄を本稿で述べることは控えます。それにもうひとつ、最近国際社会で、アメリカの人権問題における教師的な言動がめだっています。この旅ではアメリカ国内での実態にふれることが多かったわけですが、それについての意見は別の機会にゆずります。

ニューオリンスズではミシシッピ河畔のフレッチャー・クォーターが、一九世紀南欧風の町並をみせます。かつてフランス領であり、一時はスペインに属していた歴史が、アメリカでは他にみない情緒を生み出しています。ここでも夜の町を歩き、ジャズクラブをハシゴしました。迫力満点、発祥地だけにパーボン通りなど、町々にジャズがあふれています。

ここは低湿地で海抜マイナス一・五米、沼地には鰐が棲み、密猟も行われています。お墓も地下水が多くて埋葬できなため、石造りのほこらに似たものに納め、地上に並べてあります。古格ある町に、映画にあった「欲望という名の電車」が今も走っています。

ガス灯の似合う地区から街が暮れ外輪船待って黄色短肢の群

欲望が失せた電車のただ走る

マルデー・グラは二月頃行われる目いっぱい熱狂的、盛大な祭です。次々とゆくパレードの巨大な山車からビーズのネックレスやコイン、おもちゃ、まったく意表を衝いた品などが投げられます。古川柳風というところ

フェスティバル乳房を見せがむなりに、ビーズをたくさん集めると幸運が訪れると信じられ、"Show Your Boob" と呼びかけると、ビーズ欲しさに女性たちがシャツをたくし上げたりしてくれるのです。

老心ゆづり

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

ベッドから知識を貰う介護法
 オフサイドの知識もなしにオレオレ
 月並みの仕事を守る公務員
 月並みな生活ガラリ妻病みて
 月並みな暮らしに溶けて無位無冠
 月並みの暮し同士で仲が良い
 適切な人選に押す太鼓判
 乾杯の音頭カンバイだけ一語
 ぴったりの言葉みつけた句も躍る
 適切な処置のおかげで今に生き
 適切な判断妻の勘やえる
 当面は嘘でつくる母の弁
 当面の敵はなまけている自分
 百均で当面のもの新所帯
 当面はベッカムヘアでいばつてる
 当面の敵は母さんなんだろう
 和やかに仏を偲ぶ高野道
 句会終えみんなの顔は和やかに
 愛子様今の日本を和ませる

野添 呂万 昭二 笑司 仁緑 東吉 ゆり子 欣之 一脩 路子 狸村 さよ子 幸生 苑子 けい子 ダン吉 房枝 和美

和やかな顔百歳の笑いじわ
 ジジババに心和ます孫笑顔
 母さんがただ居るだけで和む部屋
 和やかに話がはずむ三世代
 園児等に老人ホームとんでる
 W杯茶の間も和む勝った夜
 和やかな囲炉裏民話を聞きながら
 和やかな顔でしつかり儲けてる
 赤ちゃんの寝顔に和む部屋の風

三幸川柳教室

三宅

保州報

余生幾何善人というイメージで
 ポイ捨ての缶が見抜いている心
 人許すたびに心の角が取れ
 心の窓素直に開く鍵が無い
 心頭滅却結果は後へついで来る
 病窓に心が揺れる千羽鶴
 二心ちらり掠めた自己嫌悪
 筆先に心読まれた乱れ文字
 天の邪鬼時計の針を逆回り
 急ぐほど時計の針が先回り
 音立ててみたい時あり砂時計
 介護の手なければ止まる砂時計
 砂時計の高いくびれを妬いている
 帰っただけで母の時計は止めてある
 同じ轍踏まぬ味方のアドバイス
 味方には嫌われ敵に愛される
 大金に味方の陣が揺れている
 味方だと思えど鳩も鷹もいる

みよ子 英雄 守 盛之 鍊太 弘子 蛙城 穰一 俣子 桂香 純子 利治 健三郎 公子 イセ 町子 敏子 和代 碧 伸二 登美代 章子 美子 三千子 正匍 起世子 マリ子

前向きの姿勢に神も味方する
 必ずや妻が味方と限らない
 終生の味方としての辞書の嵩
 味方から受けた矢傷が深すぎる
 自画像は四Bで書く太く書く
 エンピツが本音吐いてる綴り方
 自分史に鉛筆なめた疵がある
 鉛筆をなめてすじ書き曲がり出す
 鉛筆もわたし似てすじ書き曲がり出す
 すぐ消せる鉛筆がいいざんげ録
 人類はみんな味方のはずなのに
 紐付きの鉛筆でくるアンケート

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

栄之進 栄太郎 昇 嘉平 正一 鉄治 和子 みね 栄之進 澄子 万の 秀夫 尚士 重人 義一 稲子 求芽 五月 高栄 柳宏子 磯 しげお

更年期どこ吹く風の快気炎

人生のけだるさ知った更年期

更年期プラス志向で謳歌する

腰据えて不惑女の更年期

更年期すぎる浴衣で更年期を踊る

ささやかな抵抗作句でうさ晴らし

生きざまの下手な夫の靴みがく

理由ありと知らずにのった玉の輿

娘また妻に告げ口して困る

世渡りの下手な男のなま欠伸

父の日を父の顔して畏まる

宝もの抱いて蛭を持ち帰る

母と子の絆を飾るカーネーション

梅雨本番しばらく雨と根くらべ

東大阪市川柳同好会

森下

愛論報

時刻表に触れると雫する命
お別れね終着駅の時刻表
日に三度過疎の寂しい時刻表
犯人の顔を知ってる時刻表
大胆に切った髪から夏になる
バラ一輪したたかにして大胆に
石の地蔵の大胆さには負ける
春の乱家のリズムは滅茶苦茶に
方言のリズムが風に心地よい
برانコのリズムで本を読んでいる
のんびりのリズムをくれる象の鼻
海峡の夕陽が明日の幸を呼ぶ

泰雄 活恵 庸佑 武史 節子 晴美 治二郎 スミ子 克治 紫香 満寿蔵 無禄 孝一 比ろ志 諷云児 雅文 ばつは 猪太郎 とみを シマ子 賢子 定男 柳安子 章久 太郎 萬的

諦めぬ夢で幸せ呼ぶつもり

母さんと何故か無性に呼びたい日

許し合うふたりの胸に鍵はない

少年の心を開ける母の鍵

宝宝箱の鍵が謀叛をそののかす

カギっ子の背なへ夕陽が重すぎる

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら

定退を待ってたように老母が呆け

晴耕雨読土を守って七十年

我が腕で全て仕上げた千枚田

万才を唱えた腕に悔いはない

赤い糸続いて今日も支え合い

腕枕愛し寝顔で外されず

名調子話すガイドに拍手薄く

腕力の値打ち下がった近代化

快晴だ赤い服着てシヨッピンダ

エプロンの父カルチャーで腕を上げ

この愛の契り金塊より重い

仁王門くぐり人間らしくなる

タンカ切り事の次第の腕っ節

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

横文字が老いの頭をいじめだす

ほろ酔いの道には薄い月の影

みごもって頑固親父の許可が出る

妊婦服の母さんとても幸せそう

永田町大人のいじめ見ておれぬ

薄命な筋だが美人とはいえず

朝子 良子 美弥子 あや子 湖風 愛論 ひかり あきら 治延 いさむ 八重子 貞月 寿々女 吟笑 かおり 放任 賢 輝夫

ないかしらいいじめを溶かす新薬は
恋をして孕む責任とつてやる

竹原川柳会

時広 一路報

句碑になる石を探している風だ

粉ひき白母は働きものでした

捨て石の野心を誰も気付かない

座るとこ座って石が光り出す

下流へと石逆流わらず丸くなり

石だたみますます古都を深くする

石一つ何も刻むな俺の墓

母の樹を眺める位置に庭の石

すだれ掛け私も部屋も夏になる

ブランターの中に咲いているよ夏が

老い二人昔話に若葉萌え

佳句地十選 (8月号から)

井上富子

キャンセルをしたいが指輪はずれない

新緑へもう落ちつかぬ絵具筆

むころう佐賀の人氣を一人占め

腕白も餓鬼大将も見えぬ街

遠い絵になつてしまつた肩車

外泊は一生出来ぬかたつむり

デフォルムの中で踊っている写楽

古希近く晩成説に赤ランブ

指切りは遊びころでしたつもり

論吉つあんの人氣に誰もかなわない

操子 多哥由 蘭幸 栄恵 一幸 節夫 笑子 幸子 万年 半覚 千枝 史子 孝枝 佐代子 虹汀 昭子 幸子 哲男 大八 裕峰 千代 楓案

融通を利かせて世間広くする
ブランコの背中やさしく押しつけてくれ
友でたき孫の報告はすんでる

なんどなき友になる友の言葉じり
友情が海越えバスに乗ってくる

さくら貝共に探した友の計や
サポーター世界はひとつ友となる

長生きに浮世の風も味方する
落ちこぼれ拾って貰う縄電車

縄張りには森羅万象あるものか
縄のれん五人みんなで聞いてくれ

縄をなう手の温もりが伝わるよ
お祭りへ長老が纏う左縄

泥縄より先手先手と攻めている
一筋縄でいかぬ先祖が居たらしい

この村の藁縄 龍になる祭り
神様が降りてくれた縄梯子

京都塔の会

都倉

求芽報

蛸のように墨を吐きたい時もあり
蛸の眼を見ないで頭切り落とす

蛸のように吸引力のある女
一匹の蛸の手土産手をつかぬ

墓碑銘が苦むしている流入墓
伏見よいと銘酒の味見して帰る

墓碑銘の二十歳前後の兵ばかり
おりおりの色と香りの京銘菓

墓碑銘に時代を生きた誇り秘め
親の説教 肝に銘した振りをする

汎美 比呂子 笹舟 房子 淑子 民恵 夏喜 厚子 節力 年子 青居 正宏 静風 不朽 一路

番犬も長なが寝そべるだるさかな
気の長い男のだるい話聞く

山晴れて足のだるさも苦にならず
ひまわりも頭を垂れるだるい午後

友去んでけだるくみてる遠花火
訂正を告げる広告小すぎ

訂正印ぐらないなほでも押すぞ
訂正の消しゴム私と仲が良い

絶対に訂正はせぬ余命表
訂正で切り貼りだらけを生きている

訂正をして身辺を守つとく
要領よく訂正しているイヤリング

しゃべってもしゃべっても昔湧いてくる
砂浜に春を確かむ素足にて

少年の日にあこがれたタカラヅカ
貧乏性が少し短気になりました

母の日の花に資格を問うてみる
僕の隣に風座らせて電車待つ

検尿のときとおんなじ紙コップ
羊羹を分厚く切ると茶が旨い

川柳大阪

高木

信酔報

やめへんで酒が葉の人生や
夢を抱いてすいすい泳ぐ鯉のぼり

ずばらする日々が嬉しい定年後
イライラが昇降口をにらんでる

アフリカの四角い太陽見てみたい
外は雨一日ずばらで過ごそうか

なんやねんそんな無理言っわしや知らん
吹笑

高栄 庸佑 満子 克治 百合子 英一 福子 典子 ルイ子 幸代 紫香 メ女 てる 春蘭 正坊 達子 年代 武庫坊 諷云児

一徹を曲げぬ親父の酒の量
滔々と流れる水にあるいのち

永久に探し続ける青い鳥
風が好き頬をなでゆく風が好き

エプロンの白さは永久に平和なり
泳がせて証拠をつかむ法の知恵

食料は配給になる有善法
百になるまで人間やめへんで

生きるも死ぬも隠れるほどの事もなし
九条は永久平和の証です

DNA見るまでも無く親子です
御馳走も箸の持ちよで不味く見え

何食うもうまいまいで良いしつけ
長生きの秘訣おいしく食べるべし

共稼ぎ深夜の風呂で語り合う
靖国の不満は分かるけどしかし

注ぐひとの心が酒にのりうつり
食い意地が張つてる私色なし

一生涯貫く仕事持つてます
大物の料理疲れ永田町

母さんの泳ぎ血となり肉となる
好き勝手言える自由にある平和

人生も潮の流れに逆らわず
人生も潮の流れに逆らわず

ロース川柳会 (前月分) 山崎

君子報

梅干してやがて娘は母となる
明日のこと分らないから夢を抱く

年プラス体マイナス口プラス
足腰が我が年輪を告げに来る

柳弘 一步 青道 川童 洛醉 鉄心 金太 重人 すがお 敏 利昭 ひろゑ 春蘭 喜楽 直巳 本蔭樺 民子 智子 宏 弥生 柳宏子 信醉 雅子 みつ子 キク子 トミエ

うず潮に目くらくらと大鳴門
東大寺英語べらべらバスガイド
わびさびの温き英語が苦心する
潮満ちた妻の化粧はねんごろに
ロンドンに暮らして日本語を忘れ
止められて困る小言をためておき
片言の英語手足を借りた旅
小言いう内はたしかと母介護
潮風が男の色に染めあげる
潮騒の枕へ寄せてくる昔
ライバルの小言対角線で聞く
一線を越えると毬がよく弾む
英語で問えば日本語で返事
あげ潮に乗った油断の落し穴
潮の位置守りきれない温暖化
ひとしきり済んだか小言眠り出す
坊さんも英語しゃべってするガイド
老漁夫の目に黒潮の海のもの
氾濫の英語に迷う錆びた脳
幸せは小言のいえる人が居る
小言など言えぬ僕には職がある
極楽に行けない違反くりかえす
潮が引く静かに母は目をつぶる
日本語も英語も鹿はおじぎする

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

扉あけ皆の笑顔でホツとする
旅先の由緒ありげな大扉
愛想よし男嫌いでもつている

千恵 糸子 吉太郎

むつみ 秋泉 佳子 とし子 あやめ 春蘭 春雄 絹子 真理子 富子 茂雄 恵美子 聰一 朝子 直子 洋子 睦朗 和夫 道子 良一 弥生 國治 秋雄

不愛想な寿司屋おあいそ目玉剥く
愛想笑い絞れば苦い一雫
愛想もほどほど誤解する人も
愛想が悪くて味の良いお店
わだかまりかくし愛想年の功
控え目な愛想不ムの花が咲く
遠い友写真を入れた文がくる
はくの書棚に今も谷崎芥川
ネコに結うリボン小粋にパリ祭
気づいたら似合いの人は側にいた
食事会満足そうな友の顔
体操はリズムに乗らず鳥鳴く
控え目な語尾に帽子がよくにあう
黄昏の鏡に嘘を暴かれる
飛んでゆけ明日を信じてタンポポよ
W杯お祭りすんで地図一つ
梅雨に入り違う顔して会いに来る
いたどりや眠り易きはいつのこと
結んで開いて少し疑わり深くなる
ソーダ水しゅわつとお遍路がとおる
有事有事と危いジグソーパズルかな

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男報

自画像に涙なんかは禁物だ
極楽へボクが行くのは当然だ
紫陽花と女房の顔がよう変る
衝立の向こうに話もれてくる
背信へ痛み傘が深くなる
血筋だよ気が強いのは当然だ

洋一 主一郎 (蔵)悦子 (下)幸子 (澤)裕子 美穂子

孝一 比ろ志 昭三 紫香 幸子 恵子 正子 光穂 里江 久子 節子 東園 寛之 満寿蔵 義芳 勝巳 武庫坊 薫 年代 静 芳子

当然だ自分の意見曲げられぬ
修羅抜けて鳥の囀りいとおしい
リストラの風にダウンのお父さん
いっぺんばんで忘れられない人となる
振り向かぬ覚悟もできた背を伸ばす
サッカーを俄フアンが盛り上げる
先祖の田ダウンは出来米作る
贈贈にダウンしたのが落ちこぼれ
神仏願ひ禁じて風が止む
カウントダウンが緊張始めだす
当然だ飲む打つ買うで嫁も逃げ
仏の眼慈悲は無言で罪誦す
禁止するばかりじゃ子供びないよ
禁煙だガム風船で遊んでる
父の貨車ダウンしたのか空っぽだ
子は親のすること真似て当然だ
顔のしわかくせぬ歳だ当然だ
禁酒禁煙口が痒くてたまらない
禁止手は命賭けても使わない
給与ダウンリストラよりは良しとする
牛を食う国が捕鯨を禁止する
多数決当然だけど割り切れぬ
ダウンした父に逆転劇はない
ノックダウンされる勝負は逃げて勝つ

川柳ささやま

遠山 可住報

のびのびをすればひっくり返りそう
のびのびと半紙はみ出す筆の跡
湯の町へ行く約束をして別れ

恵美 純子 多美子

はつ江 春名 益子 美雪 一京 昌鼓 茂登子 (故)多哥由 一粋 由美子 喬水 保子 (門)節子 良雄 宗明 (前)一枝 一瑤 金祥 悦子 (西)悦子 無限 雅女 毅 孝男

ヌード見た機嫌内緒で終えた旅
喜寿急ぎ卒寿残して旅に出る
どん底を抜けて悩みを笑い合っ
厳しさを抜けば優しいお母さん
脳味噌の底から抜けぬ鯨尺
フルムーン決めていながら旅立たれ
レモンティー独りの部屋で濡れる
出る杭は打たれ痛さにも耐える
ぶらり旅夢の中です恋人と
濡れた手に宅配便が届く朝
裸婦の湯欲しいわたしも胸の盛り
げんまんの指から嘘が抜け落ちる
一泊へ妻の荷物が大きすぎ

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

風鈴が昼寝を誘う音で鳴る
水平線かもめになった尋ね人
バランスのよい距離にいる嫁姑
少女気分抜けないままの母の趣味
梅雨寒に片付けた服出し重ね
一輪の花で心和まして
海よりもブルーを選ぶおばさん族
我がクセは可愛いものと独り言
家計簿がバランスとれず火の車
嫁はんにはバランスをとる親孝行
初恋を西と東に裂いた駅
荒海を夫唱婦随で舵をとり
でこばこの夫婦で笑い声絶えぬ
ピアノ連弾バランスピタリ姉妹

美智子 八重子 とみ子 靖子 つや子 かね子 君代 穂子 朝子 開子 美緒子 寿子 可住 鹿太 その 幸子 江美 玉枝 カズ子 よし子 秋子 信子 耕治 龜与子 まさ 伊サミ 孝一

海びらき袖先のカモメもベアらしい
賞味期を過ぎた二人の日向はこ
歯に衣を着せぬトップのいぶし銀
これからの思ふ潮騒聞きながら
缶ビールシュッと今日を打ち上げる
公園で母を待つてるひとりっ子

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

W杯まだ残つた祖国愛
注文は古稀のしるしの祝盆
無駄長の祝辞汗かく夫婦鯛
リハーサルなしで初孫抱いている
減反の田んぼに驚のバレリーナ
マイペース六根清浄唱えます
新婚の窓のあかりが赤く点く
まむしなど食べてこの夏過こそうか
よく効いたやつぱり毒だ昼の酒
墨客に学ぶ絵心詩心

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

そだつ豆ジャックの夢をのぼらせる
すくすくと老いたようだが多事多難
父の残した林 すくすく育ち
すくすくと梨の徒長は元氣よい
盆栽にすくすく伸びた顔をさせ
習慣を変えてすくすく伸びる芽よ
稚鯉すくすく案じてる池の端
年取つて少しづつ母わかりだし
外人が日本方言しゃべつてる

義芳 満寿蔵 正治 澄子 求芽 紫香 兵八郎 輝夫 晴翠 水笑 勝視 高明 虹汀 四郎 正剣

食べ歩きやつぱり鹿野蕎麦がいい
相席がジロジロうどん味がない
新婚の旅のスタンブ薄くなり
鹿野そば大阪行き汽車に乗る
記念樹が香り豊かに伸びている
結婚の記念日なんであつたかな
金婚の記念写真を撮つておく
形では決して残さない記念
毎日を記念日として大切に
記念日に赤い魚とバラを買う

すくすくと育ち逃げだすかくや姫
伸びざかりカジュアルック間に合わぬ
裏庭の松すくすくと老いている
すくすくと伸びる垣根を越えてから
放流の鮎すくすくと中学生
すくすくの果て百万本の爪楊枝
雑草がすくすく伸びるのが憎い
深呼吸してはすくすく天を衝く
水滾りのちを繋ぐ川になる
よろこびが稀に滾れば生きられる
ふるさとの川面に滾るのか情け

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

強敵と見るや吠えつく癖がある
花一輪供えペットの土饅頭
まんじゅうを買つた義理に縛られる
蟬に残して風になるあなた
残照の間で包丁研ぎ直す
商売をやめたら敵も遠ざかり

和子 くに子 茶子 弘子 久枝 実満 睦子 孔美子 房子 忠良 公子 みさ子 喜与志 かつ乃 汲香 盛桜 はるお 諷人 みどり ひろ子 螢

残された余生と言うにはまだ早い
残り火にのんびり句読点を打つ
ライバルのお陰と思う今がある
強敵の汗はいつでも光つてる
敵味方垣根を越えてポランティア
置き手紙翔んでる妻のひとり旅
ケロイドの残る戦はもういらぬ
残された男おろおる飯を炊く
温泉またじゅう近所に配り旅自慢
許せない理由がためらい傷にある
優しさはあんまんに似た丸い顔
残尿が続き自信を喪失す
あんまんにしつとり詰まる母性愛
戦後史や肩を抱き合う敵味方

城北川柳会

川久保睦子報

ストレスが溜まる正しく生きて
母の日は亡母の顔見る西の空
連休で下宿の孫が笑顔見せ
苦労した年金暮し楽に生き
涼しそうな柄でも暑さ変らない
欲しそうな柄でも暑さ変らない
大福の母が亡母を呼んでいる
キリストもアラも戦い止めさせて
結ばれて二人の朝に陽が昇る
隣には早ように母の日が来たぞ
終点は無いと悟った今の地位
本心に触れてくるので好きになる
さわやかな小さん師匠のフィナーレ

隼人 順風 慕情 銀波 ふさゑ 花匠 雅城 愁女 一蛙 黙人 花峯 一花 五楽庵 春蘭 トヨ子 登美子 東雲 求芽 ただし 柳一 達子 久留美 とし子 昭子 はじめ あい子

かわはら川柳会

上田 俊路報

知らなんだ英語が読めぬ外交官
ウイルスが心の隙間突いてくる
少しだけ譲りひとりの席が出来る
ともかくも賞味期限が今日なので
オイと呼びハイと答えて五十年
ナイーブな老母の胸打つ数え唄
主義主張通して敵がひとり増え
不器用で隙いっはいの言葉じり
亡命の悲劇幼女はまだ二歳
心配も一緒にカメラ飲まされる
呼びに来る使い勝手がいい男
ストレスを溜めて家購入車買
真つ直ぐに生きた自惚れなら一つ
まわり道慌てることもない余生
自惚れを下地に混ぜてする化粧
血に等しい水の御恩が返せない
父の日より母の日に寄る子供たち

政子 典子 ひさ乃 あやめ 史風 千里 志華子 倫子 重人 朝子 照子 千歩 順三 高栄 公一 輪多朗 一薫 雅子 登生 寿子 泰良 悦子 余史子 俊路

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

逆立ちをすると背骨が嬉しがる
骨になる日まで女は翔んでいる
骨が鳴る油のきれた音がする
ストレスを捨てて故郷へ行く切符
一枚の切符が老母の解熱剤
裏切った切符を今も持っている
切符問題残し終ったW杯
言いそびれ小骨ささったまま帰る
いずれ跳ぶ切符一枚あたためる

喜美子 慶子 シマリ 弘直 アキ あずき 香住 欣史子 能子 春枝 天雀 瑞枝 千春 すみゑ 田鶴 てい子 玲子 やえ 恵子 すみこ ふみ 麗 富美子 千代

祭りから祭りをあるくたこやき屋
歌番があつて今日は早じまい
大声で歌つて今日の運ためす

いづも川柳会

佐藤 治代報

セロハンにころ包んでさし上げる
これ以上透明ならば壊れそう
私を透明にしたレントゲン
透明な水で警戒して泳ぐ
透明になるまで笛を吹いている
透明な人だハダカの様だ
皺の手を合わせ寒いから抜ける
持ち札に惑う男に陽が沈む
あれこれと惑わずヒリオド打つておく
石ひとつ置いて流れを惑わす
キラキラと蛍の数を惑わす
肝心な時に惑うから転ぶ
決断がつかないままで表を刈る
手押し車へ麦秋の風乗せて押す
麦秋の風がふんわり乳にふれ
麦秋に猫はのんびり日向ぼこ
一本で立てば淋しい青い麦
穴道湖が染まると湧いてくる勇氣
保護色に染めて明日に生き残る
平凡な西陽に染まってからのウツ
まだ染める余白残した夢を追う
気に染まぬことば心に蓋をする
髪染めて見ても所詮は皺が邪魔
嬉しくて波打際に佇つている

晶子 八重子 日枝子
きみえ 玲子 茂美
ちかし 章峰 文子
満江 昭二 多輝子
松丘 裕 桂子
美江子 竹夫 蘭水
まこと すみこ
町紅 芙佐子 治代
多喜 寿美 紫見
歌子

波かぶり被り苦境を越える舟
波がしら亡夫の頑固が置いてある
鳴き砂の過去は哀しい波の音
大波小波どんと捌いている女房
温もりのことばやさしい波が立つ
人の波掻きわけ疑惑の人が行く

川柳塔まつえ吟社

津川 紫見報

行灯は温もりのある字を浮かべ
行灯に墨絵が浮かぶ夏祭り
行灯へ老若男女輪が踊る
行灯の光の中にいる女
めらめらと燃えたくなってきた行灯
行灯が昔のことを話し出す
わたくしの歩幅夜空でよく転ぶ
夕立が去つて夜空は透かされる
爆弾の音をどこかで聞く夜空
いちばん先私の星が出てくれる
あやしげな雲が流れてゆく夜空
回り道無駄ではなかった星明り
野良猫が眠る地蔵の膝のうえ
まだ迷いあつて地蔵の前に立つ
時々まは横になりたい六地藏
今夜だけ二合で祝う地蔵様
満腹の地藏は道を教えない
湖眺め悟りを開く地藏尊
駅前ホテル戦争ビルラッシュ
ホテルから波の音きく夏の旅
七夕の恋を包んだ雨のホテル

芳枝 多賀子 房枝 昌枝 久子 れいじ
邦代 房枝 注湖 ちかし 俊一 治代
きみえ 秀子 義良 小鹿 多博子
宏 ちえこ 桂子 与根一 茂美 知恵子
玲子

高層のホテルで旅情異国めく
昨日より輝いた顔ホテル出る
ホテルから発つ幸せな顔二つ
参加店入出みこして品揃え
俄雨予想外れの店じまい
人間が好きで人出の中に居る
ハナエ・モリまつえ温泉人出呼ぶ
夜店の灯子供の夢が揺れている
泣きじやくる迷子人出をかき分ける

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

久しぶり恩師に会つた佳日和
徒然草小脇に歩む北畠
近いのに何度も聞いて来たところ
偽りのページも抱いて自分史よ
山の宿偽名使つた甘い過去
偽りが平気と言えぬ無骨者
偽りの言葉が踊る外交戦
燃えましたあの偽りで冷めました
整形をしたと釣書に書いてない
病む友を優しく嘘で慰める
独り居の明日へファイトを呼ぶグラス
良い夢を見つづけましたこのグラス
乾杯のグラスの音の心地よさ
フラメンコ赤いグラスのように舞い
晩酌のグラス一杯生きかえる
ベネチアで買ったグラスは飾るだけ
本心を隠して酔えぬグラス干す
酔つてなグラスに法螺が浮いている

静恵 多賀子 町紅 政子 (安)幸子 崧丘 日出子
すみこ 紫見 忠宏 昭吉 久仁子 昭平 昇 さとみ 美代子 志洋 吐来 敦子 フジ 専平 真一 みよ子 絢子 一知

乾杯のグラスは高く上げて飲む
肝心なときはうろろうる妻は留守
徘徊にびつたり添うて夫婦愛
うろろうとしなないでほしい僕の前
捜し物おでこの眼鏡じゃないかないな
うろろうに妻の磁石がすぐ作動
うろろうとしたらオオモノになった
うろろうとただうろろうと妻の死後
無洗米妻ほどこまで手抜きする
こしひかり間違いないかもめてる
コシヒカリやはり日本の底力
勤勉を形に残す千枚田

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

結び目を解くと見えてきた答
悪友という恰好の解毒剤
難問を解くと訣れの絵になった
解凍をしたカプセルが喋りだす
結び目を解けば古傷 一二三つ
人生を解く鍵 菩薩からもらう
どの指を解いても同じ自分の手
話し合いやつと疑問も解けました
母となる自覚へ息が乱れがち
水割りに白い小指の息づかい
息災でいるらし何も言うてこぬ
息切れを起さぬように手を抜こう
ひと息を入れて無心の口火切る
茶柱の立ったお茶ならひと息に
生きているのが面倒息を止めもせず

淑子 庸佑 たけし 一壺 かつみ りつえ 元紀 扶美代 耕子 泰策 重人 みつこ

大輪 保州 輝子 美羽 鉄治 三男 健三郎 三喜夫 結実 豊太 英子 順子 利治 稚代 克子

二人生み息切れしてた日記帳
絆という接点がある家族愛
点と線結ぶと見えて来るころ
接点を探り当てたか同居する
ときめきの接点で逢う天の川
点と線宙に浮いてるEメール
妥協する接点探る腹と腹
腹さぐり合い接点宙に浮き
猫嫌い妻と接点探り合う
ラッキーセブン愛の指令をまるく抱く
七難を隠したいのに隠れない
七つ道具に時々叱咤されている
七難の夫を捌く慣れた妻
七人の敵を味方にする度量
狸だよ七変化などお茶の子さ

岬川柳会 八十田洞庵報

乾杯のグラスで流すわだかまり
夕暮れに胸のときめき久しぶり
天神さん夜店のグラス今家宝
じっくりと練った祝辞でつまずいて
ワインいまあやしいまでに女の目
じっくりと名人戦の駒動く
退院後食べたお寿司のうまいこと
画仙紙にじっくり想い滲ませる
じっくりと考えた話月並みに
一昼夜煮込んだ味よトンポーロ
じっくりとモノも夢も目にしたい
じっくりと考えきめた人と居る

千寿子 佐代子 さち子 和子 富美子 怜 正博 佐一 寿子 優子 紀久子 美子 泰子 愿

洞庵 里子 俣子 みやこ 和香 昌夫 富美子 年子

間違つたテストじっくり補足さす
じっくりと構えて婚期見失い
満更でも無い花柄で手紙来て
泣き笑いドラマに湧いたW杯
天気図が伸び縮みして梅雨がくる
ハーブティー心の悩み一休み
サツカーで日の丸君が代呪縛解け
少子化で鯉のぼり減る青い空
ふるりは姉ひとりなり七回忌

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

食卓へ四季の彩どり添えて盛り
留守番へ渡しておいた箇条書き
留守番の耳をくすぐる街の音
土壇場で吠えぬ番犬飼っている
むっくりと無口な人が立ち上がり
土壇場で笑って耐えた福寿草
留守番の子供やっぱり風の中
土壇場で今更やめると言われても
無口から見据えられるほど怖い
からくりの筋書どおり踊ろうか

豊中もくせい川柳会 田中正坊報

傘一本若い二人の声はずむ
コンビニの弁当ならぶ山の昼
来る来ないのろい台風に焦らされる
進む手はのろいが仕上げ目を奪う
のろまっつい自分に悔いる妥協癖
いい話ばかりに見せてくる迷路

みつこ 勇 蛙城 芳子 信博 よし子 とみ 東雲 和美

都代子 実 禄骨 庸佑 萬的 求芽

迷路には居心地のよい場所もあり
迷路でも迷わぬ磁石持っている
貧乏性 喜寿返上のコマねずみ
しようもない話ばっかりするうちわ
紫陽花の滴 真珠であつたら
赤ちゃんが笑うと白い歯が光る
グランドキャニオン 迫力あつて目眩する
迷路など足で解決してみせる
人生は迷路ばかりの知恵だめし
迷路あり花園もあり恋の径
色街の迷路楽しむ 一人旅
初めてのまたここに出た迷路だ
いつまでも子らの出てこぬ花迷路
占いの迷路抜け出しゴールイン
迷路から抜けると空が高く見え
達者だな時間違えぬ腹時計
恨まれる事を知らずに生きている

川柳塔おとしり

原 みさを報

メ 女
正 坊
知 香子
しげお
満寿巳
慶 子
春
高 栄
タ ミ
英 子
則 彦
博 子
千 津子
玲 子
千里志
ただし
吉太郎

百日草お盆の花は手植えから
感情線ゆれて盛夏がやってくる
海開きサメがゆうゆう下見する
冷蔵庫おしいしい夏を溜めている
真心も一緒に包むお中元
夏風邪を笑つた人も病んでいる
二十歳の夏風化はしない初デート
百合が咲き紫陽花咲いて夏はそこ
お揃いの浴衣が跳ねる夏まつり
昭和史に忘れられない暑い夏
真夏日の木立黙つて耐えている
夏バテは梅酒がいいと酔つ払い
疑問符になるべく波は立たせない
酸欠の街はなるべく近寄らぬ
迷つたらなるべく傘は持つて出る
口にするものはなるべく自給する
バイキングなるべく多く腹の中
父さんの影はなるべくくみません
金がないときはなるべく出歩かぬ
両耳にピアス傾かないように

倉吉川柳会

竹信

照彦報

大 鯨
佳 子
せつ子
雅 通
風 花
野 草
黙 光
富貴子
紀 子
邦 昭
艶 子
道 子
登 美
雄 々
真 子
真 一
芙 美
仁 子
宏 章
みさを

破れた紙で明日を占う鶴を折る
帽子を取るととても恐い女
すばらしい嵐の朝の新聞紙
虎造や雲月聞いて針仕事
自負してる泥棒来ても金はない
もぎ取つて食べたい他所のトマトの朱
紙おむつとお世話になつた事がある
目を病むとラジオが目となり糧となり
鼻風邪でティッシュの箱が離せない
折り紙の鶴も兜も折つてやる
盆までに障子はります仏さま
慟哭の夏がラジオにありました
敗戦のまさか玉音耳の底
精魂をかけた墨の香うるむ和紙
天下取る気分青春今は夢
ラジカセに変身して今も生き
車でのラジオは眠気さましから
自転車とラジオ家宝の時もあり
南瓜胡瓜たくさん取れてひとり膳
ラジオ聞き真然な父が笑つてる
紙風船くれる葉屋さんが来ぬ
残すもの何もないとて色紙書く
陣取りの極意もあつたガキ大将

南大阪川柳会

吉川

寿美報

ゆり子
一 夫
修
和 子
和 枝
かつみ
重 忠
泰 輔
螢
や え
忠 良
日 出子
康 郎
志 郎
雄 々
小 生
悠 子
よしえ
睦 子
きみ子
常 代
照 彦
桃 花
雅 文
柳 伸
重 人

幸せの真ん中だから動けない
人間のルールの中に住んでいる
真ん中に座り四方の風を読む
パートで朝ドラを見て靴をはく
ああ老後僕にもあつたこの時間
残照へせてゆうゆう暮らしたい
回り椅子ゆうゆう医者鼻眼鏡
やがて来る悠々自適夢描く
夏だなあ脚線美人闊歩する
ただ今と虫籠のぞく夏帽子

陸 子
由多香
和 子
義 弘
幸次郎
清 子
庸 二
彰 雄
一 弘

北風に揺れたトマトが杖落す
日本を支えてくれぬ紙おむつ
映像の争いなくてラジオ好き
取り急ぎ飲酒運転だけはやめる
揺りかごをゆらし未来へママの夢
取る前に私は欲と言つておく
夕顔にしようか浮舟にしようか

賀寿忠
次 男
秋 草
十三男
喜美子
和歌子
石花菜

壮絶な生き様を見る蝉しぐれ
シベリヤの壮絶捕虜の生地獄
壮絶なバトル女対おんな
ひめゆりの塔を忘れぬ青い海

荒野さまよう悟り一つを手みやげに
ハローワーク出たら私は白くなる
一本の道でさまようのも試験
髪切つて五つ若やぎさまよわず
新発見さまよう旅もまた楽し
あとは判押すだけという割れ茶碗
核を押す手もいのちの一部です
念押しして押して六法手放せず
押さないで幸せこわす核ボタン
押さえる軌道をそれるつむじ風
押すも汗押さるるも汗車椅子
痛切に耐える耐えろと不況風
痛切に一本の藁ありがたし

長柳会

加島

由二報

邪魔ばかりしてたあの子が出世して
膝枕邪魔せぬように鳴る風鈴
蟬丸は正月そこへ連れて来る
滴りに命を貰う登山路
茄子紺の滴りも味香の物
告白をして居るときに蟬がなき
ロナウドの滴る汗は勝ちどきを
スパーの入口でする立ち話
一滴の君の涙を信じよう
みんなから邪魔にされてる居候
邪魔にした苗が可憐な花をつけ
子の邪魔になりたくはない万歩計
萎えてゆく心にレモン滴らす
晩学にいつも眠気が邪魔をする

シマ子
ダン吉
欣之
弥生
頂留子
きよみ
千里
柳伸
ミツ子
冬葉
春蘭
東雲
敬二
潤子
芳野
輝治
輝子
たけし
良男
武男
正史
一慧
和代

シャッターの前を横切る人の影
野辺を行くみどり滴る風の中
ペアグラス二人の他はみんな邪魔
名水が滴る熱い村おこし
炎天下汗が滴る二度の職
邪魔者にされないうちに逝くつもり
紫陽花の滴る中をぶらりぶら
賞与出ず滴りも飲むビヤホール
キャスターは水も滴る美女ばかり

川柳さんだ

北野哲男報

病院で同窓会とは言い難い
病院でばつたり会つて隠されず
長ながと通院したが今日無罪
病院で百まで生きる話聞く
梅雨晴間そは道場はざるを干す
晴れの日は人の心を丸くする
晴れて朝足踏み込んだ水溜り
大物が預金残高すく覗く
美智子様天晴れウィーンでピアノ弾き
なかなかに小銭揃わぬレジの前
小さいがハンコは重い荷を背負い
新聞のお詫び小さく載せている
国憂う男の茶碗小さすぎ
御利益は妻にください鐘を打つ

サークル檸檬

小林

一夫報

三和子
けい子
富美子
和子
正一
幸雄
直樹
正子
由一
久恵
歳子
敦子
サクラ
婦美子
正行
忠
章子
正和
藤朗
朋月
哲男
俊昭

行雲流水おだやかに加齢
タクトなどなしでも動くボランティア
奔放なタクトに積木崩れ出す
止めてはならぬタクト八月十五日
頑張れよりがんばつてねと言つて欲し
会者定難あちらこちらでどつこいしょ
デジタル時計現実だけを刻みこみ
正直な人のメリットデメリット
緋いて午後は古典の人となる
父のタクトに背いた記憶 蟬しぐれ
マドンナと甘いタクトに酔つている
響き合うタクトは捨てた凡夫婦
一歩引けば渡る世間もおもしろい

川柳やがわ

江口

白魚の指をはみ出す大欠伸
してならぬ時に限つて出る欠伸
ブライトを捨てたら欠伸しなくなる
父の日も父は欠伸をしてばかり
恋人のあくびそろそろ別れどき
披露宴の半ばで嫁が産気づく
お食事の半ばで走る塾カバン
ころざし半ばの頃はよく飲んだ
エリートの出世半ばの気の弛み
父の忌に読経半ばはでいねむりし
吊り橋の半ばあたりで覚める恋
財産と三途の川は渡れない
財産は揉め程度に残しとく
ケチケチと暮らしているが貯まらない

希久子
正坊
澄子
たもつ
智恵子
哲夫
遠野
楓楽
房子
みつ子
光久
保子
義子
度報
光子
勇太郎
磯
洋
修
波留吉
かすみ
弘一
三峰
朝風
朝子
順三
ルイ子

財産と比べられない子がふたり
上役と言つても部下はただ一人
上役もマクドナルドで済ます昼
上役に逆らいそれから見込まれる
上役と言つても腰の低い人
上役が巧みに潜る法の網
上役が掃り乾杯やり直し
上役の薄い財布を知っている
梅雨半ば入道雲も子沢山
エレベーター親友に他人が恐くなる
水臭い言つて親友金貸さぬ
浮気まだ妻は氣付いてないらしい
嫁さんが私の茶碗ばかり割る
嫁の知恵母は笑顔ではいと受け
たつぷりとお水供える原爆忘
子を庇うように曲つた母の背な

川柳藤井寺

高田美代子報

鈍くさいと言われ時計を進めてる
切れ味は鈍いが長く付き合える
この辺で一度は鈍くなるいのち
ワンテンポ遅れて弾む母の笑み
昭和史にフランチェスカの鈍い音
ガスの火を電話のベルがあわてさせ
軍歌しか覚えていないハーモニカ
ケチで鳴る人の大きなざるの漏れ
落ちこんだ私へ老母の鈴が鳴る
いい話になると耳鳴り邪魔をする
鈴鳴らす神がよそ見をせぬように

時弘 三郎 恵子 亜成 吉之助 庸佑 たもつ 冬葉 高栄 茜 とし子 仁清 利昭 一風 栄二

咲き誇る薔薇警笛を聞き洩らし
手の鳴る方へ行けば母に逢えますか
葉書一枚こんなに書ける恨みごと
一枚のはがきが縁で今一人
私だけ読める母から来たはがき
クロネコがいややというているハガキ
ハガキから金魚飛び出す夏見舞い
断りへためらいながら書くハガキ
余人には通じぬように書く葉書
有罪にならぬ程度に出すはがき
パリから捨てる男へ書くはがき
電文のように短いハガキ
絵はがきの名所はいつも晴れている
はがきからはみだしている父の鞭
おふくろの字が瘦せてきた国便り
拝復の後書いて消し書いて消し
追伸の母の便りを糧にする
どこへ行くのちよとお医者ハシゴです
習いたて暑中見舞いはパソコンで

ローズ川柳会

山崎 君子報

信心には遠いが米の飯拌む
天の川越す苦勞ならしてみたい
夢だけはまだ持ってます 眉月よ
星祭り二人の愛が煌めいて
すだれかけ噂話が視えている
七夕の短冊異国の娘も混じり
あの時の約束ビールの泡らしい
笹ゆれる園児の願ひ風にのる

美代子 絹歌 春蘭 彰夫 かつみ みつこ 喜代子 鐘造 史郎 瑠美子 重人 志洋 一知 花梢 惠勇 一筒 婦美枝 昌子 雅枝

ドンと来い暑さへビールグイと飲む
笹かざり園児が主役のお父さん
ビールだけで生きて来ました最敬礼
笹飾りこよりに上手な姉だった
大ジョッキ月もそろそろ出る頃だ
七夕に語り歩いた若かった
川柳クラブわたの花 吉村 一風報

ライバルの好きだったバラ手土産に
声援に押されて出来ぬ後戻り
あの時のあの一言が胸を打ち
メモ用紙いつものどこかへ逃げていく
亡命の幼い瞳胸を打ち
しゅうとめと言われて目から鱗落ち
ごみになる旅の記念を買つてくる
押し氣味に試合を進め負けている
ご先祖へ朝の挨拶鐘三つ
バランスいい母と妻とで出番なし
着ぶくれを押し込みやつと発車ベル
手を打って笑う明治の父と母
七掛けでハートも脳もまだ熟女
お人よし他人の風邪をすぐもらう
ライバルに引き離されて運にする
雨だれの音は過去から未来にと
親の年越ししんみり親想う
打つ待ちなく出方みてから策を練る
信号待ちやはり方になる火の始末
ライバルはピカソ セザンヌ ルノアール
グルメ旅茶漬が待つていた我が家

知佐子 美代子 民子 八寿子 明子 八道子 宏至 ミツ子 君江 春子 一風 幸枝 隆盛 晴美 恭一 奈良司 友甫 正道

W杯愛国心を呼び覚ます
朝の陽に茄子の花露目を覚ます
女神とも思うナースへボタン押す
ブライドを捨てれば肩のこりもとれ
女房としんみり話した事がない
通夜の席笑い上戸が睨まれる
酸性雨森と林が傘をさす
欲ばって我が人生を踏み外し
あの痛み耐えて嬉しや今朝の膳

堺川柳会

河内 月子報

仲直りしてるフルーツパフェひとつ
父ちゃんの虫の居所見てねだる
利口者策に溺れて自滅する
知ってても知らんぶりする利口もん
寝ぶそくの脳へ檸檬を絞る切る
ナメクジにいちこの味見先越され
スクラム組み大きな種でだますピワ
夕顔もわたしも人を恋しがる
夕暮れへ鍵つ子メール待ち焦れ
皮下脂肪くつついたまま居座られ
人妻も鎖はずしてイツキ飲み
吠えられても盲導犬は知らん顔
ひどい人苦しい時は居てくれず
夕焼けにもらった明日のエネルギー
フルーツで心を繋ぐ見舞客
火の恋も空気になっていくのです
黒一点フルーツパフェ食べてはる
定退後妻にしたがうのが利口

(木)たえこ
(赤)妙子

ますみ トシエ まさと
いつふみ 義明 春江 順生
つづや 鐘造 舞夢 日の出
アキ 八千代 りつえ
小 雪 惠 勇 梓
さくら 朋 月 なぎさ
冬 虹 龍 三 龍 三
伽 羅 尼 加 羅 尼
忠 敬

ばんやりとしてるが他人と争わず
夕陽見に誘うてくれる人がいる
馬鹿なのか利口なのかと噂され
メロンより旬の西瓜が喜ばれ
常日ごろ自慢話をしない人
夕立が来るぞ風鈴騒がしい
暑かった夕陽どっこいしょと沈む
ひっそりと暮すにしても要るお金
ひたむきに苦勞身につけいばらない
利口だと錯覚させる饒舌家
お利口な妻が呆れる物忘れ

川柳塔打吹

大森 孝惠報

嬉しいと字まで躍って笑い出す
もう一度咲くか愚かな欲笑う
会合でふざけて踊るお人好し
一ダース育ててまんだ生むと言う
酒吞めば裸踊りがでる男
躍る胸おさえて披露待つつ句会
愚かだと思わせておく処世術
愚妻にて悪ごさんした旦那様
伸びる芽を摘んでしまった愚か者
子煩悩はたえる親がちと哀れ
病む妻の愚痴は念仏だと思ふ
愚痴っぽい人のとなりが空いている
良い客が来たか飼いの犬に弱い
逞しい男も魔女の矢に弱い
逞しい鬼を手玉に取る女
逞しいお角力さんも怪我に泣く

月子 天笑 半銭 巳代一 深雪 泰子 美代子 彰 喜代子 世紀子 健吾
龍枝 澄子 晴光 泰山 紀美恵 博文 美美子 順子 京子 一夫 重忠 一揆 雄々 季芳 和子

逆境の中ではたえる雨蛙
逞しいお尻に惚れて尻の下
やると言う命すんなり食べました
仁王尊観音守り逞しく
石よりも愚かで転び方知らぬ
四面楚歌の海に抜き手を切つてゆく
胸躍る喜寿の春にも夢がある
笛吹けど誰も躍らん国になる
熱い血が今も躍つてなお達者
逞しい背中が金が居座らぬ
欲望が雑布僕はほたえます
東大を出てもルンペンにはたえるな
踊り出た釘が一撃受けている
逞しい父の背中が羅針盤

善江 和歌子 芳光 克枝 禎元 友楽 幸子 孝恵
かつみ 節子 孝恵

第74回 奈良県川柳大会

日時 9月16日(月)・振替休日 午前11時開場
場所 いかるがホール・2階小ホール
お話し 法隆寺山内 福園院 種村大超師
選者 「洗う」 杉森節子選、「カラス」
王利三重子選、「進む」 鈴木四郎選、
「乱」 古川洋子選、「土」平井綾女選、
「こっそり」 藤井義子選、「もしも」
坊農 柳弘選
◆出句締切 午後1時・各題2句以内・席題なし
◆参加費 15000円
◆欠席投句 10000円 8月末日締切
〒636-0144 生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23
中原比呂志宛 TEL・FAX 0745-17513655

第53回 西宮市民文化祭参加川柳大会

日時 10月13日(日) 受付・午前11時半
 会場 西宮市民会館 (市役所南隣)
 会費 1000円 (作品集郵送・各賞天地人賞呈)
 お話 泉 比呂史

宿題と選者 (各題2句・締切午後1時)

「つかむ」 大熊 純三 選
 「夜中」 今井 寛 選
 「中心」 西 美和子 選
 「物語」 門谷たず子 選
 「とんとん」 石井 冬魚 選
 「問題」 福島 直球 選

投句 10月4日までに投句料 (80円切手
 ×8枚) 同封。

便箋1枚に6題各2句計12句連記。

〒662-0023 西宮市城山12-8

水無瀬富久恵 宛 TEL 0798-73-4666

懇親宴会費 4000円 (当日受付)

共催 西宮北口川柳会・西宮川柳会

学文川柳・甲子園川柳会

第16回 堺市民芸術祭川柳大会

とき 平成14年9月15日(日) 13時開場
 ところ 堺市立梅文化会館 3階第一講座室
 堺市桃山台2丁2番1号

☎072-296-0015

(泉北高速鉄道・とが美木多駅3分)

おはなし「須崎豆秋と小島祝平の作品について」

河内 天笑

宿題 「ド ア」 河内 月子 選
 「骨 」 久保田元紀 選
 「綴 る」 小池 正博 選
 「立 場」 杉森 節子 選
 「ぎりぎり」 中田たつお 選
 「備える」 平松三恵子 選
 「味 噌」 藤田 泰子 選

(50音順)

席題 なし 各題2句 締め切り 14時

出句料 1,000円 (作品集、参加賞呈)

賞 各題秀句に呈賞

主催 堺市文化団体連絡協議会

後援 堺市・堺市文化振興財団

『全日本柳人写真名鑑』発刊について

日川協では全日本の柳人を網羅した「全日本柳人写真名鑑」を社団法人設立以来、5年ごとに発刊、好評を博してきました。前回から5年目にあたり、さらに体裁・内容を一段と充実した平成15年版を発行したいと存じます。皆様方には一人残らず、この名鑑に名を連ねられますよう、お勧めいたします。

資格 参加者は柳人であればどなたでも結構です。
 内容 各人ごとに、①氏名(雅号) ②生年月日

③職業 ④所属柳社 ⑤住所 ⑥電話・FAX
 ⑦メールアドレス ⑧顔写真 ⑨自薦作品
 三句(所定用紙があります)を掲載

体裁 A5判・本文A4紙約500頁・美装本
 刊行 平成15年3月予定(参加者に1冊送付)

参加費 4000円

締切 平成14年11月15日(金)

申込先 〒53000041

大阪市北区天神橋2丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

FAX TEL (06)(06)
 6 6
 3 3
 5 5
 2 2
 2 2
 | 2 2
 4 4
 3 3
 3 0

川柳塔唐津支部20周年記念句会

日時 11月2日(土)
開会・投句締切13時30分
会場 唐津シティホテル
J R唐津駅南口
Tel 0955-72-1100
会費 句会1000円 懇親宴 5000円
おはなし 名誉主幹 橋高 薫風先生
兼題 (各題2句 欠席投句拝辞)
「めぐる」「遊ぶ」「境」
「計算」「軽い」「雑詠」
連絡先 仁部 四郎
〒847-0082
唐津市和多田天満町1-2-13
Tel 0955-73-2262
宿泊は11月2日に先着15名の枠があります。
朝食付8000円(予定)10月10日(木)までに仁部宛申し込んで下さい。

吟行のご案内

川柳サークル卯の花

第8回「卯の花」吟行を下記の通り開催します。参加ご希望の方は氏名および乗車希望地を記入の上、川島諷云児宛9月5日(木)までにお申し込み下さい。
吟行日 9月27日(金)
行き先 有馬温泉と
キリンビール神戸工場見学
集合地 高槻現代劇場または
神戸市中央区役所前
行程 高槻現代劇場8:30出発→茨木IC
→京橋ランプ→中央区役所前10:00出発
→有馬温泉着11:00御幸荘花結びにて
昼食・入浴11:00~14:00御幸荘出発
14:10→六甲→キリンビール工場見学
15:10~16:10→中央区役所前着17:00
阪神・名神→茨木IC→高槻着18:00(予定)
宿題 「当日雑感」2句
費用 9000円
お願い 入浴される方は必ずタオルご持参
ください
連絡先 川島諷云児 TEL 0726-96-2765

平成14年度(16回)

NHK学園全国川柳大会のご案内

日時 10月20日(日) 午後1時~5時
会場 くたち市民芸術小ホール
国立市富士見台2-48-1
事前投句課題と選者(各題2句)
「学校」 竹本瓢太郎(東京)
「一杯」 田中八州志(東京)
「身体」 森中恵美子(大阪)
「放つ」 斎藤大雄(北海道)
「国」 尾藤三柳(東京)
当日投句課題と選者(各題2句・締切12時50分)
「楽器」 五十嵐修(神奈川)
「本音」 西来みわ(東京)
講演「川柳・東と西」 尾藤三柳
入選作品鑑賞 大木俊秀
(NHK学園川柳講座編集主幹)
事前投句の締切 9月2日(月)当日消印有効
投句は所定用紙使用、投句料(郵便小為替・現金書留)とともにお願いします。
投句先および投句用紙請求先
〒186-8001 国立市富士見台2-36
NHK学園 全国川柳大会事務局
TEL 042-572-3151
投句料 2000円(入選作品集代を含む)
主催 NHK学園

第4回「馬っこ」川柳誌上全国大会

応募期間 受付開始 5月1日
締切 9月30日
課題 「馬」2句(新作に限る)
選者
札幌 川柳社(北海道) 斉藤大雄
おかじょうき川柳社(青森) 北野岸柳
川柳はつかり吟社(岩手) 藤沢岳豊
明日香川柳社(埼玉) てじま晩秋
川柳研究社(東京) 野谷竹路
NHK学園(神奈川) 大木俊秀
川柳えんぴつ社(富山) 脇坂正夢
川柳塔社(大阪) 西出楓楽
光川柳社(山口) 早川双鳥
戸畑あやめ川柳会(福岡) 藤井北灯
投句料 1000円(郵便小為替)
◎用紙便箋大・たて書き
発表 11月3日
賞 市長賞外25位まで
(盾その他・発表誌呈)
投句先 〒028-0516 遠野市穀町6-17
鈴木南水 TEL 0198-62-4843

柳界展覧



★第5回鳥取県川柳文芸大会は7月14日166名の参加を得て、新日本新聞社5階大ホールで開催された。当日の本社関係者の天位は次のとおり。

金に負け口に負けても素手がある 鈴木 公弘
魂をすつかり抜いた花の毒 倉益 一福
★第20回記念夜市川柳大会は、7月31日堺総合福祉会館で開催された。出席者11名。当日の本社関係者の天位は次のとおり。

ちくはくな靴でコントをくりかえす 楠見 章子
わたくしが酔えば夫がしやんとする 齋藤さくら
一呼吸待てば優しい風が

■橋本多哥由氏(同人・鳥

▼ 報 ▲

染・松江市上乃木

吹く 中井 アキ
百態の風の涙を見た岬 太田扶美代

いい顔になった何度も泣いたから 河内 月子
旅に出て大きくなろう影法師 岸 桂子
十八の頃の気持で立つ港 高田美代子

笑いすぎた命そろそろ涙ぐむ 太田扶美代

▽ 出版 ▲

■富田蘭水氏(同人・出雲市)は、ボランティアガイド参考書『名所と川柳』を出版。郷土教育の一助のため出雲市内各所に配布された。A5版75頁、オールカラー写真入り。

取県・元ふくべむら川柳会長)は、7月23日遊泳中に逝去。69歳。

■麻生アト氏(同人・生駒市)は、7月30日病氣のため逝去。故人の遺志により近親者のみにより自宅で葬儀が行われた。氏は路郎師のご長男。81歳。

▼ 掲載句削除 ▲

■川柳塔別冊『橋高薫風叙勳記念川柳大会特集』P37上段5行目「酔うてまた人が憎くて恋しくて」7月号P112中段27行目の「人間と人間だから喧嘩する」の2句を本人の申し出により削除。

▼ 訂正とお詫び ▲

■8月号P11中段4行目、治安寺↓自安寺P111上段16行目、たもつ↓たつお P128上段16行目、杉野草平↓杉野草兵 P1294・5段2行目、松江市上

新同人紹介

乙倉 武史

— 紫香・柳宏子・諷云児推薦

山田 耕治

— 薫風・紫香・たもつ推薦

南原 正和

— 薫風・たもつ推薦

■常任理事会 8月5日、出席20名 ①川柳塔まつり 各係の準備状況及詰め ②

二賞選考関係者に日程・時間の確認 ③各地句会名簿

作りについて ④大会参加推進の準備 ⑤初歩教室担当者の件 ⑥四郎副主幹から会計報告に関する提案

■9月30日(月) 13時から

▽特別常任理事会 ▲

らアウイーナ大阪206号室

与以上の役員はご出席下さ

い。議題等詳細は10月号で。

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	14日(土)午後4時から 台風・しなやか・日曜	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳 ねやがわ	15日(日)正午から 玩具・不思議・サービス 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	15日(日)午後1時半から おだてる・染める・プレーキ 自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から ステッキ・輪・拾う・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市烏江町1-3-5-801 田中正坊
城北 川柳会	21日(土)午後1時から 風・信じる・リズム・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会 梨花	21日(土)午後1時から 高貴・直す・×・ウフフフ	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室(鳥取駅南) 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸和田 川柳会	21日(土)午後1時半から 伝える・手相・ど忘れ・納得	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
はびきの 市民 川柳会	22日(日)午後1時から ハッスル・うんざり・狂う 「勇氣」	羽曳野市立陸南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)午後1時から 裂・振り向くな・ジェラシー	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
南大阪 川柳会	25日(水)午後6時から 落書・和・イタリア・凶日	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から メルヘン・実る・ためらい 妥協	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から 曲がる・美人・メニュー・波	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
京都 塔の会	30日(月)午後1時から 魔・あやす・安心	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	30日(月)午後7時半から 台風・案山子・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川柳塔 わかやま	1日(日)午後1時から 九・距離・わざわざ・ミックス	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳塔 な ら	5日(木)午後1時から 待ち・傷・口笛	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北徒歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	6日(金)午後1時から 彼岸・結ぶ・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 唐津支部	6日(金)午後1時半から 喋る・煙・窓	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
富 柳 会	7日(土)午後1時から 螺子・貼る・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7日(土)午後1時から ほくろ・鷲峰山・見る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川 柳 会	8日(日)午後1時から シンプル・隠す・うるさい 脇役	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	9日(月)午後1時から 交差・元・ながなが・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	10日(火)午後1時から コンビニ・蹴る・深い	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10日(火)午後1時半から 越える・上手・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺麗太
高槻川柳 サークル 卯 の 花	12日(木)正午から 残暑・ほとぼり・焰 包装紙・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
堺川柳会	13日(金)午後1時から 気分(共選)・野菜・にもの(折り句)	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	14日(土)午後1時から えっと(沢山)・怪我・凝る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	14日(土)午後1時半から 風・高い・足	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘

編集後記

にするのは性差別と、現在授業の出席簿は男女の区別なく50音順になっている。参考のため聞いてみると、66年生まれの息子の嫁が高校のとき変ったぞうだ。

☆路郎賞・川柳塔賞は8月10日に締切られ、選考関係者は12日に事務所へ集合、厳正に一次選を行った。ク

☆男の子だけクンと呼ぶのも性差別という指導で、全員サンに変え、「男(女)のくせに」などは以てのほか、「男(女)らしさ」の言葉は勿論、考え方もダメ。

10月号に6賞10名が発表になるので、ご期待を乞う。

☆ランドセルの色分け廃止、体育の服装も同じ色のジャージにせよとの指導。恐ろしいことに「端午の節句」「ひな祭り」は、差別用語として禁句とか。

☆すこし以前から、公立小中高校でジェンダーフリーが教育目標の一つに据えられているという。それは、社会的・文化的に作られた性差別を解放することだそうである。と言われてもよくわからないが、要するに男女の差別はおろか、区別も撤廃することらしい。

☆その教育は国連世界女性会議に盛られた「男女の区別は後天的に作られたもの」という考えが基本らしい。こんな指導を受けた子が成人すると、男女の機微は消滅するだろう。川柳の将来も危うし!

☆内閣府の男女共同参画局や、文部科学省の男女共同参画学習課が音頭をとって推進しているとの事。別々

も危うし!

茄子の花

故事に「親の意見と茄子の花は千に一つも仇はない」というのがある。茄子の花には全く無駄が無いことに準え、経験を積んだ親の慈悲からでた意見は間違いはないという事である。

子供の頃、母はよくこれを引用し「親の言う事に間違いはない、よく聞きなさい」と叱った。娘が小学生の時、茄子を植え親

察させた。娘は茄子の花には全く無駄の無い事を知った。私はこの故事を教え「親の意見は聞くものだ」と説教した。娘は嫁ぎ孫ができ、休日には我が家に来る。孫と一緒に茄子を植え観察させて、茄子の花は必ず実を結ぶ事を教えた。

現代っ子の孫は何かを悟ったようだが、今後どのようにババやママに接していくだろうか…。

山口 光久

ひとこと

★小説「ピカレスク」(猪瀬直樹著・小学館発行)を讀んだ。ミステリー仕立ての太宰治伝である。太宰の文学上の師である井伏鱒二にかなりの頁が割かれている。

★太宰の自殺に井伏鱒二が問題にせず、被爆の凄まじい描写が絶賛されたが、もちろんそれは何人も被爆者の日記から引用、見方を換えれば盗用である。

★作者は「人間失格の……死のうとする太宰より、生きようとする太宰を描きたかった」という。最後の入水心中の遺書に太宰は「井伏鱒二さんは悪人です」と書き遣した。

★井伏の代表作の「山椒魚」「黒い雨」その他には種本があったという。「黒い雨」にいたっては全体の3分の2が被爆者の日記のリライトであるらしい。後に井伏はドキュメントであると苦しい言い訳をしたと言う。

★しかし当時の文壇は殆ど

書き遣した。

考えさせられた。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（11月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑選
 水煙抄 (8句) 奥田みつ子選
 愛染帖 (3句) 波多野五楽庵選
 茴香の花 (3句) 政岡日枝子選
 課題吟 (3句) 「喋る」 黒田くに子選
 「煙」 高橋岳水選
 「窓」 宮野みつ江選
 吐田公一担当

11月号発表 (9月15日締切)

12月号 課題吟 「駅」「午後」「反省」
 初歩教室 「ほどほど」

本社9月句会

とき 9月6日(金) 午後5時半・6時半締切
 ところ アウイーナ大坂 4階
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-67772-1441
 地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
 兼題 「イメージ」 山本義子選
 「嘆 呵」 寺川弘一選
 「転 ぶ」 木本朱夏選
 「錯 覚」 山本希久子選
 「広 い」 橘高薫風選
 席題 1題 当日発表(各題2句以内)
 会費 1000円 投句料 500円

本社10月句会は10月6日の第8回川柳塔まつり記念句会として開催します。

夜市川柳募集

第4回「三」三宅保州選
 ハガキに3句 9月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇二二年(平成三十四年)九月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六元一六九一四番

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

第17回 国民文化祭・とっとり2002

夢フェスタとっとりーふるさとふれあい夢づくりー

川柳大会

10月26日(土) 10時30分出句締切

(入選発表・当日句・選評 10時30分～15時40分)

鹿野町立 鹿野小学校 体育館

題と選者(各題2句)

「果物」

木野 由紀子 選

「輝く」

新畑 ひろし 選

「静か」

萩原 柳 絮 選

第2次選者

吉岡 龍城・今川 乱魚

磯野いさむ・橋高 薫風・大野 風柳

文部科学大臣賞ほか多数

交流会

10月26日(土) 16時～17時30分

国民宿舎 山紫苑(会費 4000円)

合同大会

10月27日(日) 10時～12時

(表彰式・記念講演会)

羽合町 ハワイアロハホール

○事前投句(締切済)及び当日入選句作品集呈

○川柳大会昼食代と交流会参加者費用は当日申し受けます。

問い合わせ先

第17回 国民文化祭鳥取県実行委員会事務局

TEL 0857-26-7857

FAX 0857-26-8127

第17回 国民文化祭鹿野町実行委員会事務局

TEL 0857-84-2299

FAX 0857-84-2598

主催 文化庁・鳥取県・(社)日川協ほか

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>